



私家版

(補綴2018年版)

建築家

山口文象の世界

伊達 美徳

表紙

山口文象設計 北鎌倉 宝庵（旧関口邸茶席） 1934年

裏表紙

写真上 創宇社建築会メンバー 左から河堀、竹村、広木、

小川、渡刈、山口（岡村）、海老原、野口（第8回創宇社展にて 1930年）

写真下

山口文象画 丘上の記念塔 1924年



目次

まえがき●5

第1章 建築と土木の融合●6

- Ⅰ. 自然と対峙する建造物 黒部川第2発電所と小屋平ダム■7
- Ⅱ. 溪谷のモダニズム 東電山崎発電所とダム■11

第2章 和風建築の現在●17

- Ⅰ. モダニズムと和風二つの系譜■17
- Ⅱ. TVが見る建築家山口文象とその自邸■21
- Ⅲ. 宝庵由来記―モダニストの写し茶室建築■25

第3章 モダニズム建築の現在●45

- Ⅰ. 街角のモダニズム山形梅月堂■45
- Ⅱ. この建築は残せるか 劇団新制作座文化センター■55
- Ⅲ. J・コンドルの和風と山口文象のモダンの出会い●62

第4章 同時代建築家の証言●82

- Ⅰ. 創宇社同人の竹村新太郎氏の証言■82
- Ⅱ. 山口の愛弟子小町和義氏の証言 二人の建築家の戦中戦後■89
- Ⅲ. ブルーノ・タウト日本日記の証言■108

第5章 建築家山口文象の軌跡●118

- Ⅰ. 山口文象戦後最大の遺産「RIA」の出版と展開●118
- Ⅱ. 山口文象評伝■125
- Ⅲ. 山口文象年表■127

まえがき

伊達美徳

建築家山口文象の代表的作品を二つあげるならば、戦前は黒部川第二発電所及び小屋の平ダムであり、戦後はRIAという都市計画・建築設計コンサルタント組織であろう。わたしが社会に出て勤めはじめたのがRIAという建築設計アトリエで、そのボスの山口文象に出あった。メンバーはたった13人だった。あれから半世紀余も経った今は、2000人を超える立派な組織になっている。

わたしはそのRIA在職中に「建築家山口文象 人と作品」なる作品集と評伝の出版を担当して以来、この建築家の軌跡を追っている。なんとも複雑な面を持った人間であり、作品も和風と洋風が平行していることが面白いので、いつまでもやめられない。

第1章は、建築家が土木構造物のデザインに関わったはじめの頃の仕事を、どのように彼がそれに対応したか、特に景観デザインの面から見たもので、今日的な話題を持っている。

第2章は、表技はモダニズムデザインで売り出したが、実は大工の倅として和風木造建築の手錬れである山口文象の仕事である。特に関口邸茶席はモダニスト建築家として出発した1934年の写し茶室であるの興味深い、2018年春から公開された。

第3章は、山口表技のモダニズムデザインの作品について調べたものである。一般にモダニズム建築は今やその存続が危ういのだが、山口文象の現存3つのモダニズム建築のうち2つがDOCOMOMO JAPANのリストにあがっている。

特にⅢは、2014年の「新発見」である。明治政府お雇い外国人で日本近代建築育ての親のジョサイア・コンドルが設計した和洋

折衷建築と、山口文象が設計したモダン建築が、戦前に並んで建てていた。それらは日本の社会主義研究の発祥の場となり、労働運動の拠点として、実に興味深い歴史の重要な役割をはたした。太平洋戦争の空襲でどちらも炎上したが、戦後にまた山口文象の設計で建てなおされた歴史を持つ。

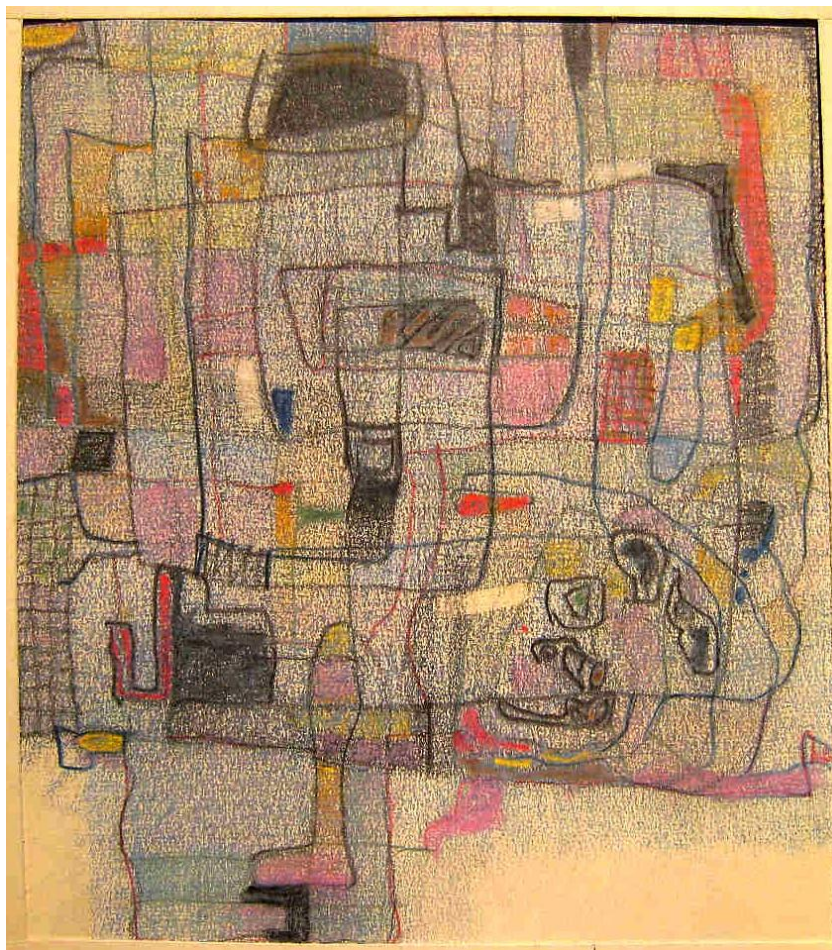
第4章は、山口と同時代に山口とともに歩んだ2人の建築家に、山口文象のプロフィールを描き出していたインタビュー記録である。山口はいろいろと語っている記録があるのだが、周囲からの傍証との差異があつて興味深い。ブルーノ・タウトとの交差も、彼の日本日記の処々に現れて面白い。

第5章は、山口の建築家としての歩みを追った。「Ⅰは、戦中戦後10年間の逼塞の後、戦後再出発をかけた集団組織「RIA」の初期20年ほどの展開を論考した。「住宅のリア」が「都市のオール・アイ・エー」へと変化を遂げていくが、山口の戦後の代表作がこの組織であろう。Ⅱは、通史的な評伝である。Ⅲは、山口の詳細な年表である。彼の建築作品は網羅したつもりだが、それでも見落としがあつて新発見をすることを続けている。

山口文象の人生はけっこう浮き沈みの波乱に富んでいるし、建築という目に見える軌跡があるので、だれか小説に書く人が出てくることを期待している。

あれこれと調べたことはわたしのWEBサイト「建築家山口文象＋初期RIA」サイト（*）に掲載してきたが、その中の一部を編集したのがこれである。（2018年3月31日）

（*） <https://sites.google.com/site/machimorig0/#bunzo>



山口文象の絵（スケッチ帖 年代不明だが戦後らしい）

第1章 建築と土木の融合

1. 自然と対峙する建造物

黒部川第2発電所と小屋平ダム

1 造景を訪ねて

富山県宇奈月町

真夏、涼しさ美しさちよっぴり冒険の観光客たち、黒部峡谷鉄道のトロッコ列車は、緑の懸崖を縫いながら登ること約50分、トンネルをでて猫又駅の直前、右に見えてきたのが、わたしの訪ねる赤い鉄橋と白い建築である。

真つ赤な鉄骨の橋梁は力強い曲線、真つ白な箱型の建物は端正で美しいプロポーション、その背景に深い緑と急峻な岸壁、手前には流れ下る激流。これらの厳しい自然とダイミツクな建造物とは、たがいに対峙して緊張感をもちなが美しい景観を創りだしている。

この建築は、富山の建築百選にも選ばれている「黒部川第2発電所」である。戦前、日本の建築界ばかりか土木界でも評判となった

名建築だし、わたしの師匠の作品なのだ。

実はそのデザインには、担当の土木技師と設計した建築家の意欲と苦勞が秘められている。



「周囲の美観に合致するように配慮された優美な発電所」と、黒部峡谷鉄道パンフレットの黒部川第2発電所の解説にある。

しかし、ほんとうにそうだろうか。むしろ意識して自然と対立するデザインをしたように、わたしには見える。

この発電所ができたのは1936年、そのころ日本建築界の新風は、一切の装飾をとりはらつて機能に素直かつ構成の美しい建築だった。まさにこの発電所がそれで、国際建築様式とよばれてヨーロッパから世界に広がっていった。なぜ、ここに最先端建築が生れたのか。

この設計者・山口文象は、1932年ドイツ修業から帰国すると日本歯科医科専門学校病院の設計で一躍スター建築家となり、続いてこの発電所と小屋平堰堤のデザインで確固たる地位を築いた。

日本電力技師長の石井頴一郎は、かねてから黒部では国立公園に適した土木デザインをしたいと考え、内務省復興局橋梁課長の田中

豊に相談した。田中は、橋梁課嘱託技師として関東大震災復興の橋をデザインしていた山口文象を紹介したのだった。

1924年、石井は山口を復興局兼務の嘱託技師とし、庄川水系ダム、黒部川第二発電所、小屋平堰堤等のデザインをさせる。1930年暮から32年夏までダムの調査にドイツに行かせたが、山口は、その機会を建築デザイン修業に活用したのだった。

当時、バウハウスを去ってベルリンにいた世界的大建築家W・グロピウスのもとで建築修業すると共に、カールスルーエ工科大学のダム権威者からも水理学の指導を受けた。

「デザインができて内務省に出したら、四角の建物は駄目というのだよ。発電所



山口文象は設計にあたって、デザインを確かめるため、また他の理解を求めるために、多様な完成予想図を何枚も描いている。(1933年ごろ、水彩、竹村文庫所蔵)



黒部峡谷鉄道黒川駅から眺める黒部川第二発電所。右は日黒嶺(撮影:伊達美徳1993)

を茅葺屋根にしろとか、ダムは土橋みたいにして擬宝珠の欄干つけるとか、もう弱っちゃってねえ」

これは30年も昔、わたしが山口から聞いた話で録音もある。気鋭の山口と石頭の内務官僚との景観論争は、裏から手を回して収めたとかで、今に見る日本の近代建築高揚期の典型的なデザインとなった。

今見る人たちは、この発電所と橋をどう思うだろうか。「周囲と合致」していると言うには無理があるだろう。それでは美しくないかといえ、これが実に美しい風景だから、景観論は一筋縄ではない。山口の建築デザインの身上は、その抜群のプロポーションの良さである。だからこそ自然と対峙しても美しいのだ。

発電所に渡る目黒橋も、二つ先の駅の小屋平ダムと水門塔なども山口デザインである。では、読者ご自身の眼力で美しい風景発見の旅へ、トロツコ列車でどうぞ。

【交 通】

■ 黒部峡谷鉄道宇奈月駅から約50分の猫又駅対岸
(「ほっと ほくりく」2004年8月号 北陸建設共済会発行 掲載)



2. 自然と土木と建築のデザイン

黒部川の電源開発は、大正期になって高峰譲吉博士がアルミ精練の電力を求めたことに始まる。1927年の柳河原発電所を第1号として今日まで、日本電力から関西電力へとひきつがれて、次々と困難な環境を克服してづけられ、かつての深山幽谷の秘境は、今や産業基盤と観光資源に転じている。

黒部につくられた多くの土木構造物等の中で、1936年完工の黒部第2発電所と小屋平ダムの設計には、日本電力の土木技術者と共に建築家の山口文象（1902-78）が重要な役割を果たしており、建築史上でも重要な位置づけにある現役の近代土木遺産である。

●国立公園にふさわしい構造物とは

その完工当時の日本電力の土木部長斉藤孝二郎は、雑誌「国際建築」（1938.9）へ次のように寄稿している。

『近代的な大規模の水力発電が盛んに行われる様になって二十年になるが……堰堤、取水口、沈砂池、水槽、発電所等の設計は外形上大概判で押した様に型に嵌ったもの許り多く……付近山水の景趣は兎も角、構造物自體は如何にも殺風景……』

そこで国立公園にふさわしいものにするために、黒部第2発電所と小屋平堰堤の『外観の調整設計は總てを建築家山口蚊象君に依頼したのである』

その山口は同じ誌面で続いて言う。

『国立公園であるため構造物は凡て「自然」と融和し、発電所には

茅の屋根を、堰堤は土橋の如く、そしてコンクリートの肌には鳥を這わせては、などという意見が監督官庁からでたが……コンクリートであるがために、又鐵の構造物であるがために、「自然」に受け入れられないとは謂えない。問題はその構造物の機能性格が偽りなく自然に表現されているかどうかにか懸かっている……』

その間の景観論争を物語るデザイン変遷を示す多くのスケッチが描かれている。

●近代建築及び土木史の貴重な遺産

山口はこの設計の直前にドイツに留学（1930-32）し、建築家W.Gropius (baubaus の創始者) のもとで学び、「国際建築様式」という当時の最先端デザインを第2発電所の建築に持ち込んだ。

機能と構造を抜群の優れたプロポーションで表現し、建築界の注目を浴びた卓抜な意匠は、見事に黒部川のランドマークとなっている。

今ではこの様式で現存するものは極めて少なく、近代建築史上でも貴重な遺産となる作品である。

山口文象は日本の著名な建築家としては珍しく、関東大震災の内務省復興局で東京の清洲橋や教寄屋橋などの「装飾設計」、その橋梁課長田中豊の紹介で日本電力の技師長石井頼一郎のもとで黒部、箱根、庄川のダムの「調整設計」、すなわち今日いう「シックデザイン」にも携わった。

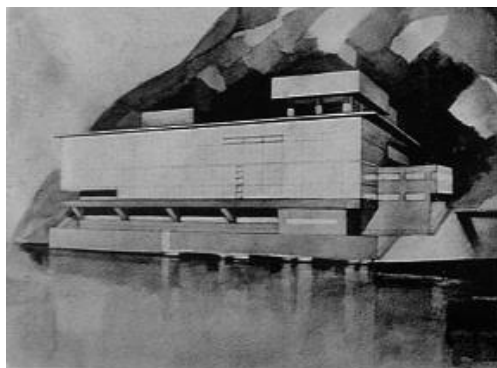
上流の小屋平堰堤、水門塔なども山口がデザインしている。発電所が「機能主義」ならば、こちらは対照的にマッシブな曲面構成の「表現主義」系の意匠である。

興味深いことには、山口の留学目的には小屋平ダム設計の調査もあり、1931年10月にカールスルーエに滞在して、カールスルーエ工科大学に水理学者レーボック (Dr.Rehbock) のもとで、流砂とダム形態について実験もして指導を受けている。

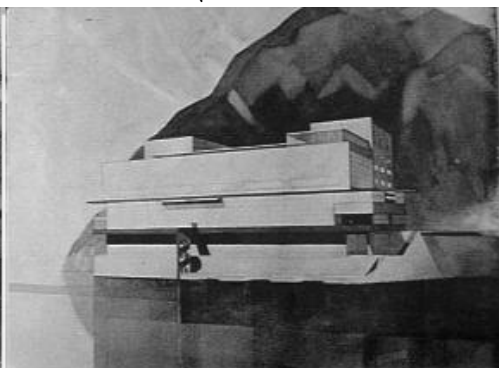
建築家と土木家とが景觀から構造までにわたって協力し、近代日本を代表する造型にまで高めた努力を、これからのシビックデザインにも生かしたいものである。

○参考資料「建築家山口文象人と作品」(RIA建築総合研究所・相模書房)

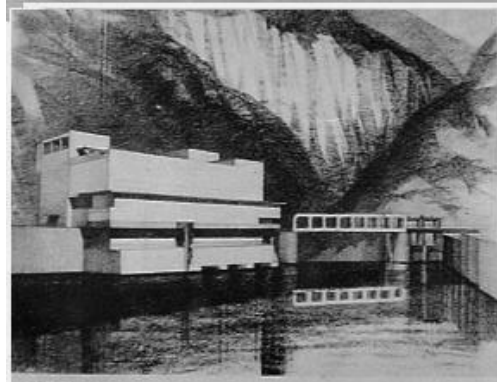
注…小論は1999年土木学会の会誌に掲載した。



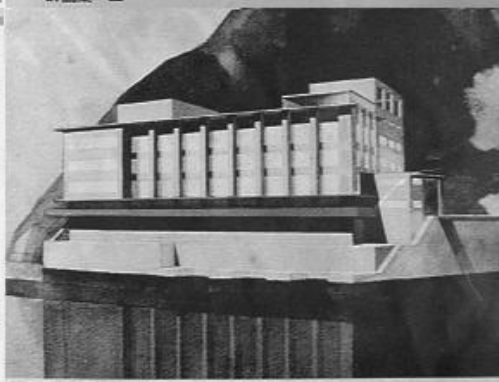
計画案 一



計画案 二



計画案 三



計画案 (最終的な)

日本電力 黒部第2発電所の建築デザインの推敲の様子を示す透視図のいろいろ。

この透視図はその筆致から判断して、山口文象の弟・山口栄一の手になるものと見られる。

右は竣工当時の写真だが、一部の窓が変わったほかは現在もほとんど変わっていない。

自然との調和したデザインである趣旨が、関西電力のパンフレットにあるが、そのほうが現代では聞こえは良いだろうが、山口の意図はむしろ自然に対立することで、建築のありようを求めたと言うほうがふさわしいと思う。



Ⅱ 溪谷のモダニズム

東電山崎発電所とダム

1. 発電所デザインは山口文象か

観光地箱根の玄関口となる湯元の近く、入生田あたりの国道1号に面して、東京電力山崎発電所と看板が出ている。

金網張りのさして広くもない敷地に、2階建てのこぢんまりとした、だが妙に気になる形の青い建物がある。

全体は四角な感じだが、短辺の一方が少し長い扇型である。扇の要の側が大きな円弧を描いていて、その上のほうに連窓もそれなりに円弧を描いている。

その円弧に寄り添って円筒状の換気等らしきものが地上から立っている。丸いほうから見ると、どことなく表現派風デザインである。

国道の反対側の斜面に沿って箱根登山鉄道の線路が走り、それに直角に導水管が山の途中から斜面を降りてきて、国道地下を通じて発電所に入っているらしい。

発電所建物としては小さすぎるから、これは換気等と管理事務所そして地下入り口だけで、地下部に大きな発電施設が入っている。

この発電所のできた当時のことが、雑誌「建築土木工事画報」(1936・11月号)に乗っていることを、土木学会の図書館データにあることを見つけた。

「日本電力山崎発電所建設工事 日本電力株式会社」と題して、次

のように書いている。

(略) 発電所は元、三枚橋及畑宿両発電所と共に(早川支流須雲川水力利用) 小田原電気鉄道株式会社が電器鉄道に動力を供給する外、当地一円に電燈、電力を供給する目的を以て早川水系の開発に着手し、昭和三年当社が合併継承したものである。山崎発電所も水路隧道のみ往年完成し、其後大正十二年関東大震災に遭遇の儘工事を中止し、完成水路は所謂湯本堰用水路として久しく地元民の灌漑様子路に使用されてゐたが、昨夏より残工事に着手したものである。(略)

これによれば、1923年の関東大震災後よりも前に着手していたことになるが、発電所の設計もできていたのであろうか。

ところで、山口文象を建築家として不動の地位に押し上げた黒部第二発電所とダムのデザインに関しては、1938年の『国際建築』(1938年9月Vol.14 No.8 P.342)に掲載されている。

そこに日本電力株式会社土木部長の斉藤孝二郎が、「黒部川第2号水力発電所が建築家諸賢に紹介せらるるに当って」と題してこのように書いている。

(略) 尚当社としては黒部の発電所のみでなく、他の水力発電工作物に於いても其の地域々々に応じ同様外觀に注して居り、例へば小規模のものであるが手近の箱根湯本にある山崎発電所、其取水口付近等も山口君を煩わしたが、本誌を機会に今迄よりも一層建築家諸賢が此の方面に注意を向けられ、我々土木技術に協力せらるれば仕合せと思ふ。

これで見ると、発電所も取水堰も山口文象がデザインに携わったことが明記されている。となると、それらの設計は山口文象が日本

電力の嘱託技師となった1923年よりも後ということになる。

工事画報のレポートには、土木工事のいつもの例で、設計は日本電力土木部とあるだけで、山口文象の名は見えない。

この発電所から2km上流の早川にある取水堰も、この発電所の一連の工事として1936年に完成しているのだが、その堰のデザインが山口文象であることは、わたしは山口本人の口から直接に聞いている。わたしのほかにいるし、更に上記の斉藤も書いているからから確実である。

不思議なのは、山口文象は取水堰はデザインに関わったと言ったのであるが、発電所については一言も触れなかったことである。山口文象としてはこの表現派風が、気に入るデザインではなかったのだろうか。

現在の発電所は全体にブルーの塗装がされているが、当初はコンクリート打ちはなし仕上げであつたろうと思われる。

2. 早川取水堰のデザイン

では早川を上流に約2kmさかのぼって、山崎発電所の発電用の水を探る取水堰を見よう。

国道1号の箱根への登り始めのあたりにある、このこぢんまりとしたダムは、シャープな美しさを備えている。

当初は可動性のローリング・ゲートだったので、そのゲートの左右に巻上機用の建て屋が対の形で建っている。

水の中からシャープな水切りの形のままに建て屋まで立ち上がっているのだが、その下流側に突き出る庇も、水切りのシャープさを

保持したままに鋭いキャンチレバーである。

いかにも山口文象らしいのは、たつたこの二つの小さな建て屋だけであるが、ダムのもつ機能的な単純な造形とあわせて、これだけで十分なのである。

よくみれば、沈砂池の川の側には玉石張りとなっているし、その上には、住宅の植木鉢のごとき植え込みがある。だが、森と激流の大自然は、そんな小細工には眼もくれさせないのである。

現在は、二つの建て屋の左岸側は建て替えられているが、なかなか工事現場小屋みたいな格好をしている。国立公園内だからそれに考えたのだろうか、ちよつと傾いた庇が出ているのが、いかにも素人くさい。

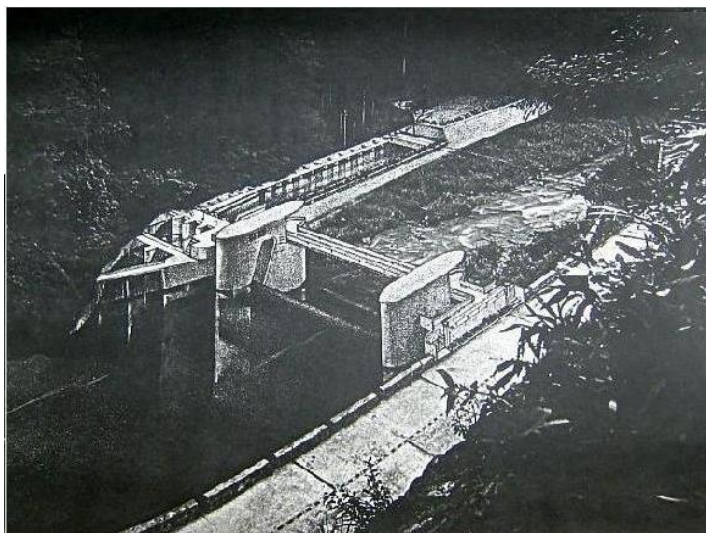
当初はローリング・ゲート式の可動堰であつたのが、今はゴムゲート式になっているから、その取替えのときに大工事をして建て屋も一方を取替えただろう。

仮設ではなさそうだから、土木におけるデザインへの考え方に於いて時代の差を見ることができると。

3. 土木が求めるデザイン

なぜ山口文象が起用されたのだろうか、そのあたりは工事画報のレポートから、次のように読み取れる。

本水路区域は国立公園の一部に属するを以て、各種工作物の設計施工には多大の意を用ひ、例へば、堰堤表面は全部張石と為し、ローリング・ゲート其他門扉操作作用及付近照明用電力線は地下ケーブルとし、沈砂池の川側壁上には植樹を為し水槽及び鉄管路に於いて



RIA所蔵山口文象資料集にある山崎ダムのモンタージュイラスト
当時のものと推察される



東京電力早川取水堰

2008.12.26 photo by DATEY



東京電力山崎発電所

2008.12.26 photo by DATEY

は伐採木は最小に止め、不得止伐採し足る部分には尚植樹を施し、山腹わずかに水槽白壁の隠見するに止め、又、発電所本館は大部分地中に埋設するのみならず、生垣を以て囲繞せしむる等、努めて美観保持に留意したのである。

これは同年に完成した黒部第2発電所に、国立公園内での土木構造物のデザインに山口文象を起用して、自然との調和を目指したの

も日本電力であったから、山崎でもおなじであることが分かる。先の斉藤の黒部での一文にはこのようにも記している。

これは黒部が本邦唯一の渓谷として国立公園に指定せられ、又我々としても此峡谷に土木工事を施す以上是れに相応しい工作物を造り上げなければならぬと最初から覚悟して懇いた結果であって、外観の調整設計は総て建築家山口蚊象君に委嘱したのである。

ところが、山崎でも黒部でも山口が彼らの考えていたような期待に応えたといえるかどうかは別問題であるところが、実に興味深い。日本電力としては、自然に埋没するように、あるいは埋没しなくとも見えるところは自然と調和するようにと、建築家にデザインを求めたことが明確である。

ところが山口文象はむしろその反対に、自然と対峙しても大丈夫なというよりも、対峙することで新たな造形を生み出そうとするデザインを目指したのであった。

これは現代においても、建築等の構築物と自然景観との対応について大きな課題とされているところである。

4. 建築家と土木デザイン

山口文象が土木デザインに関わったのは、日本でも比較的早い時期になるだろう。

関東大震災の直後に、復興極橋梁課の嘱託技師となり、復興橋梁のデザインに関係した。その後に日本電力の嘱託技師も兼ねて、庄川水系のダムや黒部第2発電所関係のデザインに関わる。

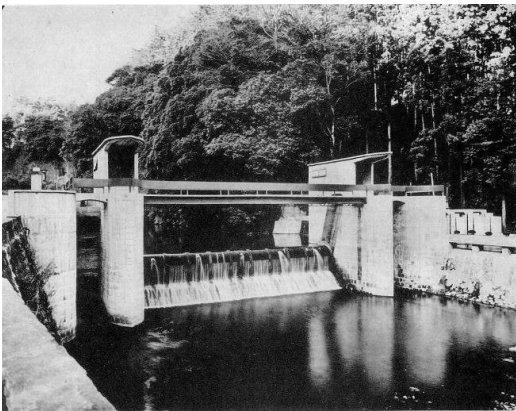
黒部関係は発電所の建築だけではなく、目黒橋、小屋ノ平ダム、沈砂池水門なども含めて、優れたデザインで彼の代表作である。

ウィキペディアに山口文象の項を最初に書いたのはわたしだが、その後に他の人が付け加えたり訂正を書き込んでいる。わたしから見ると、ちよつとどうかと思う書き込みもあるが、あえて反駁してはいない。

そこに土木に建築家が関わったことをかなり詳しく書いているの

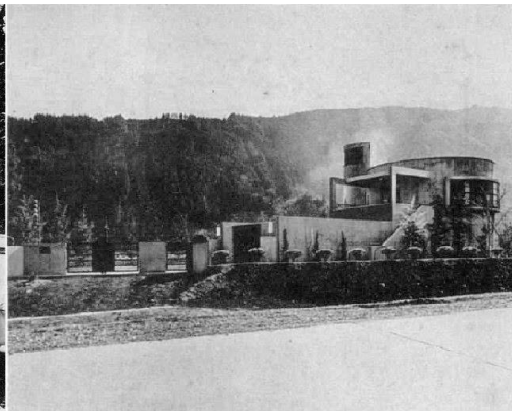
が興味深い。わたしは山口文象に關してだけの土木デザインについて書き込んだのだが、どなたかそれ以前のことを詳しく掲載した。以下ウィキペディアから引用。

日本では戦前に建築家が橋やダム等の土木構築物のデザインにかかわる例はいくつかあり、最初が皇居二重橋や神戸港の施設群に河合浩蔵、東京・日本橋の麒麟の彫刻、欄干、照明器具等の装飾的デザインに妻木頼黄、大阪や京都の市



新所電發崎山社會式株力電本日
新電式株力電本日 設計

所電發崎山社會式株力電本日



「清水組工事年鑑」(昭和十二年版)より

竣工当時の山崎発電所とダムの写真(清水建設の松波秀子氏提供2012年3月)

区改正などに伴う架け替え橋梁のデザインに武田五一がかかわっている例があるほか、1885年着工の琵琶湖疎水の場合設計者の田辺朔郎のもとで滋賀県の建築技師をしていた小原益知が加わってトンネルロリーフや水楼閣のデザインを、また呉服橋と鍛冶橋は東京市建築営繕担当の田島*造と福田重義らが検討している。(以下略、*はノギヘンに齋)

戦前には日本が豊かであったので、土木にデザインをする機運があったが、戦後から貧しくてその余裕がなくなつた。

最近になってからようやく土木デザインが、景観問題としていわゆるようになって、専門デザイナーも登場してきているようだ。

ただし、優れたものになかなかお目にかかれないのは、土木デザインなるものを学校で教えなかったせいもあるだろう。土木構造物の面にペンキで絵を描いたり、レリーフをつけたり、なにか具象的な形を模したりして、デザインとは装飾であると勘違いしているものも多く見られる。

ところがようやく、東大の土木(いまや基盤工学と言うらしい)に篠原修さんや内藤廣さんのような方が現れて、次への期待が生まれてきた。

山崎発電所の取水堰のすぐ下流部に、1933年完成の旭橋が架かっている。

コンクリートのアーチで、ちよつと無骨なところもあるが、なかなか優れたデザインであ

る。斜めにかかっているため上流側と下流側のアーチが微妙にずれていて面白いし、何より全体に素直にできているところが良い。

このコンクリートアーチ橋に接して上流側に、車線増設した鉄骨ビームの橋がかかっている。これはつまらない。増設は戦後だろうが、歩道の手すりに大名行列の型抜き板が取り付けられているのが、戦後土木デザインのレベルが現れている。

ついでながら、せつかくのよいデザインなのに、その橋の袂には、交通標識、衝突防止の重し、工事看板、注意信号などなどバラバラにたくさん立ち並んでいる。なんとかならないものか。

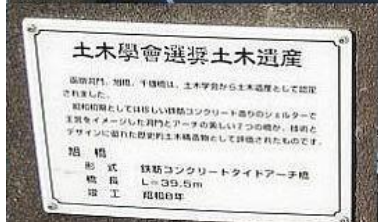


箱根町「早川中心」展望 1933年竣工 081225 photo by DATEY



2008/12/26 13:46

箱根町早川にかかる
旭橋 1933年竣工



081225撮影
伊達美徳

5. 歴史の土木デザイン

山崎発電所の建物も取水堰も、今やそれなりに歴史的な価値を持つてきたといつてよいだろう。1930年代のモダンデザイン建築は、山口文象作品では、これと黒部と山形梅月堂の3つになっている。

そもそも、豆腐に目鼻といわれたモダンデザイン建築は、洋式建築と違って一般評価されにくいし、雨降りの日本ではメンテナンスが難しい。現に山口文象作品で、木造のモダンデザインは全滅である。

そのようなわけで、昭和初期モダンデザイン建築の保全は、いまや歴史的課題となりつつあるだろう。

ところで、この取水堰のことをインターネット検索していたら「荻窪用水」にあたった。

荻窪用水とは、工事画報にもある「完成水路は所謂湯本堰用水路として久しく地元民の灌漑様子路に使用されてゐた」という湯本用水路のことらしいのだ。

その湯本用水路は又の名を荻窪用水と言い、江戸時代に小田原の荻窪地区に10kmも上流の早川から灌漑用水を引いている。それは江戸時代にもわたる土木工事の多大の苦勞の末に、19世紀初頭によくよく開通したという、地域にとつて歴史的ないわれのある用水路なのである。

その水路を小田急電鉄が大改修し保全する代わりに、水利権の一部を自社の電車等の電力用の発電に使いたいとの提案があり、その結果が今の山崎発電所であり取水堰であるらしい。だから現在の荻

窪用水は、山崎発電所の上にある貯水池から分かれて流れ出しているようだ。

荻窪用水のことはネットであたったが、それと山崎発電所の取水堰との関係は工事画報のこのくだけただけでしか分からない。

江戸時代からの灌漑技術用水と近代の発電技術とが、ひとつの歴史としてつながっていることは、興味深く重要なことであると思う。そのあたりを知りたい。

本論は、東京大学院生でダム研究をしている伊藤啓輔さんから、山崎発電所が現存していることを教えていただいたことよっている。(081227初稿 091229一部改稿)

*ダムと発電所はともに2011年度「土木学会選奨土木遺産」となった。

第2章 和風建築の現在

「モダニズムと和風の二つの系譜

●山口文象と小泉八雲

建築家山口文象と二人の文学作家を結ぶ二本の糸は、どこから始まるのだろうか。

その作家の一人は「怪談」の小泉八雲（ラフカディオ・ハーン）、もう一人は「放浪記」の林芙美子である。

八雲と山口文象との関係から書こう。1932年、二年間のヨーロッパ修行から帰国した山口は、流行作家のごとく精力的な建築設計活動を開始する。1933年に、松江市内に「小泉八雲記念館」を設計した。

そのドイツのワイマールにあるゲーテ記念館を模したといわれる洋風二階建てのモダニズムのようなそうでもないような、瀟洒な木造建物は、武家屋敷町の中では異彩を放っていた。その頃、どう

受け止められただろうか。

今は建替えられて、かつてあった武家屋敷風の和風建築に建て替えられ、隣の八雲旧居と同じ形で、知らないときからあったのか、ここも旧居かと思う姿である。

もうひとつ、富山市内にも山口の設計になる「小泉八雲図書館」が、1933年に計画されていたことが分かっていた。

1933年当時の建築関係の雑誌に発表された模型写真を見ると、切り妻の大屋根をかけ、それを二本の棟持ち柱のような独立柱が支え、床下がピロティ状に高く浮き上がっている。どこか出雲大社本殿をイメージさせるデザインで、松江の八雲記念館とはおおいに異なる。

1986年に山口文象の作品集を出版した気には、わたしはよく調べないで、これは計画だけで建設されなかったものと思っていたのだった。

ところが実は、旧制富山高校の図書館に付属する「小泉八雲図書館」（通称はヘルン文庫）として、1935年に完成していたことが確認されたのである。

金沢市在住の小泉八雲研究者である染村絢子氏が、1999年に、
富山大学図書館に保管されている設計図と竣工した建物の写真を発
見したのであった。 となつて、もとの場所（今は公園になっている）に、それを復元し
ようという声が始まりつつあったが、今は沙汰済みになっている。

だが現物の写真を見ると、どうも模型写真
とは似て非なるようでもあり、そのもののよ
うでもあるデザインである。写真判定では、
一応は山口設計と見てよいだろうが、途中で
設計変更が起きたらしい。それも、山口のあ
ずかり知らぬところで起きた感じもある。

それは、もしも設計変更したとしても、最
後まで山口が見たならば、もっとよいプロポ
ーションででき上がったであろうと思われる
からである。そのあたりは、染村氏の今後の
研究に待たなければならない。

更に、山口と八雲を結ぶ線はなにか、よく
分かっていない。山口文象の富山でほかの仕
事といえば、黒部第二発電所・ダムであるか
ら、これに関連する人脈につながるのかもしれ
ない。これも染村氏に期待するところであ
る。

その小泉八雲図書館は、富山大学の移転に
より1962年に取り壊されてしまったのだ
が、富山大学図書館の中に「ヘルン文庫」と
して内部の姿が復元されている。

10年ほど前に、富山高校の同窓会が中心



左上:旧制富山高「小泉八雲図書館」発見者
の染村絢子氏



左:旧制富山高にあった小泉八雲図書館の
建物写真(模型では椽持ち柱があったが、
これにはない)屋根のかけ方も90度違う)

上:松江市にあった「小泉八雲記念館」

下左:旧制富山高「八雲図書館」設計当時の
模型写真

下右:建て替え前の松江市八雲記念館



●山口文象と林芙美子

さて、もう一人の林芙美子であるが、尾道在住の林芙美子研究者の清水英子氏から、2001年にわたしのウェブサイと「まちも通信」の山口文象のページをご覧いただいて連絡をもらった。

東京新宿区内にある山口文象設計の「林芙美子邸」は、1940年に竣工し、夫の画家・林緑敏と家庭をきづいた彼女の終の棲家である。いまは新宿区立林芙美子記念館となっている。

清水氏の研究活動が山口文象に至り、わがサイトにたどり着いたのだが、山口文象と林芙美子とは、どこから接点ができたのだろうか。

ヨーロッパ行っていた時期が二人は重なるから、パリかベルリンかで出会ったかもしれないと、山口の当時の手帳を見たが、林らしい名はでてこない。

芙美子の方の記録資料には、どうなのだろうかと、清水氏にお願いしたが、出てこないとして、いまだ分らないままである。

当時ベルリンに留学していた建築家の白井晟一とパリにいた芙美子はその特別な関係にあったことは、いまや周知のことになった。なぜ彼女は白井に設計依頼しなかったのだろうか。そのころ白井は哲学の学徒であって、まだ建築の世界にいなかったからだろうか。

芙美子の滞欧日記類には男のイニシャルがたくさん登場するから、そこに山口文象がいた可能性もないとはいえないが、わたしがざっと見たところではそれらしいイニシャルは出てこない。

芙美子は純和風の住宅が欲しくて、奈良のあたりまで山口や設計スタッフをつれて、見学に行ったそうである。

これが日大の歴史研究室によって「発見」されたのは、80年代になってからであった。

●山口文象にとってのモダニズムと和風建築

山口文象の設計には、帰国後の売り出した表芸としてのモダニズム（当時は国際建築様式といった）と、必然として裏芸のようになった和風のデザインとがある。

実は大工の倅で木工徒弟学校出身という出自としては本領は純粋に和風建築にあつたはずである。当時の大学出の建築家にはない能力である。

1927年の処女作から1950年までの作品で分っているものを分類すると、和風系が11件、洋風系が21件、そのほかに分類不能な戦中の軍需工場やその宿舍等が26件、和洋どちらか不明が10件である。年代的にはどちらが先でどちらが後でもなく並行している。

山口文象設計のモダニズム建築で現存するものは、山崎発電所、黒部川第2発電所と山形梅月堂の3件のみで、いずれもコンクリート造である。

一方、木造和風建築は、この林芙美子邸、浄智寺茶席、前田青邸アトリエ、自邸、酒井邸の5件が現存している。

小泉八雲記念館もそうだが、小林邸や山田智三郎邸（これは火災で消滅だが）のような木造のモダニズム名作はどれひとつとして現存していない。

残存率から言うと圧倒的に木造和風が高いのは、やはり風土に適しているからだろう。それはフラットな屋根や庇がない壁では、日

本のように雨の多い風土では無理があった。

林芙美子邸では、山口に要求されたのは彼の手だれの和風の技であつた。

そのころ山口文象は当時の言葉で国際建築、今の言葉ではモダニズムの建築家として売り出していたので、彼にとっては表に出したくなかつた作品らしく、当時の雑誌にもそ

の後も発表していない。同じ年にできた民家風の自邸も公表しなかつた。その頃はもう一流の建築家として認められていたのに、認められていたからこそか、大工の倅の系譜を表に出したくなかつたのかもしい。内心では相克があつたにちがいない。

ただ、和風建築をまったく雑誌に出さなかつたのではない。その4年前には二見邸という大きな純和風建築を雑誌に発表しているから、表芸だけとしていたのでもないらしい。山口文象事務所では、和風と洋風それぞれ得意なスタッフがいたという。

一方の林芙美子は、この家について短文を発表しているし、客もよく招いたから、隠すようなものではなかつた。建築家とオーナーの意識の違いが面白い。

面白いのは徹底した和風の林芙美子邸の中で、アトリエだけがモダニズムデザイ

ンを裏側に見せていることである。ここだけは庇がなくて雨じまいが悪そうだ。

(2010.2.3)



林芙美子邸 1940 庭からの全景

2006撮影



林芙美子邸 1940 裏庭からアトリエを見る

2006撮影

口 TVが見る建築家山口文象と

その自邸

本に書評があるように、TV番組にも「映評」つてのがあるのかもしれないから、いちおう書いておく。もつともTVをめつたに見ないので、他の番組をみて比較する批評にはならない。

2014年4月13日夕方、建築家山口文象の自邸を写した番組が、フジテレビで放送された。わたしも取材に協力をしたので、めつたに見ないTVをその時間だけ見た。

しかし、たつた2分ほどの番組で、その前後途中に見たくもないたぐさんの商業広告がでてきて、これだからわたしはTVを嫌いなのだ。

番組名は「ロマン建築の旅」といい、有名建築家の住宅作品を順次放送するそうだ。

その1回目は坂倉順三による「岡本太郎邸」であり、2回目が「山口文象自邸」(1940年竣工)をとりあげた。

自邸の外観、中庭、サロンを中心の映像に、自邸と同じころにできた山口の作品である「黒部第2発電所」と「林芙美子邸」の写真を挟み、山口文象の子息の音楽家山口勝敏さんが語り、プロのナレーションによって概括する。

ナレーションが、「古くて新しい家」、「74年前に建てられたが、

いまだ未完成」という通り、できから実に多様な変遷があつて、いつも新しいことがあつたこの家、それが最も面白いところなのである。

山口の頭の中の常に変更中の設計図によつて、金

できると始めてしまふ毎度の改変工事が続いて、金がなくなると工事が止まつて、とりあ

えず完成である。それは、入れたコ

器具(そのときはベルリンで住んだアパートの暖房器

具を例にとりあげた)みたいなもんだと、山口本人から聞いたことがある。毎度動かされる家族は大変な目にあつていたらしい。

いつも新しいこの家は未完成こそが本来の姿であるのだが、山口



フジテレビ「ロマン建築の旅」(2014/04/13)番組より一部コピー 「山口文象自邸」

文象がいなくなったいまでは、これが完成した姿だと言わざるを得ない。

2分やそのらの超短時間番組では、その変遷を詰め込むのはとうてい無理だろうが、当初のコテコテの民家風のインテリアと、いまの姿を重ね合わせるbefore-after映像を見たかった。

家族や生活様式の変化によって、また山口文象の気分によって、間取りが何度もドラスティックに移り変わってきたが、実に面白いのだが。

勝敏さんがそれについて、「いつまでも和と洋のデザインの間で、悩みつつ矛盾に揺れていた自作の実験場」と語るだけで、映像に出なかったのが残念だった。

和と洋の両方の名手だった山口文象の世界を、ひとつの建物で長期間にわたって見せた建築作品であるが、建築は今の姿しか見えないので、この作品の真髄は見えないのである。

ナレーションで気になったところ。

「東京大田区、閑静な住宅街にひとときわ目を惹く、一軒の家がある」

ふむ、一般の眼から見ると、あの家は「ひとときわ目を惹く」のであるか。わたしは何回も訪ねて見慣れたせいもあるかもしれないが、そうでなくても、あの家は目を惹く代物だろうか。

あのような道から平入りの瓦屋根の和風の家は、できたとき1940年の昔からの普通の住宅地の風景であった。モダンデザインで



今では白いボード貼りまわされて変っているが当初はこのような民家風デザインだ。



住宅地に溶け込んでいる山口文象自邸

売り出した山口文象だが、実はこのような和風はお得意だった。それが今や、ナニヤラハウスとかナントカホームという大衆好みの今風住宅が建ち並ぶのが、この久が原でも当たり前の風景であり、山口邸は居ながらにして特異な姿になった、ということだろう。

またこうも言う。

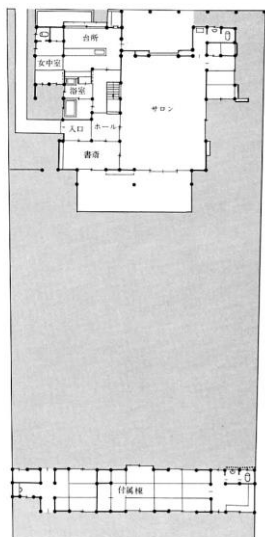
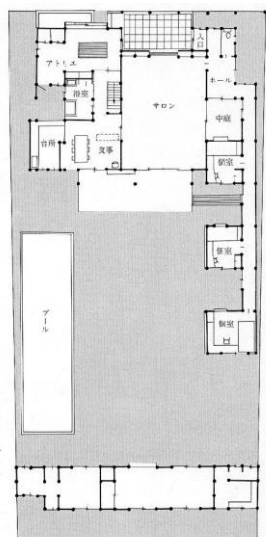
「浅草の木工の棟梁の息子として生まれ、独学で建築家になった」

ふむ、独学でねえ、わたしは山口文象自身の口から、独学だと言っているのを聞いたことも読んだこともない。わたしもこれまで山口についてはいろいろ書いてきたが、独学と思ったことは全くなかった。で、ちよつと意表を突かれた。

建築の専門家である大工を育てる中学校(職工徒弟学校大工分科)では「学」にならず、大学の建築学科を出ていないから、これを「独学」というのかしら。そういうものかしら。

山口文象に建築を教えた師匠はいなかったのかと言えば、当人の口から出る彼が師匠とした建築家の名前は、山田守、岩元禄、石本喜久治(後に大喧嘩するが)、W・グロピウスである。

特に、18歳で就職した通信省営繕課で、多くの大学出のエリート建築家たちの下で修業をしたのだから、これを独学と言ってよい



山口自邸 1960 年代 山口自邸 1940 年代
山口文象自邸平面の変遷は何度もある



現在の山口邸は「クロスラブ」と名付けられ
山口勝敏氏のピアノ演奏会など私的な会合にも使われる

て伊東忠太の講義を聴いた(この話が本当なら、时期的には東京美術学校であろう)とか、ドイツでグロピウスアトリエにいた頃にベurlin工科大学大学院で学んだ(これはかなり怪しい)とか語った記録がある。その劣等感は、晩年に東京工業大学建築学科の非常勤講師になったことで解消したかもしれない。

大学で専門的に勉強しないで一流になることを独学というなら、学歴社会の象徴のような言い方の感がある。

のだろうか。
独学と自分でも言っているらしい有名な建築家に、安藤忠雄がいる。その彼とても、水谷颯介の下で働いたこともあるし、大阪工業大学に籍を置いたこともあるようだ。
実は山口は学歴コンプレックスを持っていたようで、東京帝大の偽学生として

それで思い出したが、ある建築史家は、山口文象が木工から転身して建築家になったと思いついていたそう。だが、山口は木工の子だが、当人は木工を仕事にしたことはなくて、その兄の山口順造が父を継いで木工となり、この山口自邸も彼の仕事であった。

学歴ついでに、山口文象がバウハウスで学んだと書いてある建築史の本があるが、それは間違いである。山口が弟子入りしたグロピウスは、既にバウハウス校長を退任し、ベルリンでアトリエを持っていた。

「離れには、下町情緒あふれる長屋」

ふくん、下町情緒ねえ、何だか雰囲気が違うよなあ。

ここは当初は書生部屋だったのであり、その後は親戚や弟子たちが住んだこともあり、自邸改造中の家族の避難場所であったりした。まあ、形は長いから長屋だろうが、下町情緒はどこにもない。裏に路地があるくらいか。

このナレーシヨンの作者は、山口が下町の長屋で生まれ育った出自を、ここに文学的に託したのだろうか。

「ヨーロッパ建築をとりいれた黒部川ダム」

あれ、これはダムじゃないよ、発電所だよ、正確には「黒部川第2発電所」、ついでに言えば、これにつながる山口がデザインしたダムは「小屋平ダム」。

「明治から昭和へ駆け抜けた建築家は、古い殻を破りたいとあがき続けていたのかもしれない」

おお、これはうまくナレーシヨンをまとめてくれましたねえ、そのとおり。

江戸の残る旧弊な下町から抜け出て山手のこの地に家を構えこと、和風の名手でありながら西欧モダンデザインで世に出たこと、個人作家と集団オルガナイザーの間で悩み続けたこと、そう、あがき続けた建築家であった。(2014年4月15日)



TVに登場した山口文象デザインの
黒部川第2発電所と目黒橋

目 宝庵由来記

モダニストの写し茶室

はじめに

「北鎌倉 宝庵」（ほうあん）は、1934年創建の木造数寄屋の茶室建築である。北鎌倉の浄智寺谷戸の奥にあり、風趣ある露地庭、八畳と四畳の二つの茶室を持つ瀟洒な姿の数寄屋、一畳台目の小間茶室を抱く大胆な造形の茅草草庵、甘露の自然湧水井戸などが、緑の自然にいだかれている。

文人ジャーナリストの関口泰氏が自邸敷地に建築、その当時のモダニズム建築運動の若手リーダーの山口文象氏が設計者であった。1934年の山口文象といえば、グロピウスの下から帰国して、日本歯科医専門病院のモダンデザインで一躍売り出した時期である。その山口の純和風しかも写し茶室である。

ながらくプライベートな茶室であったが、2017年に古刹の浄智寺の所有となり、「宝庵」と名づけて公開して、お茶会など多彩な文化活動の場として2018年4月から一般に貸し出されている。わたしの「山口文象＋初期RIAアーカイブス」サイトで、「旧関口邸茶席」として紹介していたが、これを機会に若干の補足的調査をして、その由来などを詳しく書いておくこととした。

由来記と題したのは、建築主の関口が「吉野窓由来」と題して、この「宝庵」発想の下になった草庵茶室の由来を建築当時に書いて

いるので、それを受けたつもりである。

1・北鎌倉に山口文象設計の茶室を訪ねる

●北鎌倉の山口文象設計の茶席建築

2017年の秋も深まり初冬になるころ、北鎌倉に紅葉狩りに行ってきた。いや、実は行ってみたら紅葉が美しかった結果なので、真の目的は山口文象（1902〜78）の和風建築狩りであった。訪ねた先は、山口文象設計で1934年に建った元は関口邸の茶席、今の名は「宝庵」（ほうあん）という2棟の茶席である。わたしは1976年に訪ねたことがあり、その時は山口文象について行った。



1976年の山口文象と宝庵



2017年の小町和義と宝庵

そして今回は建築家の小町和義さんと一緒だった。小町さんは山口の愛弟子であつた人で、和風建築の名手として知られる。

1976年に訪ねた目的は、山口文象の作品集をつくるために、いくつかの作品の現地を訪ねており、こもそのひとつだった。評伝を執筆する建築評論家の佐々木宏氏と長谷川堯氏そして建築史家の河東義之氏たちも一緒だった。山口はここを訪ねたのは40年ぶりと話していたから、鎌倉で他にいくつか設計していたのに、完成後はご無沙汰だったらしい。その頃、わたしはRIAに在籍していて、この作品集の編集執担当だったからついてきたのだ。その2年後に山口が急逝したので作品集の出版は遅れて、1983年に『建築家山口文象・人と作品』（RIA建築総合研究所編 相模書房刊）として世に出た。RIAは、山口文象が戦後に創設した都市建築計画設計組織で、今は榊アール・アイ・エーという。

その作品集の編集作業が終わっても、わたしは山口文象の追っかけを趣味でやっていた。わたしは40歳頃に建築設計から都市計画に転向して、その後は建築を趣味にしてきた。大学での出自が建築史だったから、近代日本建築史における重要人物としての山口文象を追いかけるのは、なかなか良い趣味だとわれないながら思うのである。だが、そろそろ山口文象は種切れになったし、わたしも終活年代にも入ったので、2014年に山口関係の蒐集資料全部をRIAの山口文象資料庫に寄贈してしまった。それで山口文象追っかけを止めていたのだが、ここで具雲仙の機会に恵まれて、久しぶりに山口建築の茶席を訪問したので、このことを書いておこうと思う。だがその前に、同行した小町和義さんのことを書かねばならない。

●小町和義さんの展覧会のこと

小町さんは、1942年に16歳で山口文象の書生となつて弟子入りして、1949年まで戦中戦後通じて山口の下で仕事をした。

その後、平松義彦の下で仕事をし、1969年に独立して「番匠設計」を主宰し、寺社や数寄屋建築の名手として知られる。八王子の宮大工棟梁の家に生まれたのに、山口文象に弟子入りして建築家の道を歩んだのは、山口の歩んだ道に似ているともいえる。

今回の北鎌倉宝庵の訪問は、じつは小町和義さんから、行きたいと依頼されたのであつた。八王子の小町和義作品展会場で、久しぶりに小町さんに会つたが、卒寿と見えない元気そのもので、張り切

つて解説をしておられた。小町さんの地元の八王子で、多くの市民や小町さんの弟子たちが、ボランティア活動で展覧会に持ち込んだとて、幸せなお方である。会場にいっぱいの模型とパネル、茶室の立て起し模型、そして原寸の組み立て茶室もあつて立礼抹茶も楽しむようになっていた。

パネルの一枚には、小町さんの師匠であつた二人の建築家、山口文象と



小町和義氏 小町和義作品展にて



宝庵への露地

平松義彦の大きな顔写真が見える。あの会場であれば多くの人が来るとは、会場単位面積当たり人数は、同じ頃にやっていた国立ギヤラリーでの建築家・安藤忠雄展と比べてよい勝負だろう。建築家って今は人気ある商売なのかと思った。

そして会場で驚くべき嬉しいことを小町さんから聞いた。展覧会のために自宅にある資料を整理していたら、山口文象設計の関口邸茶席（現・宝庵）の図面が出てきたという。その図面は、山口文象の弟の画家山口栄一から、彼のスケッチ帖と共にもらったものとのこと、どちらも山口文象の重要資料だから、R I Aの山口文象アーカイブスに入りたい、その前に図面をもってその茶室を見に行きたいので、今の持ち主に連絡してほしいと頼まれた。面白いことにな

った。なお、小町さんは1941年から山口の弟子だから、この茶席の設計にはタッチしていない。

以前に訪問したときのこの茶席の主は、鎌倉の建築家・榛沢敏郎氏であったが、今もそうであるかわたしは知らない。そこで知人の鎌倉の建築家福澤健次さんに尋ねて、現在の茶席の主の浄智寺から茶席の運営を受託した「鎌倉古民家バンク」の島津克代子さんにつながった。今回は小町さんと共に島津さんを訪ねて見せていただいた。浄智寺和尚の朝比奈恵温さんも、お顔を見せてくださった。

旧関口邸茶席は、1975年と同様に健在だった。この谷戸の庭と建築を愛して、保存修復に手を尽くした榛沢敏郎さんのおかげである。茶席建築の名手の小町さんが、新発見図面を見つつ解説してくださって至福の午後だった。

●宝庵と名を変えた旧関口邸茶席の概略

簡単にこの茶席の経緯を書いておくと、1934年に山口文象の設計で建てたのは、ジャーナリストの評論家であった関口泰（1889（1956））だった。1930年からこの谷戸に住み始めて、朝日新聞論説委員であり、横浜市立大学の初代学長であったひとである。茶室は2棟あり、ひとつは草庵風の茅葺の小間茶室であり、もうひとつは4畳と8畳の2つの茶室を持つ数寄屋建築である。広い茶庭の露地をもつ。

関口の没後はしばらく無人であったようだが、1970年前ころ、これを買取り引き継いだのは、北鎌倉に在住の建築家・榛沢敏郎氏であった。長く使わずに荒廃していたし、1棟は敷地内の別の位置に移築されて、当初とは異なる配置だった。それを復元的設計

をして、丁寧に解体し、現在の配置に移築し、1972年頃には修復を完了した。そして仕事の設計アトリエとして使っていた。2017年に、榛沢氏は土地を地主である浄智寺に返還し建物も譲渡した。浄智寺はこの茶席を保全して一般公開活用する英断をくだし、「鎌倉古民家バンク」が借家して運営することとなった。同バンクは茶席敷地の南に隣接する「たからの庭」の運営を行っている。この茶席は、関口氏も榛沢氏も特に名づけたことはないようであり、これまでは建築関係誌などで「旧関口邸茶席・会席」として紹介されてきた。それが今、2018年春から公開するにあたって、所有者と運営者は「**北鎌倉 宝庵**」と新たに名付けたのである。そ



常安軒



関口泰自筆の夢窓庵の図（色紙）

の由来は金宝山浄智禅寺による。そして2棟の茶室建築の内、大きいほうの数寄屋建築を「**常安軒**」と呼ぶ。その破風に東慶寺の井上禅定師揮毫で「常安軒」と墨書した板額が掲げてあり、浄智寺住職だった1981年以降だろう。もうひとつの茅葺草庵の茶室は、関口氏自筆の草庵写生墨絵の色紙があり、「**夢窓庵之図 默山人寫**」と書き添えてあるので、「**夢窓庵**」とその名を引き継いだ。默山とは関口の号である。

●関口泰が愛でた浄智寺谷戸の風景

宝庵は、鎌倉の谷戸（やと）と呼ばれる三浦半島の典型的な地形



夢窓庵

の中にある。このあたりから半島特有のデコボコ丘陵ばかりで、海辺に沿ったところの外には平地が少ないので、12世紀ごろの昔に鎌倉幕府ができたところから、人口増加に対応して、丘に切りこむ狭い谷間に宅地をつくってきた。わたしもながらく鎌倉の谷戸に住んでいたから分るが、谷戸は谷の向きや深さによつては、日中のほんの少ししか日が当たらないし、奥の方になれば坂道は急になり更に階段になって、歳とると住みにくいところだ。

浄智寺谷戸は南上りであり、宝庵はその奥にある。緑の丘陵に囲まれていて、南が高く北下りだから陽光が照る時間は少ないが、四季折々の変化を見せる豊かな自然景観に恵まれている。この茶席をつくった関口泰は谷戸を愛し、短歌「浄智寺谷風景」や随筆「小鳥と花」に自然を描いている。鶯の声で目を覚まし、彼岸桜、紅梅、山桜、染井吉野、大島桜、蠟梅、雪柳、緋桃、芍薬、牡丹、山躑躅、山吹、山藤などの花々を愛でる日常を、優雅な筆にしている。

吾子のある書斎に近く乙女椿紅梅植ゑし庭師翁は

植込の向ふは茶庭こちらには牡丹植ゑんと苗を買ひけり

大き巖うしろになしてこの梅はことしれうらんと咲きにけるかも

吉野窓の茶室の前に白萩の花枝長くしだれ咲きたり

むらたけの竹の葉末の雫さへ落さぬほどの朝の風の風ふく

この谷は雨こそよけれ山百合の花しろじろと浮きて見えける

(関口泰著『空のなごり』より引用)

関口がここに居を構えたのは1930年、41歳だった。多くの評論や随想をここで筆にして世に送り出した。

わたしが家を建てた昭和五年頃は、御寺より上にはわたしの家一軒だけで、(中略)私が浄智寺谷を初めてみたのは、昭和

五年の二月の末であつた。もう此の時は今の道が一本荒野を貫いてゐる姿で、道の両側は枯れた茅萱と草とで足を踏み入れるにも困難であつた。(中略)それでその時すぐに約束して三月から借りる事にしたのである。(中略)四月二十六日から建築を初めて七月末には引越してきたのであつた。(関口泰著『金

寶山浄智禅寺』後書きより引用)

この家が茶席敷地の南に今もある関口家の母屋だった建物である。この5年ほど後に、陶芸家の久松昌子がさらに奥の一段上に窯を築いたが、そこが今の宝庵の南隣にある「たからの庭」である。

関口がその生を閉じたのは1956年春のこと、主のいなくなつたこの茶席をしばらくして引き継いで再興したのは榛沢敏郎さんだったが、この建築家もこの谷戸の自然と茶席を愛していたからこそ、3代目の主にバトンタッチができるのだ。



浄智寺谷戸の奥にある宝庵

2・夢窓庵の由来

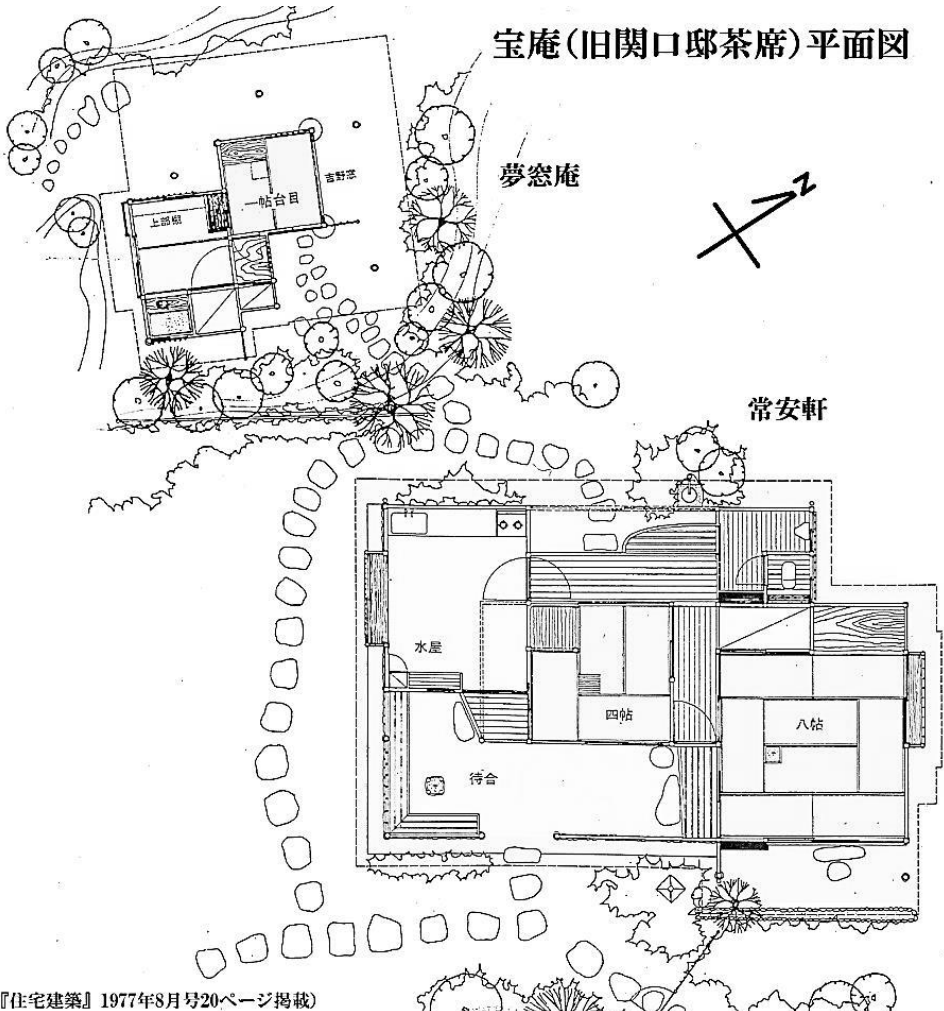
●関口泰と遺芳庵そして宝庵

「宝庵」には山口文象設計の茶室は「常安軒」と「夢窓庵」の2棟あり、さてどちらから話をはじめようかと考えたのだが、建築主の関口は「夢窓庵」の方から想を起したらしいので、ここでもそこから始める。

関口が居を構えて美しい緑の谷戸を眺めつつ、その風景に奈良の室生寺にある五重塔を建てたいと思い始めた。2年ほどそれを考えていたがとても無理と覺つて諦め、次に思いついたのは京都の高台寺にある茶室「遺芳庵」を写して作ることだった。京の旅で見て気に入ったのである。この小さな草庵茶室ならば経済的にも可能である。

次で湧き上った空想が吉野窓の建築だ。これは前から吉野窓を知ってゐてあれをここへ建てようと思つたのではなくて、義弟の旭谷左右に案内されて京都の茶席を見物してまはつてゐる時に、高台寺

宝庵(旧関口邸茶席)平面図



(『住宅建築』1977年8月号20ページ掲載)

の中の佐野画伯の家にある「遺芳」の席を見て、これはいいと思った。無論茶道の方からではなくて、私の庭における絵画的効果からの話であるが、二坪か三坪の小さい家に比較してトテツもなく大きい三角形の屋根と、伽藍石を踏まへた大きな丸窓は、それだけで絵だ。それに何よりも、一畳大目の茶室と二畳の水屋は、建築費からいっても、宝生寺の五重塔の如く空想に終らずに実現の可能性をもつし、長く茶室につかはれずに暴風雨に壊されたまま蜘蛛の巣だらけの物置のやうに、庭の隅に抛り放しになってゐる此の可憐なる茶席は、柱や床板の一つひとつに高価な正札のつけてあるやうな富豪の茶室とは事変り、私に消極的自信をつけてくれるに十分なものがあつたからだ。

それで洋画家たる旭谷と、ドイツのパウハウスにゐた新建築家の山口蚊象君とに相談して早速建築をはじめたのである。鹿子木門下の洋画家ではあるが、京都に育つて裏千家の茶の素養もあり、六、七十の茶席を廻つて研究して斯道の大家にならんとしつつある旭谷と、分離派の新建築家ではあるが、早く茶室建築に目をつけて、ベルリンで修業してゐる間に私と茶室建築の約束をした山口君であるから、変に型にはまつた茶の宗匠や、高い金をとつつけた茶室建築家と相談するよりは、余程話がつきやすいわけである。(関口泰著「吉野窓由来」より引用)

つまり、今の「北鎌倉 宝庵」をつくりはじめるときは、関口泰が遺芳庵の茅葺茶室をつくりたいことからじまつたのだ。それを山口文象に話したのはベルリンであつたという。山口がベルリンのWグロピウスの下にいたのは1931年春く32年の6月、関口が朝日新聞のベルリン特派員だつたのは1932年4月く11月であ

る。山口の滞欧時に記入していた手帳があるので見ると、1932年2月14日と3月3日に関口の名がある。関口の滞在時期より少し前だが、手紙とか電話連絡のメモだろうか。

関口の話の遺芳庵については、山口文象も関口よりも前にそれを見ていて、素晴らしいデザインだと知つていた。なお、関口の文中に「パウハウスにゐた新建築家山口蚊象君」とあるが、山口はパウハウスに居たことはない。また名前が蚊象となつてゐるのはその頃の自称であり、後に文象と戸籍名も変えた。

ところで、そもそも関口はなぜ茶席を設ける氣になつたのだろうか。その母方の茶道の家系を追つたエッセイ「宗偏流の家元」(『空のなごり』所収)にこう書いている。

私の祖母が山田宗偏の家から出てゐるので、私の母が一時宗流の家元の八世を襲ひ、不審庵十一世宗貞を名乗つてゐたことがあつた。(中略)わたしはここに機会をえて、宗偏の血統が微かながら残つてゐたことを記録し、私個人としては、道安好みの一畳台目どうこの席で、(中略)十一世不審庵宗貞の靈前に茶を奉ろうと思ふのである。

どうやら、血筋のゆえにやむなく宗偏流家元となり、多くの子どもを育てて茶室も道具も持たずにいた母・操への敬愛、思慕そして供養が根底にあつたようだ。

●山口文象と夢窓庵

関口の文中に、山口が「早くに茶室建築に目をつけて」いたとあるように、山口文象は逋信省の製図工であつた頃に、大阪市内の局舎工事現場監理の仕事で1921年から22年にかけて大阪に住ん

であり、休日には京都、奈良、堺などの茶室建築を訪ねて茶室研究をした。写真を撮り実測もしたが、その多数の写真プリントがRIAにある。その中には高台寺の遺芳庵もある。だから関口に遺芳庵を持ってきたと言われたときに、既にそれを知っていた。

これがすばらしいデザインなんです。屋根のヴォリュームの大きさ、それら全体のプロポーションが実にすばらしい、その話を関口先生にしたら「じゃあ見に行こう」というわけで見に行きました。そこで決まったわけです。

『住宅建築』1977年8月号

したがって、この茶室は既存の茶室のコピーであり、建築家山口文象のデザインではないが、山口の談には「敷地の条件に合わせて」左右反転したともいう。茶道に暗いわたしにはそれがなぜなのかわからないが、茶庭の構成上でそうなったのだろうか。茶道に通じていた関口あるいは夫人が本勝手を望んだのかもしれない。

「丸窓の位置がなかなか決まらないので、会席のほうもずっと後れまして」ともあるから、夢窓庵の位置決めが最初であり、それを焦点として茶庭も常安軒も配置を決めたのだろう。そこにはオリジナルデザインがある。なお、日本では昔から茶室の建物は、「写し」といつて、よい茶室のコピーを別の場所につくることを普通に行っていたから、ここでも特に不思議なことではない。後で述べるが「常安軒」にも重要な部分に写しがある。

それにしても、ナチスの暗雲漂う1932年のベルリンで吉野太夫の遺芳庵の話とは、なんとも粋な二人である。その年に山口文象は帰国したが、翌年にブルノ・タウトがナチスを逃れてアメリカ亡命を目指して日本にやってくるし、翌々年には山口の師匠のW・グ

ロピウスがイギリスに逃れてアメリカに亡命する。そのブルノ・タウトは日本で山口文象と何度か出会っており、この宝庵を褒めているのである。1934年6月に山口文象はその建築作品個展を銀座資生堂ギャラリーで開いたが、観に来たタウトが6月15日の日記に書いている。

建築家山口蚊象氏の作品展覧会を観る

(同氏はドイツでグロピウスの許にいたことがある)。作品のうちでは茶室がいちばんすぐれている。——山口氏はここでまさに純粹の日本人に復ったと言っている。その他のものは機能を強調しているにも拘らずいかにも



高台寺遺芳庵

(1922年頃 撮影：山口文象)



旧関口邸茶席の茶室

2017年12月 撮影：伊達美徳

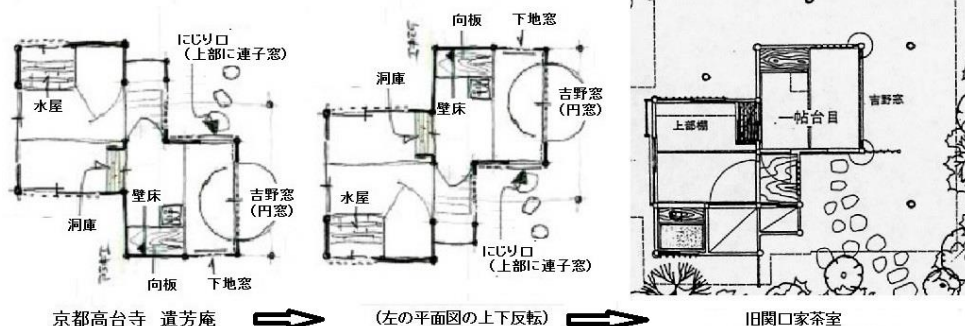
硬い、まるでコルセットをはめている印象だ。とにかくコルビュジエ模倣は、日本では到底永続するものでない。『日本—タウト日記 1935—1936』篠原英雄訳 岩波書店 刊)

タウトが書く「茶室」とは、今の宝庵のことである。ほかにも出世作の日本歯科医学専門学校など8件のモダンデザイン建築を展示したのに、タウトがほめたのはこれだけであった。タウトの評価をどうとるか難しいが、桂離宮を称賛し日光東照宮を貶した鑑識眼でみた関口邸茶席であった。彼が日本で褒めたモダンデザイン建築は、東京駅前にある中央郵便局舎（吉田鉄郎設計）だけだったようだ。

●大工棟梁山下元靖と夢窓庵

この関口邸茶席の工事をしたのは、大工棟梁の山下元靖であり、『工匠談』（1969年 相模書房刊）という本を出して、自分のいろいろの仕事を語っているが、その中でこの茶席の想い出も35年も前のこととして語っている。

この本には、山口文象による「山下さん」という序文があり、関口から設計を依頼され、山下と「毎日浄智寺の現場で……けんかをしながら楽しんで仕事に没頭した」と記している。どちらも3



遺芳庵は逆勝手だが、夢窓庵は左右反転したので本勝手



高台寺遺芳庵



旧関口邸茶室の左右反転写真

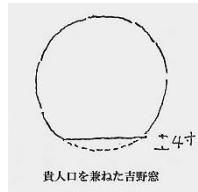
左は遺芳庵、右は夢窓庵を左右反転、当然ながらそっくり

0歳そこそこの若者だった。

山下はその本の「北鎌倉の関口邸の茶室」という章で、常安軒については何も述べずに、夢窓庵と母屋の離れの工事についての自慢話ばかりしている。

その夢窓庵の茶室について、草ぶき屋根の小屋組み仕口の仕事を茅葺屋根専門の職人から褒められたこと、吉野窓を貴人口にも使うように工夫したこと、土庇柱の杢石に寺院の向拝の杢石を転用したように古びて見える工夫をして関口を感心させたことなど、職人肌が面白い。

窓は吉野窓にし、直径を京間の六尺の大丸窓にしました。それは貴人口にも使用する関係で、丸窓の下部を半紙幅の半幅、つまり下から約四寸の高さのところを図のよう



うにしました。『工匠談』
しかし現在の夢窓庵の吉野窓は、塗り框があがっているし、障子の開きは人が出入りできる幅ではないから、貴人口にも掃出しにもならない。後の改変だろうか。

方形屋根の頂上にかぶせる陶器の甕について、山下はこう語る。

茶室の屋根は方形で葺き仕舞いの棟には、直径二尺の摺り鉢を使うことにし、わざわざ三州へ注文してのせましたが、それを見て施主もたいへん喜んでくれました。『工匠談』

ところが関口は、「鎌倉の骨董屋で購って来た二百年前のすり鉢の朱色もよく映って来た」（「吉野窓由来」）と書いているから、どちらが正しいのだろうか。

現在の夢窓庵の屋根頂点に乗る甕について山口文象が言う。

丸窓のほうの屋根に瓶がのつかっていますが、いまのやつはわたしがのせたのとはちがうんです。もつと大きかった。あれはいまあの茶席の足元にころがっている摺り鉢なんです。プロポーションからいって、いまのは小さい。

（住宅建築 1977）

先の見学の時に床下を覗き込んだら、大きな鉢がひとつ転がっていたから、これが元の摺鉢かもしれない。破損して取り替えたのだろうか、それは榛沢敏郎さんに訊かないと分らない。

夢窓庵は茅葺である。その屋根と障子窓の大きな三角形と円形とが対になっている大胆な造形である。床面積は3坪弱なのに、屋根投影面積は8坪余り、そのうち土庇が6坪もある。丸窓のある正面から見ると、間口は1間幅なのに、屋根の軒先幅がその3倍もあり、それが四角錐をつくる。巨大丸窓はでっかち頭に対抗するためか。今どきは茅葺屋根の維持が、なかなか難しそうである。現状を見ると、さしあたって挿し茅による修復が必要なようだ。棟梁の山下もこれを建てる時に、「その頃、草ぶき屋根の葺ける専門の屋根職人は、北鎌倉の辺には六〇歳になる老人が一人しか残っていませんでした」（『工匠談』）と語っているが、現代はどうなのだろうか。

北鎌倉には、浄智寺の書院と茶室、明月院の開山堂、東慶寺の山門と鐘楼、円覚寺の選佛場、長寿寺山門と観音堂など寺院に茅葺屋根が多いし、いくつかの茅葺民家もあるから、それらの維持修理の茅葺職人がいるのだろう。

3・常安軒の由来

●常安軒のデザイン

宝庵にアプローチするには、浄智寺谷戸の中を貫く道を奥に向かうと、右手に草屋根の風雅な門が迎えてくれる。その門をくぐりゆったりと右カーブする露地を歩めば、最初に出会ったのがこの数寄屋建築の常安軒である。先に紹介した夢窓庵は、その裏にある。いわば宝庵の表顔は常安軒なのに、ここでの話を夢窓庵から始めたのは、関口の茶席発想がそこから始まったのに従ったからである。

夢窓庵が小面積なのに大きな高い屋根を載せてボリュームを大きく見せているのに対して、常安軒はその大柄をできるだけ小さく低く見せようとしている。屋根を小瓦一文字葺き柿（こけら）葺き（いまは金属板葺き）の奴（やつ）葺きで薄く軽く見せる。しかし、それはヨーロッパ帰りの洋風モダニスト建築家として売り出したその頃の山口文象の作品としては、真反対ともいえる正統派和風数寄屋造りである。山口が洗礼を受けたモダニズム建築は、できる限り技巧を見せないように、シンプルでプロポーション美しくデザインする。「豆腐に目鼻」と言われたほどの愛想なしである。いっぽう、数寄屋建築は技巧の満艦飾である。だが、数寄屋建築にも精通するモダニスト山口文象は、さすがに数寄屋の技巧を尽くしながらも、できるだけシンプルに納めてプロポーションを追及する。

常安軒のデザインについて山口文象は語る『住宅建築』1977。
しかし考えてみると、当時はずいぶんと細かい仕事をしましたね。瓦の寸法なんかも全部普通の寸法とちがう。あの数寄屋建築の瓦ですよ。あれは全部特別に焼いたものなんです。大き

さとか全体のプロポーションからいって、普通の瓦ではない。プロポーションから瓦一枚一枚の寸法を出しました。

たしかに、山口文象はモダンでも和風でもプロポーション・デザインの人であり、特に和風はその大工棟梁の家系という出自からして身に付いた技能であつた。常安軒は数寄屋にしてはどこかスマートである。

●常安軒も写し茶室か

関口が常安軒と夢窓庵の二つの茶室建築を対にして配置したのは、高台寺の「遺芳庵」が「鬼瓦の席」と対になっていることに寄っているようだ。関口は常安軒の四畳茶室を書斎にしていたようだ。

吉野窓の号は即ちこ



左が常安軒、右が夢窓庵

の吉野太夫が、佐野紹益の室となつてから、風流な家庭生活を送つたと伝へられる茶室なのであつて、今やはり高台寺にある鬼瓦の席は紹益の茶室で、付書院の障子をあげると、斜に吉野窓が見えるやうな配置に作られてゐたものだ。この窓と窓とを向ひあひに二人が顔を見合せてゐたものでもなからうが、吉野窓は明眸の佳人を偲ぶにふさはしい、よい意味で女性的な美しい建築だといふことはいへる。(中略)

私が今筆を執つてゐる書斎からも頭を少し前に出すと左に吉野窓が見えてゐる。萱の屋根の色も古び、鎌倉の骨董屋で購つて来た二百年前のすり鉢の朱色もよく映つて来た。まだすつかり暮れ切らない薄暮、まだ萱屋根の形がほのかに見える頃に燈を入れると、一間四方の壁に直径五尺二寸の丸窓が白い障子の棧を薄墨に見せて、大きな雪洞のやうに浮くのは何ともいへず美しい。丸窓を八寸開いて、吉野太夫のやうな白い顔がのぞけばといふ妄念も起るが、……。

(関口泰「吉野窓由来」より)

遺芳庵と鬼瓦の席との二つの茶室の關係を、常安軒と夢窓庵の關係にとりいれたのなら、それもまた写し茶室の技法であるとも言えるだろう。

この二つの茶室のとりあい角度が、直角から微妙に開いているのは、互いにその角度で見ると、妄念が湧くほど美しく見えるからだろうか。そのあたりで建築主関口と設計者山口とが、あれこれと思案し妄想を働かせるものだから、この配置が決まらなく「会席の方

もずつと」工事着手が後れたのであろう。

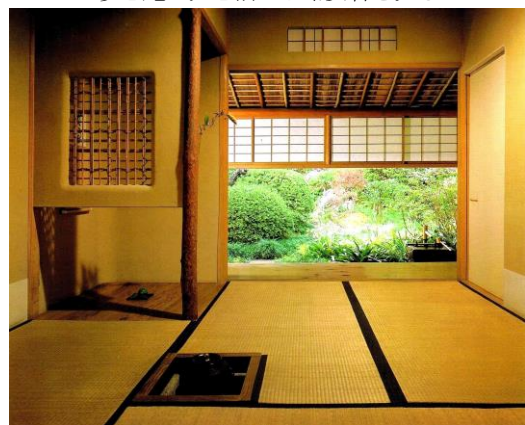
山口は「数寄屋造りの方ね、これは創作でね、あまりマネはなはずですね」『住宅建築』という。夢窓庵が写しであるのに対して、常安軒はオリジナルだと言う。だが、そうだろうか。

常安軒の中心にある四畳茶室から、広椽を通して見る西の庭の景色は、この建物での一番の見せどころだが、それを観て「アレッ、これって忘筌写しだ」と思う人は多くいるだろう。京都の大徳寺孤篷庵の茶室忘筌(ぼうせん)である。

京都と鎌倉それぞれの茶室の庭の眺めと平面とを比べてみよう。茶室そのものは、忘筌は書院風で12畳と広いから、こちらの常安軒の4畳茶室とはかなり異なるが、庭の眺めはどちらもその西側に



夢窓庵の丸窓前から常安軒を見る



常安軒 四畳茶室から庭を見る

●宝庵の設計図

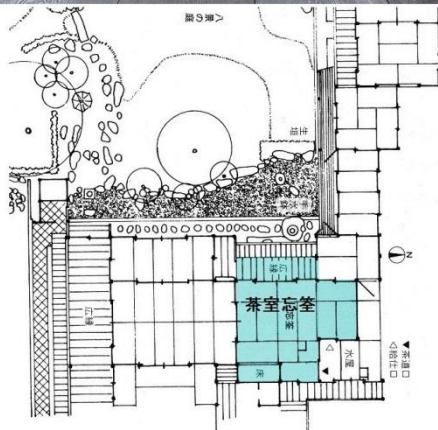
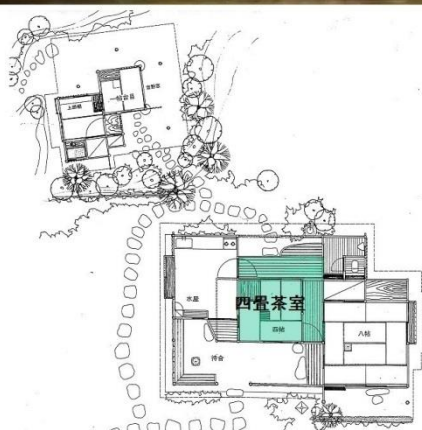
開く間口2間の広縁と落椽があり、右に躊躇を配し、そのむこうに吊り障子で上半部を見切っている。やはりここは「写し」と言わざるを得ないだろう。たぶん、この写しも吉野窓茶室と同様に間口の要望であり、「書斎からも頭を少し前に出すと左に吉野窓が見え」るようにしたのでろう。どちらも風雅な眺めだが、鎌倉の方がゴタゴタせずに野趣に富み美しい。もともと、創建時の姿は分らない。それにしても鎌倉に居ながらにして忘筌から吉野窓を眺めようなんて、両方の良いところり組合せの写しだからこそできる欲張り技である。どおりで山口の「あまり……はず」と、どこか躊躇する口ぶりである。ただし、20歳ころの山口が京都で訪ねまわった茶室写真帳には忘筌はない。いずれにしても、宝庵は建築主の間口の意図がおおいに入っており、いわば間口と山口の共同設計のように、わたしは思うのである。

山口蚊象建築事務所時代につくった宝庵（関口邸茶席）の設計図は、青焼き図面8枚しか現存していない。吉野窓茶室は東立面図、断面図、室内断面展開詳細図の3枚、数寄屋会席は8畳座敷断面展開詳細図と4畳茶室断面詳細図の2枚、そして離れが2枚で、いずれも平面図が無い。これらは山口の弟子だった小町和義さんが、山口栄一（山口文象の実弟）から託されていたのをつい最近見つけ出した。これらの図面を書いたのは山口文象かもしれないが、

常安軒 四畳茶室から庭を見る



京都大徳寺孤蓬庵 茶室忘筌から庭を見る



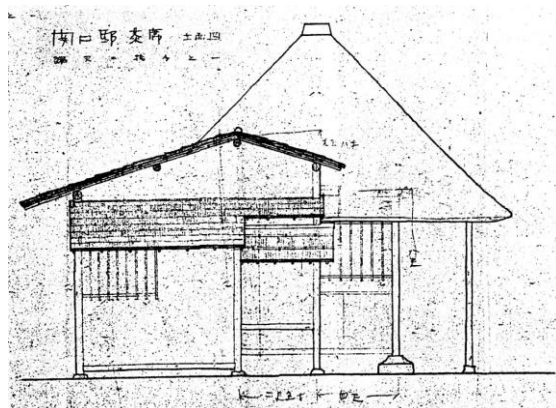
筆跡が違う気もする。河裾逸見（最初の所員）か山口栄一かもしれない。

大工棟梁の山下元靖は工事について『工匠談』にこう書いている。

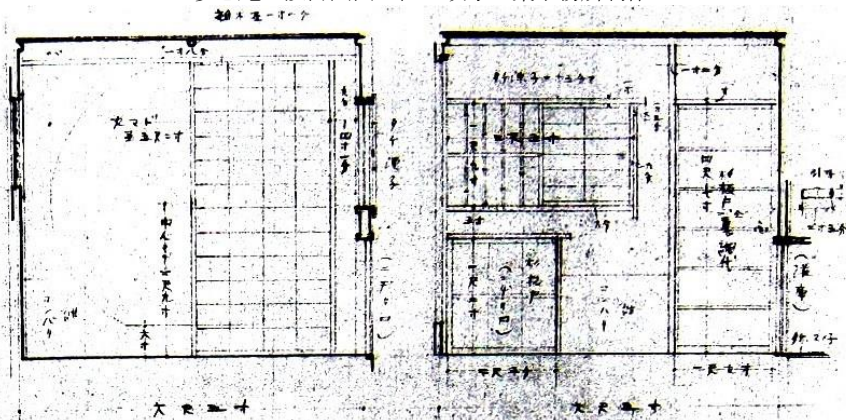
昭和八年から昭和十年にかけて約二九年間、北鎌倉の浄智寺という寺の奥にある関口邸の工事を頼まれて、毎日横浜から通うようになりました。その工事は本館のほかには、茶室と教寄屋造りの会席、それに同じ邸内の親戚の住宅二棟、つごう四棟の新築と、その他に本館の増改築があったわけです。設計は山口文象建築事務所でやられました。

その仕事のオーナーであった関口泰は、1930年に自邸を建てて引越してきたと自著に書いているから、山下が本館という関口自邸そのものは山下の工事ではなかったのだろう。その関口自邸は、この茶席の敷地の北に隣接して現存する。その本館の増改築とは、本館の南の広い池のほとりに、渡り廊下でつないだ3坪ほどの「離れ」増築であつたらしい。

それは昔の高殿のようなもので、用途は主人が毎朝ここで謡曲の練習をするためのものでした。構造としては、四本の丸柱を使用し、そのうちの二本は池の中に据えた玉石の上に建てることにし、できるだけ風雅な感じを出すこ



夢窓庵の設計図面 山口蚊象建築事務所制作



夢窓庵の設計図 吉野窓と欄り口部分

とに努めました。『工匠談』

そして四方に壁や建具はなくて手すりだけの吹きさらし、床は板張り、天井は漆喰塗りで中央へ周りからムクリがあり、下で手を叩

くと日光の鳴き龍現象が起きたと自慢話を書いている。現在はこの離れはないが、小さな池はある。

しかし、「離れ」のタイトルの設計図面2枚を見ると、山下が書いた姿とは全く違う図であるから現場で設計変更があったのか。山下の書くように離れを含めて5棟を工事したとすれば、そのうちの親戚住宅2棟と鳴き龍天井離れの図面が一切残っていないし、それらについて山口文象が1976年にここに来た時もその後もまったく言及しなかったから、推測すれば、現存茶席2棟のほかは山下棟梁の設計施工の可能性が高い。

4・宝庵を興し守り伝える人々

●宝庵を興した関口泰氏

この茶席をつくった関口泰（せきぐち たい 1889～1956）は、朝日新聞論説委員だったジャーナリストであり、評論家として政治や教育論の著作を多く世に問い、加えて旅と山歩きを趣味として随筆や短歌俳句もよくした。

著作の公刊書も36冊と多く、『民衆の立場より見たる憲法論』（1921年）から始まり、『軍備なき誇り』（1955年）が最後であった。没後に関口を惜しむ人々や近親者が編集刊行した『関口泰文集』（1958年）と『関口泰遺歌文集 空のなごり』（1960年）に、主な著作が収録されてその足跡がよく分る。

この浄智寺谷戸を愛した関口は、『金寶山浄智禅寺』（1941年）

なる深い歴史考証の著作を出版した。その「後書」に、関口が浄智寺谷戸に居を構えた1930年頃の風景や人物の状況を細かに記している。それらを瞥見して関口のことを記す。

静岡市に生まれ、東京帝法科大学を卒業、1914年から19年まで国家公務員、そのあと朝日新聞に入社して論説委員、1939年に退社し、評論家として活躍することになる。リベラルな立ち位置で政治や教育の評論をよくし、政府や自治体の委員なども務める。1950年に初代の横浜市立大学学長となった。

1930年に北鎌倉の浄智寺谷戸に自邸をつくり、34～5年に自邸の南に今の宝庵の2棟を設け、また赤城山に別荘を構えていた。鎌倉と赤城から数多くの評論と随想を世に出し、浄智寺谷戸で67年の生涯を閉じて宿痾から脱した。



建設当初の茶室と庭



関口 泰氏

関口の数多くの著述の内、すでにこれまでも引用してきた「吉野窓由来」は、「宝庵」についての紹介文とでもいう随想で、『山湖随筆』（1940年）と『空のなごり』に収録されている。ここに関口が山口とベルリンで、吉野窓茶室の話をしたことが書かれているが、そのとき二人は既に知遇であったと山口文象は語っている。山口が関東大震災直後からの建築運動を通じて、多くの美術家や文化人たちと交流を持ったので、その頃であろう。

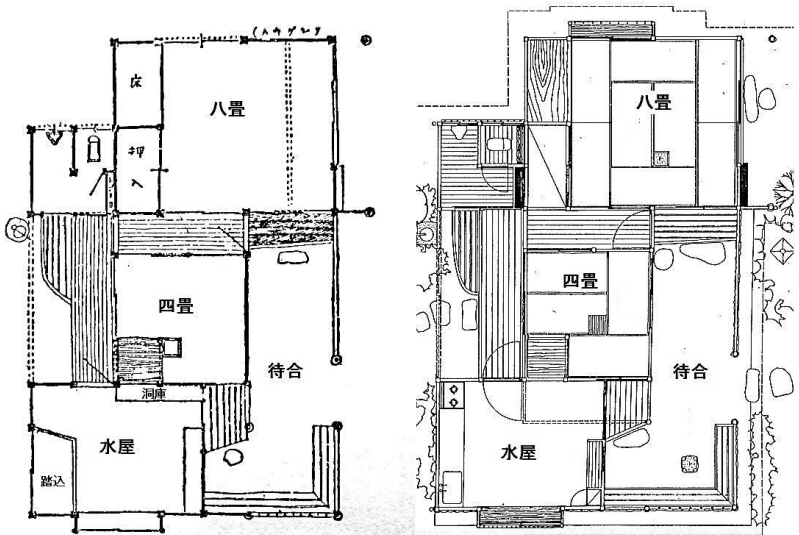
関口の文章は、「やわらかく話すように出来ていて、それが論理の糸で長くつないであり、長い文章だがそれが分りよく、分りよい文章に得て欠けている高い気品があった」（『空のなごり』の序文と、朝日新聞社で論説委員の同僚だった笠信太郎が書いている）。

そこで、関口の単行本をせめて1冊は読もうと、わたしが選んだのが関口最後の著書『軍備なき誇り』である。これが出た1955年といえば、敗戦10年目、日本では逆コース、再軍備、ビキニ水爆実験、原子力兵器、憲法改正、吉田長期政権などが言われる。国際情勢は朝鮮戦争が休戦になったばかり、東西緊張が高まる中で、ベトナムあたりがきな臭い。読んでいて、日本と国際情勢の諸課題も複雑さは現代になっても不幸にしてよくなっていないのであり、人名と国名を入れ替えると今に通じる有様で、関口の論調が今の朝日新聞調であるのが、なんともはや興味深かった。

●宝庵を設計した山口文象氏

建築家山口文象（やまぐち ぶんぞう 1902〜78 戸籍名は瀧蔵だが蚊象と自称、40歳から文象、55歳で戸籍も文象）は、大工棟梁の次男として東京浅草に生まれた。職工徒弟学校を卒業し

て清水組に入ったが、建築家をこころざして逋信省営繕課に移り製図工となった。そこで才能をぐんぐん現して、上司の建築家たちに認められる。



常安軒平面 左は建築当初、右は現在

比較すると、当初は水屋の左に引違戸で出入りの踏込み。

四畳茶室の炉の位置が異なり、水屋との間に洞庫。八畳に炉と出窓がない、

関東大震災の直後から、内務省復興局と日本電力で橋梁やダムデザインにもかかわった。仲間の若い建築家の卵たちを糾合して「創宇社建築会」を結成し、建築運動のリーダーとして建築界で名が知られた存在となり、多くの美術家や文化人との交友を得る。1927年から建築家石本喜久治のもとで、朝日新聞社屋や白木屋百貨店等の設計にたずさわった。

1930年に幸運な機会を得てシベリヤ鉄道でヨーロッパ遊学の旅に出て、ベルリンで建築家グロピウスに師事し、各地を回って船便で1932年に帰国した。

1934年に出世となる日本歯科医学専門学校附属病院を発表して一躍スター建築家となる。1936年には黒部川第2発電所・小屋ノ平ダム」を発表して、土木と建築の両方の才がある建築家として確固たる地位を築いた。

しかし、戦争がその行く手を阻み、10年ほど事実上の逼塞の後、1952年から共同設計集団 R I A (Research Institute of Architecture) を率いて戦後の再出発をした。それは現在の(株)アイ・アイ・エーとして都市建築コンサルタント組織に成長し、これが山口的戦後における最大の作品と言つてよいだろう。

戦後は何度も大病入院して、組織の長としてはつとめたが、自分で設計する活躍を多くはできなかった。いくつかの珠玉作品のひとつに晩年になって、あの関口邸吉野窓茶室を拡大したような大屋根の寺院「是の字寺海龍院本堂」の設計をしている。ただし、それは木造ではなくてコンクリと鉄であり、丸窓はない。

関口が「ドイツのパウハウスにゐた新建築家の山口蚊象君とに相談して早速建築をはじめたのである」『吉野窓由来』ただし山口は

パウハウスで学んでいない」と書いているが、茶席が実現した1934年の頃の山口文象は、「洋行帰り」の「国際様式」に通曉した。モダニズムデザインの流行建築家への道を勢いよく登り始めていた。そのモダン建築家が、なぜ純和風の数寄屋建築の設計をできるのか。茶席の設計を関口から依頼された時のことをこう語っている。

……茶席もつくりたいというわけですね。「文ちゃんどうだい、茶席もできるかいな」、「いやあ、やってますよ、まっ白い建物ばかしじゃなくて日本建築もやってます、茶席できます」「そう、じゃひとつ頼もうかなあ」……『住宅建築』1977

関口も山口文象の仕事ぶりを知つていて危惧したのだ。だが山口文象は和風には自信満々だ。茶室は京都の現物で研究している。

谷口吉郎や吉田五十八の茶席なんか、わたしは茶席だと思つていませんね。あれは学問的に、非常に厳しい割り出し方からきていて、それが基礎になつて先生の茶席になっている。わたしのはそれとはちがう。わたしの親父が大工で、茶席も手がけていましたから、親父の後をついて歩いたりして、ごく自然に感覚的というか触覚的というか、身体で覚えたところがあつたと思いますね。とくにプロポーションね。ぼくのは、だから感覚から入つて行つた茶席だと言えるでしょうね。

『住宅建築』1977

机上で学んだ大学出の有名建築家よりも、大工棟梁家の出自として身体に滲み込んだ才能があるのだと、いかにも自信に満ち満ちた言葉である。流行最先端のモダニズムで売り出した山口だが、実は住宅は和風伝統風も洋風モダン風も設計をした。山口が戦前に設計した住宅建築で、洋風モダン住宅は今は一軒も残っていないが、和

風住宅は、この宝庵のほかに2軒が現存する。新宿区にある小説家の「林芙美子邸」（1940年、現・区立林芙美子記念館）は、数寄屋と民家風をつき交せて一部に洋風もある巧みなデザインである。その書斎の北庭に向つて、宝庵の常安軒にある忘筌写しが左右反転して登場する。宝庵と同じように復元修復されて創建時の姿を保っている。

大田区にある「山口文象自邸」（1940年）はモダンなプランで、和風ではあるが木太い北陸民家風であり、数寄屋とは全く異なる。今は原形を若干は保ちつつもかなり改変されているが、実はその改変過程が面白い。

山口文象は関口邸のころから一気に多作となつて話題作を発表し、鎌倉にも関口邸のほかに彼の作品があつた。中でも北鎌倉に建つた「山田智三郎邸」（1935年）は、時代の典型的な最先端モダンデザインであつた。北鎌倉にはもうひとつ山口の和風作品「前田青邨邸アトリエ」（1936年）があり、これは現存すると灰聞したことがあるが、どうなのだろうか。山口が石本喜久治のもとで仕事していた頃の1929年に担当した、「朝日新聞社社員クラブ」が鎌倉の由比ヶ浜近くに建つていた。1925年頃には数寄屋橋際に建つた朝日新聞社屋の設計に携わっているから、そこで当時は論説委員の関口に出会つたのだろうか。

●宝庵を建てた大工棟梁山下元靖

旧関口邸茶席だつた今の「宝庵」と、その北に隣接する旧関口邸の工事をしたのは、大工棟梁の山下元靖（1896〜）？ やましもとやす）であつた。山下の『工匠談』（1969年相模書房



林芙美子邸 1940年



山口文象



左は山田智三郎邸 1935年、右は前田青邨邸 1936年 いずれも北鎌倉

によれば、1896年に伊豆下田に生まれた。14歳で下田の町棟梁の親方に弟子入りして修業し、その間に蔵前高等工業夜間部で学

び、1921年に独立して大工棟梁となり、横浜で町場の大工として仕事をした。本格的な数寄屋造りに取組んだのは、1931年から2年ほどの東京深川の鰻料理の「大黒屋」の工事だった。その設計者は石本喜久治で、これを機に建築家たちの仕事をするようになり、また数寄屋建築の研究をしてその方面の仕事を得意とする。山口文象は石本事務所で1930年まで日本橋の白木屋百貨店設計をしていたが、「山口氏と私は、昭和五年以来交流のある間柄でありましたが、」（『工匠談』）とあるから、山下と出会っていたのだろう。戦中と直後は横須賀で軍関係の仕事、1950年から町棟梁として再出発、主に逗子鎌倉方面で仕事をし、全日本建築士会理事や神奈川県建築審査会の委員などを務めた。

『工匠談』には多くの木造住宅の仕事を語り、大工技法の秘訣などを書いている。その中に「北鎌倉の関口邸の茶室」の章があり、そこでの職人技を語り、今の宝庵のほかにも3棟を建てたとあるが、宝庵の2棟は山口文象設計だが他は山下の設計施工であろう。1935年の関口邸竣工のときをこう語る。

長い工事も各職方の努力の結果、無事に落成したので、祝賀の園遊会が催されました。その日の来賓はいずれも一流の名士ばかりで、邸内には甘酒やしるこ、それにおでんやすしなどのいろいろの模擬店が設けられ、なかなか盛大なものでした。そして私たち各職方も手伝いに招かれましたが、私どもは餅つきを頼まれたので、私が得意のコネドリをして、大工連中で景気よくついたものです。私の長い大工生活のうちで、こんな盛大な落成祝賀会は初めてのことでありました。

●宝庵を再興した建築家榛沢敏郎氏

関口没後からしばらくして（1970年前後か）、北鎌倉に住む建築家の榛沢敏郎さんが宝庵を買い取って受け継いだ。主を失い荒廃していた建物や庭を、京都から職人たちを呼び寄せて、復元的設計で丁寧な解体修復をほどこして、茶席を再興した。なお、当初の建物配置は、現在よりも東に寄っていたのを、この時に現在の位置に移築再建したそうである。

そして谷戸と建物を愛でつつ、アトリエとして建築の想を練り図面を画いて過ごされてきたようだ。関口邸茶席が今の宝庵として、創建時とほぼ同じ姿かたちで今に伝えられているのは、ひとえに榛沢さんのお陰である。

ここでのわたしの記述テーマは山口文象の関わりかたを探ることにあり、したがって現在のこれらの建築そのものについてはほとんど触れていない。それはその能力がわたしにないこともあるのだが、今のこの建築を語るべき人は榛沢敏郎さんにおいて他にはいないはずだからである。敬服するこの建築家の話を聞きたい。

地域に根差したこの建築家の作品は鎌倉の各所にあり、浄智寺谷戸に宝庵を訪ねるために北鎌倉駅前の広場に降りると左右に榛沢建築が迎えてくれる。

2017年に榛沢さんはここを去り、土地建物とも浄智寺に戻された。

●宝庵を受け継ぎ保ち伝える人々

この谷戸はすべて浄智寺の土地である。この茶席の新たな主となった浄智寺住職の朝比奈恵温さんは、この茶席を高く評価して、朽

ちあるいは転ずるのを惜しんで、その英断で保全活用公開へと舵を切った。この茶席への評価と展望をうかがいたいものだ。設計図を発見した建築家の小町和義さんにも、山口文象の戦中戦後の弟子として、また茶室建築の名手として、現地でゆっくりと話を聞きたいものだ。

「宝庵」としての新たな展開は、南隣の「たからの庭」を運営する「鎌倉古民家バンク」が茶席を借り受けて運営を担うことになった。大勢のボランティアたちが、2018年春の公開に向けて整備に取り組む。茶席の新たな歴史が始まった。美しい浄智寺谷戸には、これを興し、継ぎ、伝える素晴らしい人々がいるのだ。

◆宝庵略年表

- 1925年頃か 関口泰と山口文象が知り合う
- 1932年 ベルリンで関口と山口が会って茶席建築の相談
- 1934年 関口邸敷地内に茶席2棟(現・宝庵)が完成
- 1935年 雑誌『住宅』4月に「関口邸の茶席」掲載
- 1940年 『山湖随筆』(関口泰著)に「吉野窓由来」掲載
- 1956年 関口泰没
- 1969年 『工匠談』(山下元靖著)に「北鎌倉浄智寺の茶室」掲載
- 1970年頃か 北鎌倉在住の建築家・榛沢敏郎氏が取得して解体移築、復元修理。
- 1977年 雑誌『住宅建築』8月号に「旧関口邸茶室一畳台目及び数寄屋造り会席」掲載
- 1981年以降 「常安軒」の額がかかる(当時の浄智寺住職・井上禪定師の揮毫)
- 1982年 『建築家 山口文象 人と作品』に「旧関口邸茶席・会席」掲載
- 1984年 『現代和風建築集4・現代の精華1』に榛沢氏に

2017年8月 浄智寺所有となる
2018年4月 鎌倉古民家バンク運営「北鎌倉 宝庵」としてオープン
よる詳細な図面つきで「常安軒」掲載

◆宝庵に関する資料

- ・関口氏邸の茶席(雑誌『住宅』20巻4号 1935年4月号)
 - ・「吉野窓由来」(『山湖随筆』関口泰著 1940年 那珂書店刊)
 - ・北鎌倉浄智寺の茶席(『工匠談』山下元靖著 1969年 相模書房刊)
 - ・「旧関口邸茶室一畳台目及び数寄屋造り会席」(雑誌『住宅建築』1977年8月号)
 - ・関口邸茶席・会席(『建築家 山口文象 人と作品』RIA編 1982年 相模書房刊)
 - ・「常安軒」『現代和風建築集4・現代の精華1』1984年 講談社)
 - ・関口邸茶席設計図(山口蚊象建築事務所作成、小町和義氏所蔵、A2版青焼8枚)
 - ・ウェブサイト「山口文象＋初期RIAアーカイブス」
<https://sites.google.com/site/datey/bunzo-archives-1>
 - ・ウェブページ「1934 北鎌倉の茶席・宝庵(旧関口邸茶席)」
<https://sites.google.com/site/datey/bunzo-archives-1/1934sekiyuchi-tei>
 - ・ウェブサイト「宝庵 北鎌倉」
<https://www.houan1934.com/>
- (完 2018年3月31日)

第3章 モダニズム建築の現在

「街角のモダニズム山形梅月堂」

1. 東京神楽坂紅谷と山形七日町梅月堂

今や彼のモダニズムデザイン作品で現存するのは、3つのみである。年代順に第1は東電山崎発電所、第2は黒部川第2発電所、そして第3が、山形の中心街である七日町の四つ角にある梅月堂（ばいげつどう）である。

この梅月堂の建物は山口文象の設計で1936年に開店した。山形では一流の和洋菓子と喫茶の店であった。今は建物だけである。そして東京の神楽坂に紅谷（べにや）という、やはり和洋菓子と喫茶の店があった。これは消滅した。

このふたつが密接な関係にあったことが、ある在野の研究者によって分かった。

山形市の七日町交差点にある梅月堂は、この10年くらいのうちに廃業したらしく、今は、一階にテナントが営業していて2階以上は空き家となっている。

山形の七日町通りは、戦前から繁盛した商店街であり、いまでも瓦屋根、土蔵造りの立派な店舗も多くあるし、レンガタイルを張ったような洋風のしゃれた建物もたくさんあって、なかなか建築的にも楽しい風景である。

そのなかで異彩を放つのがこの梅月堂であり、この建物は1936年に完成したが、建築家山口文象の設計によるもので、いわゆる豆腐に目鼻とも言うべき、1930年代当時は国際建築様式と言われた流行の超モダンデザインである。

いくら山形七日町が東北では仙台に対抗する大繁華街とはいえ、その時代の最先端過ぎるこの建物をよくもまあ建てたものである。

当時の街並み風景から見れば、かなり違和感があったはずだし、あるいは東京で流行の建築として評判になったかもしれない。逆にそれだけに商業的に話題となつて繁盛につながったかも知れない。

当時の山口文象といえ、新進の流行作家とも言うべき建築家で、1932年にドイツ留学から帰り、1934年に日本歯科医専の設

計で衝撃的なデビューをし、1936年には黒部第2発電所やダムを発表して、その頃から戦争が激化する43年ころまでが彼の人生で建築家として絶頂期であった。

その山口文象がどうして山形に縁があつたのだろうか。

ここで神楽坂の紅谷の話につながる。その頃の紅谷は神楽坂で商売に成功した一流の菓子店で喫茶店も経営していたが、その経営者

が山形梅月堂経営者の五男坊だったのだ。

この紅谷と梅月堂とのつながりをわたしに教えてくださったのは、菓子屋の研究者（ほかにも研究されている）で、紅谷の歴史を調査される谷口典子さんである。

谷口さんは、紅谷研究で梅月堂との関係を調べるうちに、わたしのウェブサイト「まもり通信」のページ「山形に梅月堂を見に」をご覧になって連絡をいただき、それでわたしはじめて知った。

その谷口さんが精力的に調査された諸事情と、教えていただいた



資料「わが青春時代 山形市七日町商店街 商いへの出発点」（山澤進著 1998 みちのく書房発行）とを元に、わたしなりに整理するところである。



神楽坂紅谷は1897年に創業し、1945年の戦災で店が焼失するまで営業していた。その経営者は小川茂七といい、実質的には茂七一代限りであった。

茂七は1873年に山形市で生まれ、父は佐久間茂左衛門という。1889年（明治22年）に、茂七の兄の佐久間茂登七が、和菓子製造販売業の梅月堂を山形市小姓町で創業した。そのころの小姓町は遊郭街であったから、その需要を見込んだ菓子屋だったのだろうか。

山形市観光協会のWEBサイトには、「明治17年から同30年頃までは市内の貸座敷業者が集結し、小姓町遊郭となり、明治、大正、昭和と、60年にわたって歓楽街として繁盛した」とある。とすれば梅月堂創業はその初期にあたる。

『昭和初期の小姓町商売屋図』と表題のある地図（作成経緯は不明、谷口さんが現在の小姓町にある菓子屋からもらったもの）があるが、これには妓楼の並ぶ中に「梅月堂菓子工場」と描かれている。工場とあるのは当時は店売りではなくて、卸や配達専門であったのだろうか。それとも製造販売をしていたのだろうか。

茂七は菓子づくりをここで修行したであろうが、1893年、20歳の時に東京・飯倉の風月堂に入った。ここで菓子づくりの修行をしていたのであろう。

紅谷と取引が

あった風月堂主人の斡旋であろうか、1897年、24歳のときに紅谷本店2代目の西岡幾次郎の妹つる(20歳)と結婚して、姓が変わって小川茂七となった。つるの母方が小川姓であろうと思われるが、茂七は紅谷の婿養子となったのである。

そして茂七は、紅谷がこの年に開店した分店の神楽坂紅谷の店主になった。紅谷としては婿取りした妹に店を持たせてやったのだが、茂七は婿養子とはいえ、たった4年の修業の身だから、腕を見込まれての抜擢であったのだろう。

戦前の神楽坂は、銀座に匹敵する商業と文化の町であり、とくに関東大震災による被害が少なかったために大きく発展したのであった。文化人たちが住んだことでも知られる。

神楽坂紅谷も順調に発展して、文化人諸氏が入りする有名店となった。



小川茂七が建てて営業した神楽坂紅谷バーラー（牛込番町28番地）
1921年 島藤設計 1945年に戦災で消失
『失われた帝都東京 大正昭和の街と住人』(1991年 柏書房)よりコピー

1908年(明治41)、茂七は山形市七日町481番地の現・梅月堂の建物がある位置である土地を購入し、その5年後に兄の茂登七の名義に変更している(土地登記簿台帳による)。

上記の山澤氏の著書にある大正初期の写真には、その位置に白い2階建て建物があつて陶器店とある。この建物は、それ以前の建物が1911年の山形市北大火で焼け、道路も広がって建て直したものであろうが、この地を手に入れてからしばらくは貸していたのだらう。

茂七は、東京なら銀座4丁目交差点(当時は尾張町交差点といつたが)に匹敵する、山形随一の繁華街中心の七日町交差点角地を買い求め、故郷の実家である梅月堂をここに進出させる下地をつくつたのであつた。

1925年(昭和元)、山形の佐久間家の養子・秀治が、この地に3階建てタイル張りの洋館を新築して、和洋菓子販売と喫茶室の梅月堂七日町店の営業を始めた。秀治は後に山形商業界のリーダーとなる。

小姓町店では茂登七が、菓子製造販売を続ける。

そうして1936年、再び道路拡幅に七日町の土地建物がかることになり、梅月堂はそれまでの建物を壊して梅月堂ビルを建てたのであつた。その設計が山口文象であり、現在のY.T梅月館である。

建物は3階建てで、1階和洋菓子・パン・山形市名産食品販売、2階喫茶・アメリカ式軽食、3階ホール、屋上は展望台である。

真っ白なビルの交差点に向いたファサードは、キャンチレバーではねだした2階から上は全面ガラス張りという、当時としては大胆なデザインである。

屋上展望台というのも、当時のモダン建築の流行でもあったようだし、パーゴラ状の庇がモダンさを強調している。奥行きのない変形敷地の小さな建物であるのに、それ以上に大きく見せている。

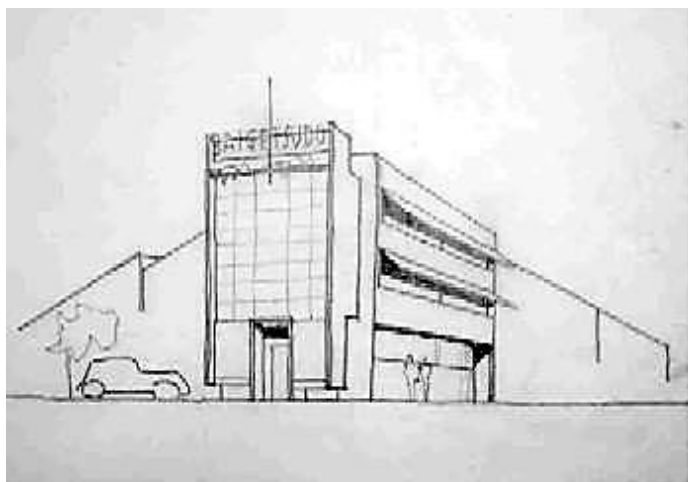
その当時の梅月堂が出した1936年10月14日山形新聞の1ページ全部を占める新聞広告を見ると、「明十五日開店／新築落成／東北に誇る唯一の近代式新興建築の粹」とある。

当時、ヨーロッパ流行のモダンデザインをとりいれる新興建築とか新興建築家という言葉があり、山口文象がまさにそれだった。

開店日には、当時の人気映画スターの高杉早苗や霧立のぼるなどを東京から招いて、開店イベントを盛り上げたことが新聞にある。

この設計者の山口文象といい、映画人気スターといい、これは茂七の仕掛けに違いないだろうと、谷口さんは推測なさるのだが、わたしもそう思う。

山口と茂七との接点は分からないが、山口の文化人好きからして、神楽坂になにか縁があったろうと推測することもできる。多分、神楽坂にも出入りしていただろう小説家の林芙美子の家（現・林芙美子記念館、1941年完成）を、そう遠くない下落合に山口文象が



設計当時のスケッチパースの一種
(RIA所蔵)

設計している。茂七は梅月堂で表に顔を出したかどうかはともかく、土地の手当てもしたこの地に流行モダン建築を建てて、故郷に錦を飾ったことであろう。

東京での流行情報や製菓技術など、梅月堂と神楽坂紅屋とは密接であつたろう。山形梅月堂は、山形の一流レストランとして繁盛する。

● 梅月堂

七日町大通と旅籠町大通りに面した四辻角に変形三階建て鉄筋コンクリートの梅月堂がありました。昭和のはじめに建てられた白亜のモダンな建築で、改築以前は一階が菓子売り場の奥に喫茶室がありました。改築後は一階がレストラン、三階がパーティなどに用いられるホールとなりました。

道路側を大きなガラス張りにした近代的建築で、終戦後まもなく占領軍に接収され、将校クラスの集会所になっていました。昭和二十二年に解除になりましたが、同じく接収を受けたミツマス百貨店は、スーベニールショップ（帰国兵たちのお土産店）となり、その翌年に返還されています。

三十年代、四十年代初めにかけては、梅月堂の二階のレストラン

ンで食事するのが山形市民の一つの憧れでした。当時、私が所属した山形青年会議所の年末クリスマスと年一〇二回家族パーティがここの三階ホールで催されました。
（わが青春時代 山形市七日町商店街 商いへの出発点 山澤進55ページ）

そして神楽坂紅谷も順調で、梅月堂の竣工した年に、茂七は息子に家督を譲り、町内会や菓子業界で活躍するが、そのころから日本は戦争時代に入って行き、景気は悪くなる。

戦争は激化し、東京は3月10日と5月25日の大空襲で神楽坂一帯は丸焼け、茂七の育てた神楽坂紅谷も灰燼となった。そして茂七は、戦争疎開した故郷の山形で1945年3月18日に他界、享年

山形市七日町交差点から南を見る町並み風景 右に梅月堂上から順に、2004年11月（伊達撮影）、昭和20年代、昭和初期、大正初期（いずれも「わが青春時代山形七日町商店街」より引用）



年72歳であった。以後、神楽坂紅谷は再開することにはなかった。

一方の山形梅月堂は、戦後も山形随一の菓子店、レストランとして栄えたのであった。上記の山澤進氏の著書によれば、経営者の佐久間秀治は、近代的な感覚の持ち主で芸能趣味も豊富であったところで、山形市専門店会の会長として活躍し、丸久デパートや山形グランホテルの設立にもかかわっている。

ここまでは谷口典子さんの調査を私の流儀でなぞったのだが、とにかく谷口さん本人による著述の登場を待っているところである。



わたしの古い手帳を調べたら、1976年12月と77年2月に山形梅月堂2階のレストランで、七日町地区の再開発計画策定の打ち合わせをしている。

その計画の策定委員会の委員長が伊藤滋東大助教授で、わたしはコンサルタントのひとりとして出席した。どちらも若かった。委員会を3階ホールで開いたかどうか記憶がないが、多分そうだったろう。

その再開発計画の成果は、七日町通りの建物を建て直すときは1階を引つめて歩道を広くとるように都市計画を決めたこと、ずっと後年になって再開発ビルとして完成した七日町aZなどである。

そしてその28年後の2004年11月、伊藤滋さんは東大名誉教授となり日本都市計画家協会会長に、わたしはその協会の常務理事・事務局長となっていて、協会主催のまちづくりイベントを山形市で開いたので、再訪したのであった。

山口文象設計の梅月堂の建物はY.T梅月館という名となつて健在だったが、梅月堂という店はなくなつていた。1、2階はコーヒー

屋と居酒屋が入り、3階は空き家である。

聞けば、梅月堂は1997年に倒産したのだそうである。どのような事情かは知らない。山形の中心街も没落してきているのだろうか。

さて、この建物はこれからどうなるのだろうか。

東京駅前の中央郵便局と同じで、見たところシロウト眼にはどうつてこともない建物であるから、派手な東京駅赤レンガ駅舎みたいに、一般からの保存の動きはおきにくいだろう。

最近、山形の建築家や大学の研究者が、この建物の再評価をしようとする動きがあることを知人から聞き、地元のテレビ局がその模様を放送したのも見たが、うれしいことである。

もつとも、そのTV放送のなかで建築史研究者が、この作品の評価で山口文象とコルビジエをひきあいに出していたが、ちよつと違和感がある。ここはやっぱり山口文象の師グロピウスにしてほしかったなあ。(080824、080917補綴)

2. 街並みのモダニズム建築

●山口文象ピーク時の梅月堂

1936年は建築家・山口文象にとっては、ピークの年だった。

この年に、青雲荘アパート兼診療所、番町集合住宅、小林邸、山形梅月堂、日本電力黒部第2発電所と関連施設、箱根湯本山崎ダム及び発電所などの、いわゆるモダニズムデザインの作品が続げざまに完成している。

黒部の一連の仕事は彼の代表作であるし、番町や小林邸はモダン住宅としてのプランも意匠もまさに典型的なものである。

だが、この年を境にして、以後は個人住宅と軍需工場の工員宿舎の仕事ばかりで、これといった創造的な作品はない。これは時代が戦争への転じていくときだったから、山口文象に限らず、建築家の仕事もそうならざるを得なかったのだ。

そのピークの年の仕事に、山形市のお菓子屋さんの店舗である梅月堂が完成している。山口文象は商業建築をほとんどやっていないし、やっても今はないが、唯一のものとしてこれが存在する。

また、山口文象は地方ではほとんど仕事をしていないが、山形というのも珍しい。そしてこれが真つ白な壁とガラスによるまさにモダニズムそのものの、悪く言えば豆腐に目鼻の建築デザインである。

それが東北の山形の町の最も繁華街である七日町四つ角、東京で言えば銀座4丁目交差点の三愛のような位置に建っているのだ。

山形のような田舎町、というのもおかしいが、なぜ山形なのか。

1920年代から30年代までの店舗建築の写真を載せている「失われた帝都東京」という本があり、それを見ても小規模店舗のモダンデザインといっても、よく言えば表現主義らしきものから折衷主義そして今和次郎が言うようなバラック装飾など、やはり装飾をまとうっているのが当たり前、もちろん圧倒的多数は和風建築であった。

菓子屋の店舗としてあれほどに飾り気のない白い、最先端流行のラディカルなモダニズムデザインの建物を街の真ん中につくるのは、東京でさえも珍しく、そんなことをするのは森永キャンデーストアと不二家くらいなものだった。

だからこそ、それを梅月堂主人の佐久間茂登七の心意気でつくった、いやそうではなくて、梅月堂の5男坊に生まれて東京神楽坂の紅谷の主人となった小川茂七が、故郷に錦を飾るためにやりたかったのかもしれない。

●看板建築モダニズム

そのラディカルさのきわみは、これを鉄筋コンクリート造としたことに現れている。当時の街並みを作る商店建築は店蔵が主流であり、その中に木造建築のいわゆる看板建築という表側だけ洋風のお面をかけたものであつたろう。現に隣の3階建てに見える建物は戦前の写真にも写っているが、典型的な看板建築である。

梅月堂ほどの規模ならば木造で看板建築も可能であるのに、そして現にこの梅月堂の裏には木造3階建て建物を同時に山口文象が設計して建っていたのであるから、その当時としても珍しい鉄筋コンクリートでつくったのは何故か。

思うに、この角地の狭い変形敷地に建てて、商業建築として見ごたえのあるデザインの看板建築を造ることができる大工はいなかったのかもしれない。そこで建築家を起用することになり、山口文象に白羽の矢が立つ。彼としては当然のようにコンクリートによるモダニズムデザインだが、表から見えない後ろ半分は木造で我慢したというところか。

とすると、これはコンクリートでできた看板建築である。あの扁平変形敷地に立つ建物となれば、その平面は山口文象でなくても誰がやってもあのプランになるしかない。

だからあれはコンクリートでモダニズム建築をかたどった看板な

のである。裏に木造建築あったことからしても、それは確実なことだ。

その後に変転したようだが、インテリア、家具、展示ケースまで山口文象が設計したことが、山口文象らしいところと言えはいいえる。なお、設計図の原図を見ると、山口文象が直接に図面を引いた様子はない。多分、日本齒科医専から山口文象の右腕でモダニズムデザインが得意だった河堀逸美であつたらう。

このような小規模ながら本格的なモダニズムの商業建築で今もあるものといえば、梅月堂と同じ頃に建った横浜の伊勢佐木町にあるAIIレーモンド設計の不二家ビルである。まさにモダニズムそのものである。

そういえば、このどちらとも1945年にアメリカからやってきた占領軍に接収されて、米兵用のレストランとなった。モダニズム建築がアメリカ人好みだったからだろうか、それとも単にその街の一流レストランだったからか。

二つのデザインを比べると、どうもレーモンドのほうに軍配を上げたくなる。

●街並みとしての梅月堂

山口文象の設計した梅月堂が建った1936年の山形といえば、山形七日町通りを都市計画事業によって拡張したので、そのために旧店舗の建物を壊してこれに建替えたのであつた。

山形市史によれば、1928年に山形市は都市計画法（1919年制定）適用都市となり、1930年に都市計画決定し、1933年に梅月堂のある道路幅を4間から6間に広げることを決定して事



山形梅月堂（1936年建築）



のむら寝装（1876年建築）

業にかかり、1937年に完成した。

この道路拡張のとき、拡張にかかる店舗等の建替えについて、山形市は設計など指導や斡旋した結果、見違えるばかりに街並み整備ができた、という。

そのひとつに梅月堂もあつたのだが、では、他に梅月堂のようなモダンデザインがあつたかといえば、正確にはなんともいえないが、あつたとは思えない。

今の梅月堂の隣で七日町通りに並ぶ建物は梅月堂の昔の写真に写っているから、当時の街並みの一部と言つてよい。洋風看板建築の類であるが、この程度の建物は多かったらうと推測できるのは、旅

籠町辺りに今も多く見られるからである。今も七日町通りに今も存在する昔の建物は、どれも店蔵づくりであり、この土蔵造りが街並みの主流であつたらう。

とすれば、梅月堂ができたとき、これはあきらかに街並み破壊であつた。それは当時の市民にとっては、東京という都会からの最先端の流行としてとらえたのか、それとも、何か奇妙なわけの分からないものだったか。

このような街並み破壊は特に山形だけの珍しいことではなく、例えば京都三条あたりの20世紀初め頃のレンガ造洋館は、低い瓦葺きの町屋の中に異様な風景であつたはずだ。しかしそれは、進歩の象徴として若い日本のありかただったし、山形の梅月館もそのひとつであつて、市民が疑義をはさむよりは先端流行デザインにあきれていたであらう。

なにしろ梅月堂が地元新聞に出した開店広告に「東北に誇る唯一の近代式新興建築の粹」と謳っているのだが、このコピーライターは誰だったのだろうか。ここに仙台を凌駕した新しさを誇る意気込みが見え、それはそのまま東京コンプレックスになる。

今、七日町交差点の向かいから梅月堂を眺めると、七日町通り側に並んで2つの低い建物は、昭和の初めの風情を持っているから、梅月堂とは意匠的にギャップがあつて昔を類推できる。

一方、七日町通りと直行する国道49号側に梅月堂に並ぶ街並みは、典型的な今日の都市的街並みであり、こちらは梅月堂と何のギャップもない。ないどころか、梅月堂はほんの昨日完成したごとの、よい意味でも悪い意味でも街並みに溶け込んでいる。

つまり梅月堂は、昭和モダニズム時代から現代への橋渡しを、こ



マルタニ (1902 年建築)



のし梅本舗佐藤屋 (1934 年建築)

の四つ角を曲ることで見事に表現して見せているのである。モダニズム建築のもたらした今日の意義の深さを改めて感じるのである。それは商業建築として街並みの中にあればこそ分かることであつた。その点では変転激しくて当然の街場の商業建築で、良くぞここまで保っていたものだと思う。

●梅月館は山形文化のシンボルとなりえるか

さて、いまや山形第一級の洋菓子・レストランとして梅月堂はなくなり、建物の持ち主は不動産事業者に移り、1階にドトールコーヒーがテナント営業しているだけで、上の2層は空き家である。

山形の建築家たちは、この梅月堂の建物を保全したいと考えている。建築家にとっては、ある時代を風靡した建築家・山口文象の設計であること、いまや1930年代のモダニズム建築であること、この二つが保全の意義と考える。

だが、これではマニアックなレベル過ぎて、建築家や建築に対する意識の低い日本では、市民一般に理解はされにくいだろうと、わたしは思う。つまり、東京駅赤レンガ駅舎保全のように市民が動く保全運動になるものとは、この建物からはとても期待しにくい。

それは、東京駅は誰にも面白い様式建築だから市民運動に나りえた、その東京駅のまん前にある中央郵便局は素人分かりしないモダニズム建築だから市民運動にはなりえていない、ということが参考となる。

だが、東京駅が市民運動になりえたのは、それもそうだったろうがそれよりも真の理由は、実はそこを東京だけでなく日本人の非常に多くが使ったし、しかも特別の経験があるという、人々の心象に深く刻まれた場所であつたことによるものと、わたしは考えている。そこが中央郵便局と大違いである。

梅月堂はどうか。

今や山口文象を日本の建築家たちさえもほとんど知らない時代だし、山形市内にある擬洋風や洋風建築に比べると実に愛想のない、昨日建ったばかりと思うような表情のビルだし、山口文象の作品の中では位置が高いとはいえないし、ハードウェアとしては一般的には分が悪そうだ。

だが、地元の人に聞けば子どもの頃はなにか特別のときに親に連



旅籠町の看板建築



梅月堂を俯瞰：屋上パーゴラがあるのが梅月堂（1936年建築）。左手前のビルの位置に梅月堂の木造建築が建っていた

れて行ってもらった場所であり、大人になってからは何かお祝い事にパーティをやった場であり、親しい人と特別の食事をした場であり、入院中にあの美味しい御菓子を見舞いにもらった記憶のあるところである等の、山形の人にとってそれぞれに心に刻む特別の思いがあるようだ。それは東京駅並みかもしれない。その市民たちの情念の塊が、梅月堂の建物保全へと導く可能性を持つだろうと思うのだ。つまり山形の都市文化、生活文化のシンボルの一つとして梅月堂を位置づけることができるのだろうか、その掘り起こし作業をすること、そこに保全への重要な立脚点があると思うのだ。（090116）

追補：梅月堂の建物は2009年にDOCOMOMO近代建築125選に選定された。

「この建築は残せるか」

劇団新制作座文化センター

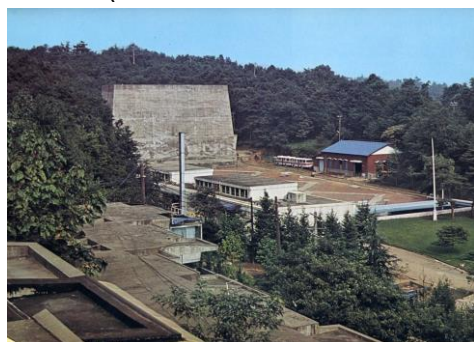
シンポジウム「山口文象と新制作座」この建物は残せるのだろうか」(2007年3月10日(土))に、パネリストの一人として参加した。

そのきっかけは関東支部歴史意匠専門研究委員の鈴木解雄さんの紹介だった。鈴木さんはわたしが藤岡研究室で卒業論文を書いていた頃、ドクターコースに在籍しておられ、実に刺激的にわが論文指導をしてくださった人である。その鈴木さんからのご指名だから、いやおうなく、ではなく喜んで出席した。

劇団新制作座文化センターの保存活用問題がテーマであったが、その仕掛け人は建築学会側というよりは、JIA(日本建築家協会)の保存部会の建築家たちであったようだ。

実は既に2006年の夏に、八王子の新制作座文化センターの中で、その活かし方についてのシンポジウムがあつて、今回はその延長戦である。

その現地シンポで、当時のRIAにいた設計者の一人である三輪正弘さんが出席なさるので、わたしはそのアテンド役として言ったのだが、それが始めての現地訪問であった。



1963年竣工当時の新制作座文化センター
(雑誌「建築文化」1964.03)

竣工時に雑誌に載った写真のイメージは、ブルータルなコンクリート打ちはなし建築群が、自然に対抗するように立ち並ぶ印象であった。

ところが現地を訪れて見ると、生茂る豊かな緑の谷間にうずもれるように、まるで自然と調和と対立のバランスの妙味のごとき建築群と自然環境であった。

そのときすぐさま私の頭に浮かんだのは、1995年に訪ねたアメリカでの「落水荘」(フランク・ロイド・ライト設計)であった。落水荘も現地に行ってみるまでは、あの有名なライト自筆のパースのせいで、自然のなかに屹立するイメージを持っていたのだが、じつは自然と対立調和のバランスの巧みさであると知った。

それと同じことを新制作座で感じるとは、意外な発見であった。

山口文象とライトを対比して
みるなど、それまで考えた
こともなかった。

もちろんそれは、1963
年から今日までの時間が、
あのとときの丸裸の大地に豊
かな緑を再生させたからで
あるのだが、設計者がそこ
まで考えていたのだろうか。

その後には別の設計者に
よって建てられいくつかの
建物も、この緑の谷間の空
間を保持するように配置さ
れているのであった。



以下に、2007年3月
10日のシンポジウムのプ
ログラムと、そこでのわた
しの発言要旨を記しておく。

シンポジウム

(日本建築学会関
東支部研究発表会 付
随行事VI)

「山口文象と新制作座
」この建築は残せるだ
ろうか」



2007年シンポジウムの日の新制作座文化センターの姿

・主催 日本建築学会関東支部歴史意匠専門研究委員会
・開催日時 2007年3月10日(土) 13時30分〜17時30分

・会場 日本建築学会201・202会議室

・趣旨説明 大野敏(横浜国立大学)

・司会 大橋竜太(東京家政学院大学)

・パネリスト

■山口文象とその時代

伊達美徳(地域プランナー、山口文象研究者)

山口文象とその時代を語る。

■43年経った新建築

田代洋志(ミームズ一級建築士事務所)

43年経ち森の中に朽ちていく打放しの建築 新制作座の現況を伝える。

■劇場建築としての特徴

川上光洋(東京理科大学)

新制作座の劇場建築としての特徴と劇場建築一般の保存の問題。

■自治体の取組みの可能性と限界

白柳和義(八王子市市民活動推進部長)

地域の文化財として活用する可能性と限界について

■新制作座再生への試行

篠田弘子(建築家・JIA保存部会)

新制作座との出会いから再生への多面的展開に向けた動きについて



わたしの発言は次のとおり。

「山口文象とその時代」

山口の生涯について語るが、新制作座についてはその人生の中で

どの位置づけにあるかを語りたい。

建築家山口文象

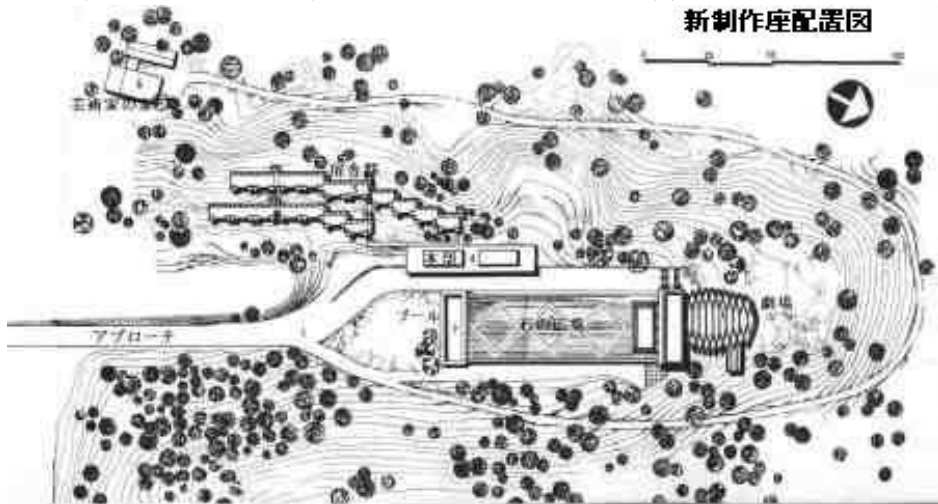
象は今ではもう忘れられたかもしれないが、現存作品で有名なものは、黒部川第二発電所で、これは自然と対峙するモダンデザインである。

東京では新宿区に和風デザイン

の林芙美子邸が記念館として公開されている。

山口は20世紀が始まるとほぼ同時に浅草に生まれた。父親は清水組大工棟梁で、四男三女の次男でガキ大将だった。浅草の観音様と吉原遊郭の間のあたりの

新制作座配置図



典型的な下町の長屋で生まれ、浅草公園が遊び場だった。庶民が長屋に住むのは当たり前の頃だった。

大工の跡継ぎとなるために東京工業高校附属職工徒弟学校木工科を卒業し、清水組に入って現場で働く。

17歳で名古屋の現場に行くが、職人よりも建築家を志すことにして、辞めて東京に帰り勘当同然となる。飛び込みで就職を頼んだ建築家中條精一郎の紹介で、通信省営繕課の製図工となる。

当時の通信省は官庁営繕建築界のトップで、帝国大学卒の官僚建築家のデザインをもとに、実務家養成の工業高校等卒の製図工たちが実際の設計をする。そこに入り込んで、最初は下っ端だったが、図面の腕はあるし、大工だったのでディテールにも詳しく、デザインもうまいので次第に上からも周りからも認められるようになる。

上昇志向が強く、仲間たちとともに絵や外国語の勉強をする。デザイン技量を課長であった建築家の山田守や岩元録に認められ、少しずつデザインをさせてもらうようになる。釧路郵便局スケッチが最初のデザイン作品で、製図工にデザインさせるのは稀なケースだったが、決して管理職にはなれない身分固定の官僚の世界である。

山田守は、日本の近代建築運動の嚆矢とされる分離派建築会のメンバーで、石本喜久治たちと作品展覧会活動を行う。山口文象はそのメンバーに入れてもらうことができて、第3回展から出品する。

製図工の同僚の中ではリーダー的な立場となる。

山口文象の生涯は、1923年9月1日の関東大震災で一大転機を迎える。地震が建築家・山口文象を座み落としたと言ってもよい。

震災の煙のまだ収まらない10月頃、通信省で仲間の製図工たちと創宇社建築会を立ち上げる。製図工メンバーを集めて建築労働者

の立場での建築運動を行った。震災後にいくつも生まれた建築運動や美術運動団体と交流を広げる。

創宇社は1930年の展覧会が最後だが、1931年にメンバーが職場の争議で解雇される事件が起こり、また山口文象が渡欧してリーダーがいなくなったので、事実上は終止符を打った。

創宇社の系譜を引く建築運動の団体は、新興建築家連盟、日本青年建築家連盟、建築科学研究会、青年建築家クラブ等、できては消える状況で、戦後は新建築家集団そして今の新建築家技術者集団へとつながる。

山口文象にはこのように建築の作家と運動家という二つの大きな系譜がある。

創宇社の展覧会出品作品は、最初はロマンチックな内容だったが、そのうちザッハリヒな労働階級に向けた作品を出すようになる。また運動もしだいに左傾化するようになる。当時の美術家たちは左翼運動するのが常だったし、彼等もその影響を受けるとともに、製図工としての地位への不満もあったろう。

1924年に通信省をやめて内務省復興局橋梁課に移り、震災復興にともなう隅田川の五つの橋や数寄屋橋などの橋のデザインに関わる。

その後、石本喜久治に誘われて石本事務所に移り、朝日新聞社、日本橋白木屋などの設計に携わるが、石本と仲たがいで退職。日本電力の嘱託技師となり、ダムのデザインに関わるようになる。建築家として橋やダムなど土木の仕事をしているのが特徴的である。

1930年の創宇社の主催による講演会で、唯物史観に基づく講演をおこなって、その年の暮れにヨーロッパに向かう。その目的は、

当時関わっていた黒部川小屋平ダムに関する調査と、グロピウスの下で働くことだった。1931年半ばからグロピウスアトリエで約一年間働くとともに各地を見学、また左翼の左翼人たちと付き合う。なお、山口文象はバウハウスには行っていない。

1932年の帰国後は、ヨーロッパの最先端の事情を知る国際様式に通曉した建築家として、建築事務所を開き、日本齒科医科専門学校の設計で一躍新進建築家と認められ、その後は多くの設計を行っていた有名建築家となった。帰国後は建築運動を直接にはしないで、陰のパトロン役だった。

山口文象の建築作品には、いわゆる白い箱の国際建築様式と、大工の技量を生かした和風建築の二つのデザイン系譜がある。どちらもプロポーションの美しさに特徴がある。

1939年に築地小劇場の改装を前川国男と共同で行っているのが劇場建築としての最初だった。

戦争中は一般建築の需要はなくなり、軍需工場の宿舍の設計ばかり行っている。戦後は仕事がなくって逼塞していたが、交友のあった猪熊源一郎に紹介された高松近代美術館、久が原教会の設計をしている。

1949年に猪熊とともに美術団体の新制作協会に建築部を立ち上げ、運動組織を作る。その最初の展覧会でローコストハウスを原寸の建物を値段の正札つきで展示発表して話題となる。当時は戦後の小住宅提案を、前川国男、池辺陽、増沢洵などの建築家たちが行ったものだが、これもそのひとつで、社会的な提案のある建築作品といえる。

1952年に腕も口も達者な若い建築家三輪正弘と植田一豊とと

もにRIAグループを打ち出し共同設計を模索しだして、1953年にRIA建築総合研究所とする。翌年に近藤正一が加わって山口文象+3羽ガラスの共同設計が発足する。山口文象の運動家と作家とを止揚した再度の立ち上がりである。

RIAは1945年のグロピウスが共同設計組織を目指して立ち上げたTACに啓発されていることは確かである。共同設計組織を立ち上げたことは、一方では作家としての山口文象のありどころが難しいことにもなり、建築家としての彼には結果として幸せであったのかどうか、ちよつと考え込んでしまう。

1960年代までは三輪・植田・近藤という3人の建築家が多く自分たちの力を生かし、山口をフィーチャーしてア・ウンの呼吸で設計をしていたといえよう。朝鮮大学校、神奈川大学、新制作座という群建築がそのような共同設計でできあがって行ったのは、かなりの力量と同時に乗り越える葛藤あったにちがいない。

山口はまかせせる所はほとんど3人に任せていたようだ。そのような初期の理想的あるいは原始的なアトリエ型共同設計体制が有効に働いたころの最後の時期の建物が、新制作座文化センターであったといえよう。

山口はこの頃は病気がちで、新制作座設計にはあまりタッチはしていないと当時のことを近藤さん（RIA会長）から聞いている。

1970年代に入ると、仕事も増え大規模なものもありRIAも人数が増えて好むと好まざるにかかわらず組織化されて、アトリエ的な仕事の方法はできなくなる。

そうなる運動家としての山口には手におえない組織であり、伝統的な施主と建築家の関係で成り立つような作家性を出す作品づく

りは難しくなり、山口は悩みだしたのである。

60歳半ば頃から病気がちとなり、継続的な設計の仕事よりも単発の講演をよく行うようになる。1970年安保の頃は、建築家の戦中の言動とその戦後転向を糾弾する話で学生や若手建築家たちのアイドル的な存在だった。しかし1978年のある日突然に、心筋梗塞で波乱の人生を終えた。



この話の後で会場からの質問に次のように答えた。

大宮司勝弘（東京家政学院大学…新制作座は1963年にR I Aが設計したが、どこまで山口文象の作品といえるのか？

伊達…私は1961年にR I Aに入ったが、大阪にいたのでこれには関与していない。聞いたところによれば、山口文象は打合せには数回参加したが、あまりコミットしていないようだ。山口の作品というよりR I Aの設計が正しいと思う。

山口は全体統括者だが事実上は近藤正一がプロデューサーであり、実際上のデザイナーは、劇場は主として三輪正弘、本部と宿舍は近藤正一。この両者は何れも実際に演劇をやっていたので劇場には詳しくかった。植田一豊は当時大阪なのでタッチしていない。

設計期間は3ヶ月だが、それでできる筈もなく、かなり現場に持ち込まれてデザインされたはずだ。宿舍の設計と現場監理は北島道生で、これには彼のデザインも入っているだろう。なお、当時R I Aが設計したもので、一つだけは無くなって建て替わっているのは、山の上にあった真山美保邸（芸術家の家）で、これは近藤正一のデザインであるが、2年で火災消失した。

大宮司…R I Aの当時の人数は？

伊達…1961年には全部で13人だったが、大阪は5人、東京は8人だったろうか。

大熊喜昌（都市計画画家）…私も伊達氏と同世代。「ぶどうの会」に所属して演劇活動に参加していた。新制作座は建築というよりも、全体で構成しているコミュニケーションで出来ている。これにR I Aが関わるようになったきっかけは何か？

伊達…近藤正一氏に聞いたところでは、ある雑誌の編集長が新制作座から設計者を紹介してほしいと依頼されR I Aに持ち込んだ。左翼劇団の真山美保と左翼建築家と思われていた山口文象とどううまくいくかもしれないということだったらしい。もともとR I A側はそのような事とは関係なく、面白い仕事としてやったようだ。

司会…登録文化財制度により、50年が文化財としての目安になっている。今から50年前の1957年はちょうど社会的に大きな変化があった頃。この50年代と60年代について、どの様に考えるか。

伊達…R I Aが1953年にできる。戦争で打ちのめされていた日本経済は、1950年にはじまった朝鮮戦争の軍需景気で戦後復興するのだが、生産活動が前向きになり建築家も生きていくめどができたといえよう。戦後民主主義の空気の中で、山口文象の建築運動家としてのスタンスもその流れにうまく乗り、共同設計といういかにも民主主義的な装いでR I Aができる。山口文象としては、建築家としても運動家としても、二つの潮流をうまくアウフヘーベンできた。

しかし1960年代後半からの高度成長期に入ると、戦前型のプリミティブな運動家・建築家山口文象はもうついて行けなくなる。

戦後のたとえば五期会(1956年)のような建築運動も起きたが、それらも高度成長の中に埋没していった。50年代の共同幻想的な戦後民主主義の総決算が新制作座といつてよいかもしれない。

その新制作座とまったく同じ日に日生劇場がオープンし、左翼コンミュン劇団新制作座の真山美保とは全く対照的な、劇団四季の浅利慶太の商業演劇がスタートするのだが、戦後の動きの象徴的な現象かもしれない。

司会…山口文象についての質問がある。山口がドイツに留学した理由など。

伊達…黒部川第二発電所に強く関係している。山口は石本と喧嘩して事務所をやめ、日本電力の囑託になる。ここでダム・発電所のデザインを行う。小屋平ダムを設計するためにドイツに派遣されたのであろうと考えられる。ドイツ行きことは山口にしつこく聞いてもよく分らないままだが、カールスルーエ工科大学の水理学のレーボック教授の研究室に滞在して、ダムの形状について教示してもらったことが彼の手帳にあり、ダムの形態やデザインに関する調査メモが書かれているから、その調査のために日本電力からの派遣でドイツに行ったのが確実なところであろうと思っている。そうでないと金が出るわけが無い。当時他に外遊した建築家たちへのインタビューを佐々木宏や長谷川堯がした出版物があるが、いずれも金持ちで大名旅行に近い。

日本電力の仕事はともかく、山口の本当の目的は、当時バウハウスで有名だったがそこを辞めてベルリンで設計事務所を開いていたグロピウスの下で働くことだったろう。お役目と自分の野望をうまく果たしたことになる。なお、山口の話では共産党活動関係でその

関係者にロシアで会う必要があったから渡欧したとも言うのだが、これは本当だろうか、調べようがない。

山口文象の生涯について補足するが、山口文象個人の作品の最後は1953年の大久保邸であろう。新制作座は共同制作体制がうまくいっていた最後の作品と話したが、この後の1960年代後半からRIAは新たな時代に入る。それまでは毎年20〜30件も設計する住宅のRIAだったのが、60年代後半頃から都市計画・再開発のRIAとなる。新大阪センシティブでは施主は500人もいる繊維問屋の共同建築だが、その設計から事業にいたる合意形成には、それまでの共同設計体制で養ったノウハウが生かされ、さらに再開発という多くの人たちが資産を出し合って共同建築をするときの設計方法に展開したのである。その頃になると山口はついていけない。逆に一人の担当者として作品を作ることになる。1971年の『是の字寺』、1973年『町田市資料館』がそれである。

山口の戦前の最高の作品は黒部第二発電所と小屋平ダムだが、戦後の最高の作品はRIAという組織であったろう。その意味で、建築家としても運動家としても人生を全うできた様に、わたしは思っている。

司会…最後にバネリストから一言いただきたい。

伊達…ここに並んでいるからわたしも保存派と思われるのは困る。保存すべきとも、保存しなくてもよいとも、今日はひとことも言っていない。それを言うだけの新制作座文化センターに関する知識を、わたしはまだもっていない。(2007.03・20)

目 J・コンドルの和風と

山口文象のモダンの出会い

◆展覧会「コンドルと惟一館／山口文象と青雲荘」

「コンドルと惟一館／山口文象と青雲荘」と題して、2014年3月10日から8月30日まで、「友愛労働歴史館」（東京都港区芝2-20-12友愛会館8F財団法人日本労働会館内…三田会館と同じビル）で展覧会を開催した。

ジョサイア・コンドルと山口文象がそれぞれ設計した二つの建築についての展示であり、わたしも少しだけ手伝った。

そして5月27日に、「松岡駒吉、山口文象が青雲荘に込めたメッセージ」と出して、わたしの講演会を催していただいた。

この展覧会のきっかけは、友愛労働歴史館事務局長の間宮さんから、2013年8月にいただいたメールであった。わたしのインターネットサイトに山口文象のことを書いているのをご覧になって、歴史館の収集資料にわたしの著作『建築家山口文象の世界』（まちもり叢書）を入れたいとのことであった。

もちろんこれは寄贈したのだが、これをきっかけに分ったことは、山口文象が1936年に設計した「青雲荘アパートメント・友愛病院」のオーナーが、この歴史館を運営する一般財団法人・日本労働会館であったこと、そして今はなくなったその建築関係資料の収集をしているとのことだった。これについては（株）アール・アイ・

エーが所蔵する図面や写真のコピーを提供したのである。そして、冒頭に述べたように、その二つの建築を主題にした企画展示を友愛労働歴史館で行うとのこと、そのお手伝いも少しさせてもらったのである。

間宮さんからわたしが聞いてはじめて知って驚いたのは、この山口文象設計の典型的なモダン建築の隣には、ジョサイア・コンドル設計の和洋折衷デザイン建築が並んで建っていたことである。どちらもその財団所有で、日本の労働運動の進展に大きな役割を果たしたそう。

労働運動、コンドル、山口文象などの関係は全く知らなかったが、これを機会に調べてみて、実に興味深いことが分かったのである。山口文象の仕事についての研究は1970年代からやっているの、ドイツに行けば

何か新発見があるかもしれないが、日本ではもう新発見はないだろうと思うていたら、意外にもまだあるのだから、興味は尽きない。

コンドルと惟一館
友愛労働歴史館 企画展
山口文象と青雲荘
期間 2014年 3月10日(月)～ 8月30日(土)
会場 友愛労働歴史館 (東京都港区芝2-20-12)

第一室 ジョサイア・コンドルと惟一館
第二室 山口文象と青雲荘
第三室 惟一館から友愛会館への120年とスケッチをみる周辺風景

友愛労働歴史館

◆コンドル、キリスト教、労働運動、山口文象

J. コンドル (Josiah Conder, 1852~1920年) は、20世紀への変わり目を挟んで40年ほどを日本で活躍したイギリス人建築家、山口文象(1902~1978年)は、1930年代から戦争をはさんで40年ほど活躍した建築家である。年代的にもその出自からしても、あるいは極端に違う作風からしても、普通に考えると出会うはずもない。

ところが、このふたりの設計した建築が、東京都港区の芝にある同じ敷地の中に立ち並び、太平洋戦争の空襲で焼けるまでの9年間ほど、今考えるとなんとも特異な風景をつくっていたのであった。

並んでいたのは「日本労働会館」と「青雲荘アパート・友愛病院」であった。日本労働会館がコンドルの設計であり、青雲荘が山口文象の設計であった。どちらも財団法人日本労働会館の所有で労働者運動の拠点であり労働者のための福祉厚生施設であった。この財団を構成しているのは、旧友愛会系労働組合である。

今はどちらの建築も消滅して、跡地には同じ財団によるオフィスとホテルの入る超高層建築が建っている。そのビルの一角に、財団が運営する「友愛労働歴史館」があり、日本の労働運動の資料収集と常設展示をしている。

コンドルが設計した建築は、当初は1894年に完成した「惟一館」(ゆいいつかん)といい、ここはキリスト教のユニテリアン派の教会であった。これが後に日本労働会館になったのだが、いろいろ聞いて調べてみると、日本の労働運動とキリスト教活動とは元来深い関係にあったのだったコンドルの設計した教会が日本の労働運

動を起こす源流となり活動拠点となり、山口文象が設計した青雲荘が労働者のための本格的な厚生福利活動の源流となった。

コンドル、キリスト教会、労働運動そして山口文象という、一見したところ関係があるとは思えない人物と事柄が、実は一連のものとして結ばれていることを知って大いに興味がわいた。

わたしは山口文象についてはそれなりに研究してきたが、コンドルについては建築史ディレタントの域を出ないし、キリスト教と労働運動についてはまったくの門外漢も甚だしい。そこで労働運動側の事情については、その歴史館の間宮事務局長にうかがった話、友愛労働歴史館サイトにある各種の資料、『財団法人日本労働会館六十年史』(1991、渡辺悦次著、日本労働会館)などを主な資料として記述する。

◆ジョサイア・コンドルによる「惟一館」

ジョサイア・コンドルは、明治政府が日本の近代化のために欧米から招いたお雇い外国人と言われた専門家たちのひとりで、イギリス人の建築家である。イギリス人でコンドルとは妙な名だが、明治の日本人は、銀座煉瓦街を設計した Waters をウォーターズではなくウォートルスと言うように、Conder をそう言ったらしい。



三菱一号館美術館

彼は工部大学校造家学科（現・東京大学工学部建築学科）の教授として、辰野金吾、曾根達蔵、片山東熊などの近代の日本建築家を育てて日本建築界の基礎を築いた。のちに建築設計事務所を開設して、多くの建築作品を残し、日本に骨をうずめた。

建築の歴史を知らない人でも、東京丸の内にある「三菱一号館美術館」という、数年前にできた赤煉瓦の西洋様式の建物を知っているだろう。今の建物は、昔あのような建物があつたのが壊されて、跡地に別の建物が建っていたのを、それをまた壊して、昔の建物をコピーして再度建てたものであるが、1894年に最初にできたときにそれを設計した建築家がジョサイア・コンドルである。

その三菱一号館が建つた同じ年に、ここに話題とするキリスト教のユニテリアン教会「惟一館」が、ジョサイア・コンドルの設計で建つたのである。非常に興味深いのは、礼拝堂を持つ本格的なキリスト教会であるのに、この建築がよく言えば和風クラシックデザイン、普通に言えば和洋折衷デザインだったことだ。

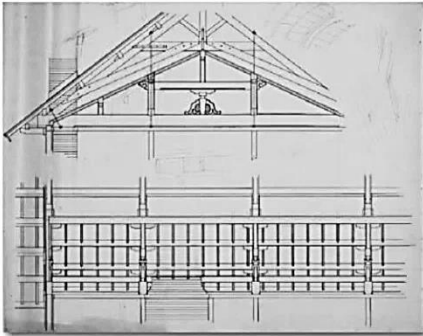
コンドルの作品を調べてみると、どうや

II-1 惟一館 明治26年(1893)設計 明治27年(1894)頃竣工

惟一館は、ユニテリアン教の神学校及び布教活動の本部として建設された木造二階建ての建物であり、のちに日本労働総同盟の労働会館として昭和初期まで使用されていた。

平面構成や暖炉などの室内意匠、構造や仕上げ材などは西洋建築の技術を用いている。その一方で、木鼻付虹梁や笈形（小屋組詳細図（II-1-1））、木連格子や懸魚を施すほか、屋根・軒に反りを持たせ、煙突に石灯籠の形を用いるなど、日本の伝統的な形式を志向した技法・外観を導入している点が特徴的である。

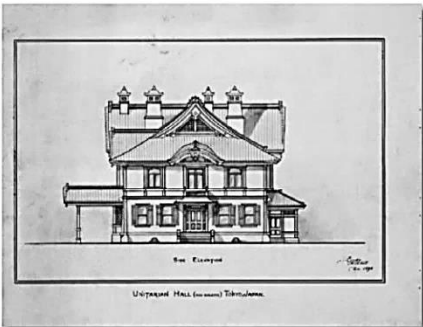
立面図（II-1-3、II-1-4）に記された年号「Feb. 1893」とコンドルの自署から、これらの図面は竣工前年に作成された実施図面に近いものであった可能性が高い。



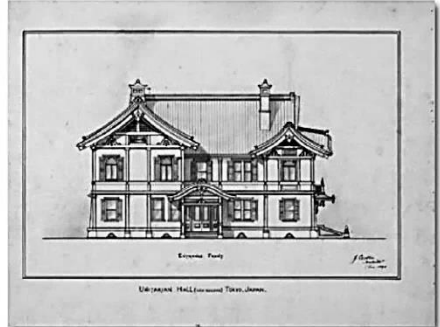
II-1-1 惟一館設計図
小屋組詳細／ワットマン紙／墨入／46.7×63.7



II-1-2 Unitarian Hall (now building) Tokyo, Japan. General View (惟一館)
透視図／ワットマン紙／墨入／32.7×45.4



II-1-3 Unitarian Hall (now building) Tokyo, Japan. Side Elevation (惟一館)
立面（側面）／ワットマン紙／墨入／32.6×45.4



II-1-4 Unitarian Hall (now building) Tokyo, Japan. Entrance Front (惟一館)
立面（正面）／ワットマン紙／墨入／32.5×45.3

らコンドルによる文字通り唯一の和風の外観がある建築らしい。その設計図面は京都大学に保存されていて、一部をネットに公開されている（前ページ図）ので、コンドルの和風への入れ込みようを見ることが出来る。小屋組み図面には、虹梁や墓股のようなものもある。寺院建築を教会建築として翻案するのは、ユニテリアンの教義の自由さであるうか。

背丈の高い2階建て木造建築で、ちよつと見にはおおかと思わせる大きなスレート葺き屋根がかかり、千鳥破風もあるし玄関先には唐破風もある。だが、どこかちよつと和風にしては破風の付き方や全体プロポーションがおかしい感じもあるし、屋根には煙突のようなものが4本も立っている。それも詳細に見ると神社の灯籠のような形である。

壁面は横下見板張りペンキ塗りだが、真壁風に柱と梁の表現を見せている。屋根は寺社か城郭、壁は洋式、車寄せは御殿風で、和様混合である。寺社建築を見慣れた日本人から見ると、全体に腰高す



1894年献堂式の日「惟一館」

ぎて屋根の大きさと壁面の高さとのバランスがよくない。日本人の設計ならもつと屋根の軒を出すだろう。

これがなんと、あの日本の近代建築を創始したと言ってもよいお雇い外国人のジョサイア・コンドルの設計だから、見ても聞いても驚く。丸の内に復元して再現された「三菱1号館美術館」や「岩崎邸」のような洋風建築を設計したあのコンドルが、こんな和洋折衷建築を設計していたのであったか。

できあがった献堂式当時の全景写真とコンドルの設計図を比較すると、あちこち写真とは違うところがある。屋根の反りが無くなり、正面両翼にあった大小の千鳥破風の、小さいほうが無い。この図面の後にコンドルが設計変更したのか、それとも現場で変更したのか。

◆惟一館における和洋折衷デザインの意味

コンドルの作品の系譜でどう位置づけになるのか、そこは専門家にまかせるとして、外国人による和洋折衷建築について考えてみる。

和風の屋根を乗せたペンキ塗り下見板張りの壁で正面に唐破風がある和洋折衷建築ならば、日本人の太工棟梁による疑洋風と言われる木造建築があるし、もつとも正統派となれば妻木頼黄による1899年の日本勧業銀行（これは東京の歌舞伎座が似ている）がある。いずれも屋根とその下の壁のプロポーションが、日本人の眼にはどこか間が抜けているのは惟一館も例外ではない。

このコンドル作品に唯一の和洋折衷建築デザインは、教会の当時の牧師の要請であつたらしいことが、その牧師の書き残したものであるという。それにしても牧師の要請があつたとしても、なぜ外国

◆ユニテリアン「惟一館」と労働団体「友愛会」

さてここで疑問は、その惟一館がなぜ労働運動の活動拠点となつたか、ということである。それはその教会建築を、当時の労働運動団体の総同盟が取得したからであるが、そこには偶然ではなくて必然性が働いていたのであつた。

ユニテリアン教会はアメリカのキリスト教の一派であり、1887年に福沢諭吉らの招請によつて日本にはじめてやつてきた。当時の西欧の技術や文化をとりいれる日本の近代化戦術のひとつに、キリスト教もあつたのである。

だが、多くの教団があつてどれを取り入れるか調査を行つて、ユニテリアン教会派の自由と独立を基本とする教義や、他のキリスト教のように布教活動をしないので文化摩擦が少ないことが、福沢らの眼鏡になつたようだ。

福沢は数年後にユニテリアンと決別するが、この教会活動を後まで支えた人たちに安部磯雄、賀川豊彦、鈴木文治、新渡戸稲造、吉野作造等のインテリ自由主義者たちがいた。はじめの教会活動拠点は飯倉に「惟一館」と名付けた建物であつたが、後に京橋に移転し、さらに上に述べたコンドル設計「惟一館」が1894年に、三田四国町（現、港区芝2丁目）にできあがつた。

そして1898年にこの惟一館において、社会主義研究会が生まれた。メンバーは村井知至・安部磯雄・岸本能武太・片山潜・幸徳秋水らである。1900年に実践のために社会主義協会として、安部磯雄を会長に、河上清、片山潜、堺利彦、幸徳秋水、木下尚江、西川光二郎が参加している。会員の多くはユニテリアン派キリスト

教徒であつた。

1901年には会員を中心に日本最初の社会主義政党の社会民衆党を結成したが、政府の結社弾圧で2日後には禁止された。つまりキリスト教会の惟一館は、日本の社会主義活動の源流の場であつた。日本の近代化の中で、富国強兵政策による産業発達が多くくの労働問題をひきおこす。だが、労働運動による労働組合の結成は政府の弾圧を受ける。そこでユニテリアン教会の活動のリーダーの一人であつた鈴木文治たちは、1912年に労働者団体として「友愛会」（鈴木文治、会長）を設立して、惟一館に活動拠点を置いた。

友愛会は、労働者同士の相互扶助と親睦、知識や技術向上、地位の改善をうたつてゐる。形式的には労働組合ではないが、この教会を拠点に労働運動を始めた。友愛とは、キリスト教の隣人愛に原義を持つさうである。

これが1919年に「大日本労働総同盟友愛会（総同盟）」と改称し、後に「総評」、「同盟」、現在の「連合」に至つてゐる。

ところが、1923年にユニテリアン教会は、関東大震災や会員減少で日本から撤退してしまつた。残つた惟一館の土地建物は不動産業者を転々としていたが、総同盟本部やその傘下産業別組織の活動の場としては継続してゐた。しかし、活動拠点として不安定な状態になつた。

1928年に総同盟は、本部施設が他人の所有で不安定な状況を打開するために、惟一館を買い取つて活動の本拠となる「日本労働会館」を建設する計画を立てた。計画では3階建て540坪の建物で、事務所、大講堂、浴場、喫茶室、宿泊室などを入れる。予算は土地建物購入及び建設費が18万円で、会員の募金と後援会（安倍

磯雄、賀川豊彦、新渡戸稲造、鈴木文治、吉野作造）による寄付金集めでまかなう予定であった。

こうして1931年には当時の所有者だった東京建物㈱から、土地と建物の購入をした。当時は労働運動団体では不動産の所有ができなかったため、財団法人日本労働会館（理事長松岡駒吉）を設立した。この財団が松岡の経営手腕もあって、その後の労働運動のための場と金をおおいに支える役目をする事になり、今に至っている。

しかし、当時は募金が思うように進まなかったため、新会館建設はあきらめ、唯一館の建物を大改修して「日本労働会館」に看板を掛け替えたのであった。こうしてコンドル設計の和洋折衷建築は、図らずも命を永らえた。

1937年元旦に撮影した唯一館の後の姿の写真がある。千鳥破風の



下の下見板壁には「日本労働会館」とクラシックな字で書いてある。改修されたようだが、基本的にはコンドルの設計の姿のままに、大勢の人たちの背景となっている。

入母屋のスレート葺き大屋根、ペンキ塗り横羽目板壁、中央に唐破風の車寄せ、左に千鳥破風、設計図ではあった右の千鳥破風はないのは当初から。当初はあった屋根の2本の煙突がないのは改装したのである。昔の田舎町の小学校講堂の感がある。わたしが卒業した小学校がまさにこれであった。

この写真をよく見ると、左の方に白い3階建ての横長窓の建物が写っている。千鳥破風の屋根庇の左の方を伐って、下見板外壁に迫る。その前の年の夏にできあがった、山口文象設計のモダン建築である。

なお、唯一館はキリスト教会だから、もちろん宗教的な行事もなくなった、その中のひとつに、後に有名な作曲家となる20歳の山田耕柞が、ここで彼のオペラの処女作を初演している。1907年のクリスマス、オラトリオ「誓いの星」は、指揮・山田、演出・小山内薫、歌・清水金太郎（後の浅草オペラのスター）、妹尾幸陽ら、管弦楽・海軍軍楽隊であった（増井敬二『日本のオペラ』民音音楽資料館・昭和59年）。

◆「コンドルの和洋折衷に山口文象のモダン建築

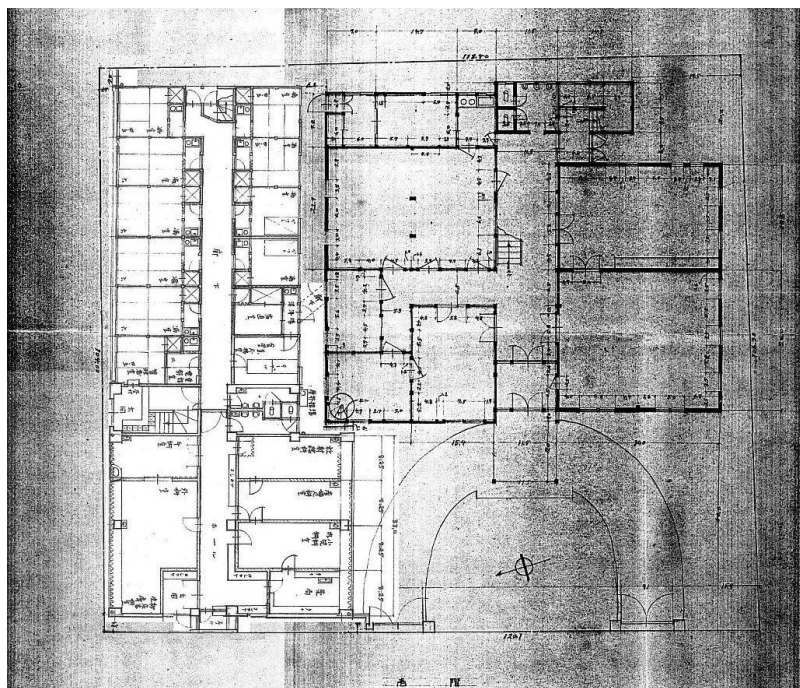
日本に戦争の影が濃くなろうとしていたがまだ景気が良かった1936年の夏、東京は芝公園近くに人目を惹くモダン建築が現れた。そのころ新進建築家として売れっ子であった山口文象設計の「青雲



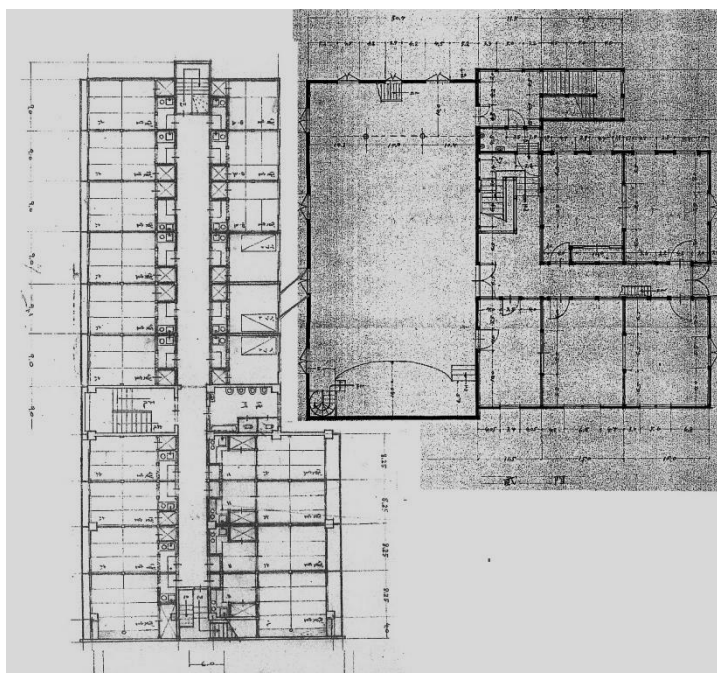
「荘アパート・友愛病院」である。
鉄筋コンクリート造3階建てと木造2階建てをくつつけた、正面は一階の出入り口のほかに真つ白な壁にボツンボツンと小さな穴があるだけ、横面も真つ白な壁を連続ガラス窓が横長に切っている。当時の先端的流行のパウハウス系モダンデザインで、その頃の言葉では国際建築様式と言った。
余計な装飾も勾配のある屋根も庇もなしで、真つ四角な箱に窓があるだけだ。お化粧なしのスツピンで、スタイルの良さつまり全体や部分のプロポーションが勝負、そして性格の良さ、つまりその建物機能の正直な表現である。
山口文象はこれを設計するときに、隣の建築（RIA所蔵の設計



青雲荘・友愛病院と日本労働会館
左：青雲荘・友愛病院写真（1938年8月撮影）。右：日本労働会館（1937年1月1日撮影）の2枚の写真を合成して、人物を消去する補正を施した



上:青雲荘(左)と労働会館(右)1階、下:同2階平面図(合成)



図の配置図には「在来事務所、旧館」と記されているがジョサイア・コンドル設計と知っていただろうか。いまでこそコンドルの設計の建築は貴重だから保存せよというが、そのころはまだあちこち

に建っていたし、日本の近代以後の建築に対する評価も定まらない時代だから、その保存などは一部の建築史研究者のほかにほだれも考えなかった時代だった。ましてや和様折衷の建築となれば、新し

物好きの建築家山口文象は全く興味を持たなかった、と考えてよいだろう。

これとコンドルの和洋折衷建築と山口文象のモダン建築が並んだ写真はいまのところ存在しないので、ここで二つの写真を合成修正して見よう。写真をよく見ると、左の千鳥破風の破風板が青雲荘の白い壁の直前で、スパツと切り取られていることがわかる。軒の出がコンクリ壁の邪魔になるので切つたらしい。コンドル作品に敬意を表して壁を引込めて造るどころか、邪魔者扱いである。

このコンドル設計の会館所有者である財団法人日本労働会館の記録によれば、当初はこれを壊して建て替えるつもりだったのが、会員から募集した建設資金の集まりがわるくて、隣の空き地部分に青雲荘・診療所を建てることにしたのだそうだ。（『財団法人日本労働会館六十年史』）。

おかげでわたしがここで面白がっているように、外国人設計の和洋折衷クラシック風建築と日本人設計の洋風モダン建築が並び立つ風景が出現したのである。1936年から1945年まで9年間のことであった。

◆直輸入モダンデザインにはめ込む和風貸室

青雲荘はなにもかもモダンな真つ白真つ四角な建築であるのに対して、その隣がコンドルの和洋折衷の下見板張り大屋根建築だから、外国人が設計した和風クラシック建築と、日本人が設計した洋風モダン建築が、軒を並べる街並みが出現したのである。

そのころの芝のあたりは、木造の学校や下町風の町家あるいは町

工場が立ち並んでいたのだから、ふたつの大きな建築のこの取り合わせは壮観であり、なかなか人目を惹く景観であったに違いない。

モダンな白い壁に縦長に「アパートメント青雲荘」のしゃれた切り字が浮き出ている。デッサウバウハウスの白い壁にも、縦にBAUHAUSと浮き文字がついている。山口が1931年から32年まで一年半ほどの欧州遊学修行で身に着けたモダンデザインである。バウハウスを引き合いに出したが、山口文象がドイツで師事したのが、バウハウス創立者のワルター・グロピウスであったのだから、当然と言えるだろう。なお、山口はバウハウスで学んだことはない。

山口文象が戦後に設立した設計事務所のRIA（現・㈱アール・アイ・エー）が、「芝園アパートメント」と題したこの建築設計図面15枚を保存しており、竣工時の紙焼き写真、当時の新聞記事スクラップもあるので、それから建築のハード面を考察してみよう。

実はこの建物の西半分は3階建て鉄筋コンクリート造であり、東半分は2階建て木造である。二つの建物をつないで、ひとつの建築として平面も立面も設計している。1階部分が友愛病院で、RC部が診療室など、木造部が病室群、2階以上は賃貸住宅である。

RC造部分は陸屋根であり、木造部分は小屋組み勾配屋根がかかっている。木造部もパラペットを立ち上げて屋根をかくし、外観はコンクリートも木造の区別が付かないように、外壁は白いモザイクタイル張りで通している。

各階に小庇つきの横長窓が連続し、回転式ガラス窓がはいり、意匠格好のために建築技術的には無理をしているから、多分、RCと木造の接合部はひびが入り、あちこちから雨漏りしただろう。

西側正面はカンチレバーとして、一階を引込めて深い影を作っ



てピロティをイメージさせ、2階から上のカンチレバー先の壁面は小さな穴があいているだけだが、これは外部階段の穴あき窓である。この階段の屋上出口にかかる大きな庇をはねるように見せて、正面のアクセントにしているが、これもモダンデザインのボキャブラリーである。

プランは、1階が友愛病院で、5つの診療室、9つの病室も備えてかなり本格的な施設である。2階から上が青雲荘アパートメントであり、貸室が中廊下をはさんで両側に並ぶから日本風アパートであり、下宿屋風でもある。南側の東半分木造部分の部屋は、既存の日本労働会館（元惟一館）にいきなり面しているから、日当たりが悪い。貸室は6畳間が一番多く12室、4畳半間が6室（内洋間3室）、8畳間が2室、6畳+2畳間キッチンつきが6室、8畳+3

畳キッチンつきが2室、計28室である。洋室は4畳半大の部屋5部屋（貸室3、病室2）だけ、和室は竿縁天井で窓には紙障子もはまっている。内部まで真っ白なモダンデザインではなく、これもコンドルのように和洋折衷だった。水洗の各階共同便所はあるが浴室はないから銭湯なのだろう。

コンクリート造の屋上が、洗濯場や物干し場でもあるが、植え込みのある庭園になって憩いの場でもあったのは、これも屋上庭園というモダンデザインのボキャブラリーである。

後に1945年の空襲で木造部分は焼失、RC造部分も2階以上は内部も焼けたが、一階診療所部分だけが内部も焼け残った。戦後はRCの構造体だけを活かして改修し、診療所、食道、居室、事務所など雑居ビルとなっていた。

◆1936年頃の山口文象

青雲荘アパート・友愛診療所ができた1936年は、山口文象の戦前の最盛期であり、次々と作品を発表している。この時まで34歳、これから働き盛りになろうとするときに日本が戦争期に入って建築家の仕事は激減してしまい、山口も戦中戦後合わせて10年ほどは、ほぼブランクになる。そのまえの花咲く時期の作品が青雲荘であった。

山口文象は1930年から32年にかけてヨーロッパに遊学し、その中で、ドイツのベルリンで当時の世界的に有名な建築家のワルター・グロピウスのアトリエで半年ほど修行したことが最大の収穫であった。彼はそこでソビエトパレスのコンペチションやジードル

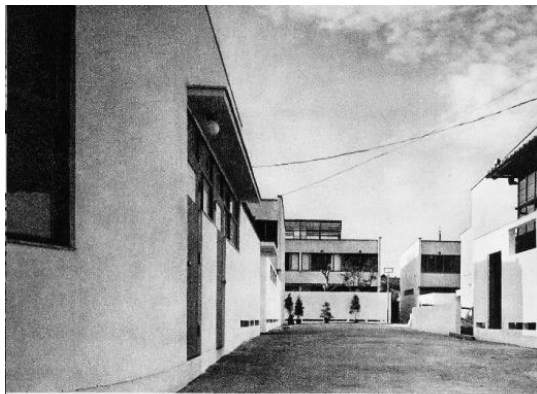
ング設計に携わったと言っていた。

ジードルングとは、当時のワイマール共和国における社会民主党政権がすすめた住宅政策で、勤労者階級の都市住民のために快適な集合住宅団地を供給する事業であった。

グロピウスを始め、コルビジエ、タウトなどの当時の近代建築のリーダーたちが各地でジードルングの設計に参加して、モダンな集合住宅をつくりだした。ナチの迫害をのがれて日本にも一時住んだことがある建築家ブルーノ・タウトによるベルリンのそれは、いまでは世界遺産に登録されている。

もともと、本家のドイツではナチ政権の台頭でこの政策は消えたが、世界的に影響を与えて、日本の関東大震災復興の住宅供給をした同潤会もそのひとつである。

青雲荘の共同住宅としてのデザインを見ると、このジードルングの共同住宅デザインの影響が色濃い。既成市街地の中の1棟だけだから、ドイツにジードルングのような団地としての環境デザインではない。



番町集合住宅 1936年 山口文象設計

山口文象の有名な建築作品に、この青雲荘アパートメントと同じ年1936年にできた「番町集合住宅」がある。東京麹町の現在の文芸春秋社屋があるところに建った賃貸住宅群であった。これは環境デザインもジードルングであった。

ただし、これは勤労者階級のためではなくて、外国人向けの高級賃貸住宅だから、当人もジードルングとは言い難いと掲載した雑誌に書いているが、そのデザインは青雲荘と共通するところが多く（たとえば縦軸回転連続窓）、パウハウス流兄弟作品と言ってもよいだろう。

この青雲荘の前、山口文象がヨーロッパから帰ってきて、最初の仕事で1934年にできた「日本歯科医科専門学校病院」で、この美しい真っ白なモダンデザイン建築を出世作として一気に世に認められる建築家となった。

そしてヨーロッパ遊学の前からかわっていた「黒部第2発電所・目黒橋」と「小屋平ダム」のデザインを1935年から39年にかけて世に問い、これが彼の代表作となった。今もそのモダンな姿を黒部峡谷に見ることができる。

この青雲荘が建った1936年は、この黒部の仕事をはじめとして、「山田邸」、「番町集合住宅」、「小林邸」など、山口の代表的な作品のモダンデザイン建築を次々と世に出して最盛期となっている。この時は34歳だから、これから脂ののった建築家として飛躍していくはずだったが、戦争が良い建築をつくる仕事自体を奪って彼にその才能の発揮を許さなくなってしまった。戦中から戦後にかけての約10年間はほとんど彼のブランクであった。

◆労働者に快適な住まいを

この建物も元惟一館の日本労働会館と同じく、総同盟の意所有である。「アパートメント青雲荘」と書いてあるが、その名のように賃貸住宅と診療所の複合ビルである。なぜ労働運動体がこのようなものを建てたのか。『財団法人日本労働会館六十年史』によって探ってみる。

当時のリーダーの松岡駒吉はこう書いている。

「都市在住労働者の住宅費はその生計費の二割以上を占めしかも交通費の増大は更に生活苦を加重しつつあります。本財団は此の事に鑑み専ら熟練労働者並下級俸給者の為に快適にして安易なるアパート住宅を建設し、云々」（政府への建設費補助申請書）。

この労働者への便利な住まいの供給とともに、そのいっぽうで家賃収入による活動資金調達も意図している。松岡駒吉は経営の才があった人という。

また診療所については、当時の国内情勢で戦時体制に向かいつつあり、長時間労働で健康問題が起っており、勤労者や低所得者が診療を受けやすい医療体制が求められており、これに対応したのであった。

こうしてできあがった建築は、住宅を「アパートメント青雲荘」、診



1934年 日本歯科医科専門学校病院 山口文象



黒部峡谷発電所と日黒橋 1936年 山口文象設計



1936年 山梨県 山口文象

療所は「友愛診療所」（建物入口にはこう書いてあるが、広告が友愛病院となっている）とそれぞれ名付けている。

この青雲荘アパートの家賃は、当時の新聞記事に「畳一枚三円」とある。とすれば最も多い6畳間が18円、6畳+2畳で24円となるのだが、これはどれくらいの水準なのだろうか。

1929年に発行された「新版大東京案内」（今和次郎著、中央公論社発行）に、同潤会アパートの家賃は6畳間が11円50銭、15円50銭とある。別の資料では、同じ同潤会の大塚女子アパートの家賃は9円50銭、16円で、これは当時としてはけっこう高い家賃であったという。

これらと比較すると、この間の物価上昇もあるかもしれないが青雲荘アパート家賃はけっこう高いような気がする。1936年に同

潤会アパート住人を調べた資料によればの平均月収は、会社員や官吏のサラリーマンは127円、賃金労働者は84円とある（『1930年代の建築と文化』1981年、現代企画社発行、186ページ）。青雲荘アパート入居者はどのようなクラスの労働者であったのだろうか。熟練労働者は高給取りだったか。

現代ではアパートというと戦後ににわかにできた木造2階建ての低質な賃貸共同住宅をいうが、戦前は関東大震災後にアパートメントハウスという言葉で建てられた共同住宅は、

コンクリート造の建物を言っていた。東京下町の木造長屋が一般的な労働者住宅であったのに対して、アパートメントハウスは質的にも家賃も高く、台頭してきたサラリーマン階級を主とするハイカライメージの住まいであった。

アパートメントハウスは、はじめは同潤会や東京市が建設するコンクリート共同建築であったが、しだいに民間の木造共同住宅もそういうようになった。1937年に東京でアパートと呼ばれる建物は2000棟近くあったが、ほとんどが木造で、コンクリート造は156棟にすぎないとの記録もある（『1930年代の建築と文化』1981年、現代企画社発行、202ページ）。

この「アパートメントハウス青雲荘」は、東京でもその数少ない不燃アパートのひとつであり、しかもそこには民間アパートにも同

労働者本位 療費診実

友愛病院

診療の社会化を理想とする

支店 三田四ツ目野芝院 松岡 啓

内科	外科	小児科
産科	婦人科	皮膚科
性病科	レントゲン	太陽燈科
院長 醫學博士	中川 鐵治郎	
同 安田 徳太郎		
醫學士 岡野 統典		
同 吉田 幹		
薬剤師 菊地 美喜		
主任 松尾 牛三		

七月一日より開院

財団法人日本労働會館 庶務主任 佐々木 啓

電話 1010

総同盟機関誌『労働』1936年7月号広告

潤会にもない、労働者のための快適な住まいという意志が込められていたことが、意義深い。松岡は労働者層にも質の高いアパートメントを与えたかったのだろう。

松岡がどうして山口文象に設計を依頼したかはわからないが、当時の新進評判の建築家として選んだのであろうか。山口文象は、戦後に自らを左翼であるとして、戦争協力仕事は一切断ったとか、国内外でも左翼と交流したとか、特高に狙われたとか語っているが、じつは事実は不明である。左翼傾向にあるからという理由で、松岡駒吉が山口文象を選んだとは考えにくい。

松岡駒吉が山口文象のことをどこまで調べたかわからないが、山口がドイツやオランダでの都市住民のための集合住宅づくりの新潮流であるジードルングを学んできたことを講演したり書いていたりいるから、それで選んだのかもしれない。あるいはドイツの社会民主党政権における住宅政策のジードルングを、松岡たちは知っていたかもしれない。

そして山口文象はジードルングの思想とデザインをもつて、労働者のために快適かつ美しいデザインの住まいをつくるというメッセージを青雲荘に込めたのであろう。内部を見ても、和室はそれらしく仕上げてあって安アパートではない感じだし、水洗便所でもあったようだ。

同じ年にできた、山口文象のやはりジードルングばりの番町集合住宅が、外国人を主とする高級住宅であったのと対照的であるにもかかわらず、外観デザインは共通している。

日本でこのジードルングに相当する住宅供給をしたのは、関東大震災の復興のために都市住宅を供給した同潤会である。モダンな集

合住宅が東京のあちこちに建てられていたが、現在ではほぼすべて建て替えられてしまった。

同潤会は公的な住宅供給機関であったが、友愛会館の青雲荘は民間機関として労働者階級への住宅供給に乗り出したのだらう。1939年に川崎市内に第二青雲荘と第二友愛病院（いずれも山口の設計ではない）をつくったが、後が続かなかつたのは戦争のせいだろうが残念である。

いずれにしても、松岡も山口もこの青雲荘プロジェクトに、「労働者に快適な住まいを」というメッセージを込めたに違いない。

このアパート経営は黒字になり、診療所の経営の赤字を補てんしていたらしい。そしてこのアパートと診療所の組み合わせは労働組合の好評を博して川崎にも第2青雲荘・診療所を開設した。

こうして1936年から、総同盟の拠点として和洋折衷コンドール建築と洋風モダン山口建築は並んで戦争の時代を迎える。両建築の実質所有者の総同盟は、戦時下の体制として産業報国会への合同を迫る当局に抗して、1940年に自主解散した。



青雲荘アパートメントの便所



居室内部

建物の経営主体として設立していた財団法人日本労働会館は継続しており、病院、アパート、食堂の経営をして持ちこたえていた。ここにも松岡の経営手腕がある。だが母体の総同盟がなくなり、戦時体制は厳しくなり、経営は次第に縮小せざるを得なかった。それでも病院の経営に力を入れ、空いた日本労働会館の部屋を病院に転用するなどした。

1937年に日中戦争は本格的になり日本は戦時体制に入って、民間建設資材も資金も制限されるようになる。今から考えると、松岡はその時点でなければできなかった建設を実にタイムよく実行したのだった。

1945年5月25日、太平洋戦争のアメリカ軍爆撃機が東京を襲い、日本労働会館も青雲荘も診療所も焼夷弾で燃え上がって焼失した。元の一館の木造建築は灰となり、青雲荘・友愛病院の木造2階建て部分も灰になり、残ったのは3階建て鉄筋コンクリート1階にあった友愛病院の診療所部分と2、3階のコンクリートの柱と床と壁だけであった。

戦争がなければ、全国各地に第3、第4の青雲荘や労働会館も生まれて、労働者福利厚生に寄与したことであつたらう。戦争が松岡の労働運動の何もかもを破壊してしまった。

再出発は、政治体制が変わり、労働組合運動が合法となる戦後を待つしかなかった。

◆戦災で焼失跡地に建った山口文象設計の新会館

1945年8月に戦争は終わった。総同盟も松岡のリードで再建

戦後の新たな政治体制により、労働運動は合法となつてきた。総同盟も松岡駒吉のリードのもとに、1945年10月



1949年に建つ総同盟会館と全職会館のスケッチ



1950年頃の青雲荘・総同盟会館・全職会館



1964年、工事中の三田会館の隣に建っている「芝園食堂」=焼け残り修復再利用「青雲荘アパート」の姿

されて活躍を始める。

焼け跡の中で財団法人日本労働会館の戦後再出発は、青雲荘・友愛病院の焼け残りコンクリート躯体を修復再利用することだった。1946年からはじめから外食食堂の「芝園食堂」の経営を始めたが、戦争直後の財団を持ちこたえる柱となった。外食券とは、米が政府による配給制度化の時代において、家庭外の食堂で食事をする時にこれを出すのであった。わたしが学生の1950年代はまだ食料統制時代で、外食券をもつて飯屋に行ったものだが、ここに来たことはない。

こうして山口文象設計の建物は、コンクリート造部分だけとなつて、あちらこちらが改変しながらも、2階は食堂、1階は食堂運営を任された松岡駒吉の弟の住居、3階は食堂従業員の宿舎となつて、かろうじてその姿を残すことができた。

から総同盟組織準備活動を始めた。準備活動の本拠は、修復した元友愛病院の一室であった。1946年1月に組織を再建した総同盟は、本部事務所を東京神田の救世軍本宮に置き、さらに京橋の明治屋ビルに移った。しかし、1948年末に立ち退くことになり、芝の戦災跡地に新会館建設を建てることにした。このとき、総同盟の中心的活動団体の全職同盟も、ここに合わせて会館を建てることにした。初代全職同盟の会長が松岡駒吉であったこともその所以であろう。

焼失した元青雲荘木造部分と元惟一館の跡地に、1949年7月に総同盟会館と全職会館が建った。木造2階建ての二つの会館は、元青雲荘の芝園食堂とコの字に並んで、戦後の新たな景観をつくりあげた。この二つの会館の設計も、山口文象によるものであった。



全織同盟史第2巻掲載の全織会館の写真

は251坪（総同盟会館111坪、全織会館109坪）、共通ホール29坪、費用は合計600万円で山口設計事務所の設計により納富建築株式会社が建築した。（中略）山口設計事務所長に感謝状が贈呈された」（『財団法人日本労働会館六十年史』177ページ）

「当時、総同盟においても、もと日本労働会館（戦前の総同盟本部）跡に、新会館建設を決定し（中略）、全織会館は種々検討の結果、敷地を総同盟会館と同一場所にきめ、土地所有者、財団法人日本労働会館（理事長松岡駒吉）より借り入れ、建物は総同盟会館と隣接し、共通ホールで接続する設計であった。

会館建設の概要は次のとおりである。建設坪数1階50・25坪、2階59・33坪、総坪数109・58坪。木造2階建て。主要設備室―事務室1、応接室1、会議室1、図書室1、宿泊室（洋室・和室）5、小使室1、便所、浴室。

設計・監督 山口文象建築事務所、請負者 聖徳社納富組、見積工事費 228万1,209円」（『全織同盟史第2巻』408ページ）

この建築に関して、かつて友愛労働歴史館からわたしに「山口文象の設計であるようだが」と問い合わせをいただいて調べたことがあった。山口文象建築事務所は、1949年に閉鎖するのだが、RIAが山口文象事務所から引き継いで保管している資料にはなにも見当たらない。閉鎖するまで所員だった方に聴いても記憶にないとのことだったので、この二つの会館は山口文象の設計ではないと思っ

い込んでいた
ところが、友愛労働歴史館での今回の展覧会を機会に、わたしが講演をしたところ、UAゼンセンの逢見会長から全織同盟側の資

二つの会館は、青雲荘と同じく飾り気のない連窓のモダンデザインである。こうして19世紀末のコンドルによる和風建築にとつてかわって、山口文象による20世紀前半のモダン建築が並んだ景観が登場した。まだ戦後間もない東京では、復興の姿のひとつであったに違いない。

この二つの新会館については、RIA所蔵の山口文象資料にもないし、当時の建築ジャーナリズムにも載っていない。これが分る資料としては、『財団法人日本労働会館六十年史』と『全織同盟史第二巻』（1965年 全国繊維産業労働組合同盟）がある。

「会館は正面右側に全織会館、左側に総同盟会館が並び、コの字型につながる形で建った。山口設計事務所による設計であり、11月に着工、翌1949年8月4日に落成式を行った。（中略）建坪

料にも山口文象設計とあることをご教示いただいた。労働会館側と全織同盟の両方の資料にその記述ならば、これは山口文象の設計であるに違いない。

山口文象の建築の発掘を30年もやってきて、もう「新発見」はあるまいと思っていたから思いがけない嬉しいことである。展覧会のおかげである。ただし、図面は今のところみつからないので詳細は分からないが、全織同盟史にある写真を見ると、これも青雲荘と同様のモダンなものであったらしい。

1964年12月、総同盟会館と全織会館を壊して、「友愛会館」(大阪建築事務所の設計)を建設した。元惟一館があつた場所に9階建ての高層ビルができた。会議室、ホテル、結婚式場、レストランなどを持つ一大福利厚生センターである。この後に芝園食堂は取り壊されて駐車場となった。

これで山口文象設計の青雲荘は建つてから28年、戦後の二つの会館は建つてから15年にして完全消滅した。惟一館が関東大震災を経ながらも生き延びて、51年の命を保つたのと比べると短い命だった。

1977年、駐車場を撤去して「ホテル三田会館」(大建設設計)が建ち、二つの高層ビルが並んで建つた。

さらに34年後にそれらも取り壊されて、2012年にオフィスとホテルが上下に複合する超高層ビル「ホテル三田会館・友愛会館」(安井建築事務所の設計)というひとつのビルに建て替えられた。敷地の公開空地の一角の造園に、工事で出土した惟一館時代の煉瓦が使われて、惟一館を偲ぶようになっている。

振り返ってみると、惟一館(1894年)、青雲荘・友愛病院(1

931年)、総同盟会館・全織会館(1949年)、友愛会館(1964年)、ホテル三田会館(1977年)、ホテル三田会館・友愛会館(2012年)変遷する姿は、さながら日本の近代から現代への建築デザイン史を見ようであるとともに、日本の労働運動の変遷を見るようで、実に興味深いことである。

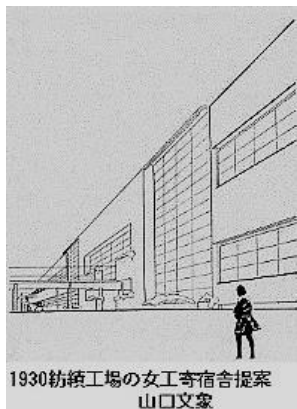
◆山口文象の庶民住宅への取り組み

最後に設計者山口文象が青雲荘というアパートメントの設計をした背景と意義について考えてみたい。山口は建築家としては珍しく、住宅についてはかなりの身を入れており、特に戦後は多くの問題作や評判作を設計している。

山口文象は渡欧の前は、関東大震災の直後に若い仲間たちを糾合して「創宇社建築会」と名付けて、建築デザイン運動をはじめ活躍していた。新たな提案のある建築作品を図面や模型で作り、展覧会や講演会を主催してたびたび開催した。

初めは新しいデザインを

求める芸術運動だったが、次第に社会運動の様相も持つようになって、提案も社会的様相を持つてくる。例えば山口文象が展覧会に出品した労働者のための提案には、「工業地帯に建つアパートメント」(1927



1930紡績工場の女工寄宿舎提案
山口文象

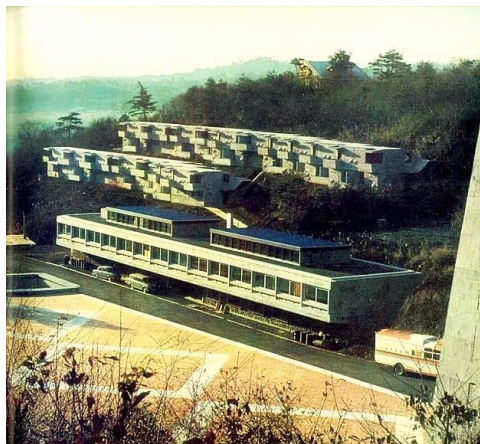
年)や「紡績女工寄宿舎」(1930年)があった。それは単に建築のハード面だけではなく、資金計画や経営へのソフトな考え方の提案もあった。

多くの芸術家がそうであるように、左翼運動へのシンパシイは建築家にも当然にあり、創

宇社建築会の仲間の中には後に過激な運動に入って行ったものもある。山口文象がどれくらい左翼運動にあたったかはわからないが、1930年にヨーロッパへの旅にでて、翌年におきた創宇社建築会メンバーのほとんどが検挙された官吏減法騒動には無関係であった。これで事実上、創宇社建築会活動は停止した。

ドイツで左翼的な建築展覧会に出品するなどの活動もし、当時ベルリンにいた左翼系日本人たちとも交流したらしいが、事実関係はよく分っていない。帰国後は売れっ子になって、建築運動の表に出ることはほとんどなくなつたし、もう運動ができる世の中でもなくなった。

1941年に太平洋戦争になってからも、軍需工場の生産施設の



新制待産文化センター 1964



1971年 禅の字寺 山口文象設計



町田市郷土資料館(現・町田市立博物館) 1973

仕事は一切しなかったとい(実際はいくつかあるが)、徴用されてくる工員住宅の設計ばかりをして糊口をしのいでいた。ここでもいかにして狭いところで工員たちが快適に暮らす住まいとするかをテーマにしていたと、山口は語っていた。

そう考えると、アパートメントハウス青雲荘は、山口が積極的に取り組んだ集合住宅建築ジードルングのひとつであったと言える。青雲荘を発表した雑誌『国際建築』(1936年7月号)の解説文の表題を「アパート第一作」としているのは、続けて集合住宅に取り組む予定があったのだろうか。それが戦中の軍需工場工員住宅というジードルングとなったのだろう。

戦中戦後の約10年間のブランクから1952年の「久が原教会

で、戦後作品がようやく世に出た。そして1953年にRIAを創設して再起したのであった。

山口の建築家としての戦後社会復帰は、1953年に結成して主宰した建築設計集団のRIAであった。その最初に提案したのが15坪のローコストハウスであった。そして戦後の極度の住宅不足の日本における庶民住宅の設計に、1960年代までにおよそ460軒もの住宅の設計に取り組んだ。これほど多くの住宅設計に取り組んだ建築家は、同年代の他にはない仕事ぶりであった。1970年頃までは「住宅のRIA」と一般に言われて、モダンリビング運動をリードしていたものだ。ただし、儲からなかったことも確かである。

その後、RIAは都市計画の仕事を中心に展開しているが、山口のRIA時代の建築作品には、数多くの庶民住宅、神奈川大学、朝鮮大学校、新制作座文化センター、渋川市市民会館、是の字寺、町田市博物館などがある。

浅草の裏長屋に大工の子に生まれて、徒弟学校までの学歴ながら、戦前の学歴社会の中で大学出の建築家たちに伍して功成り名遂げたのは、非凡な才能があったからだろう。そして戦中、戦後の大きな沈みと浮きを経験して、いつも社会に目を向けていた建築家であった。

山口文象の生涯は数奇であり、その評価は一樣ではない。わたしの山口文象評価は、戦前は創宇社建築会を起こした建築運動の旗手の一人として、そしてモダンイズム建築の旗手の一人として、そして戦後はRIAという特異な建築家集団を率いたオルガナイザーとして位置づけをしている。

では山口文象の代表作はというと、建築作品としては1930年代ほぼ全般をかけた黒部第二発電所の設計とその関連するダム等の土木デザインの仕事であり、戦後最大の遺産は全国に根をおろした都市計画・建築設計組織となったRIA（株式会社アール・アイ・エー）である。

（初稿201403010、改訂20140614、改訂2校20140720）



久が原教会 1950年 山口文象設計

第4章 同時代建築家の証言

一 創宇社建築会同人

竹村新太郎氏の証言

●日時 1976年5月25日 18時～21時

●場所 八重州龍名館4階会議室

●出席者 竹村新太郎 長谷川堯 河東義之
狩野哲夫 伊達美徳（記録者）

*注：文中「私」とあるは竹村新太郎氏のこと

○創宇社建築会のはじまるころ

創宇社の第1回の同人は、すべて通信省官繕課で働いていた者である。第1回展の写真は建築雑誌にのっている。

このとき、山口文象と広木の劇場とその模型がのっており、これに滝沢氏が批評を書いている。私は第4回から参加した。

分離派と違い、アンチ・アカデミー的な一面もあった。

第1回展の十字屋は山中節治の設計で建築雑誌にのっている。山口が運動としてまとめあげて、エンジンをつけたといえる。彼は政治力もあり立派であると思う。展覧会場の確保も山口の手腕によるものといえる。

一方、仲田定之助・勝之助兄弟の応援もあった。もちろん、一同の立派な作品があったことも、これをすすめられたものである。創宇社のメンバーはみんな若かったが、一歳ずつ年齢が異なる。年齢の順に、山口、小川光三と渡刈雄、古川、梅田と広木、海老原・平松・山口栄一、竹村、広瀬・河楯、野口・今泉・道明・崎谷と続く。

○帝都復興創案展

大正13年の帝都復興創案展の山口の「丘の上の記念塔」は、震災記念塔のコンペのためにつくったもので（実際にはコンペに応募しなかったと思うが）、これはすばらしいパスだということで、海老原たちも感激していたものだった。

この帝都復興創案展は総合展で、都市計画もあった。山田、岸田、中村順平氏などの作品もあった。

ラトール、メテオール等はこのときに組織したので、メテオールが第2回展としてやったのみで他は消滅した。

建築の展覧会というものは分離派展、創宇社展くらいなものであまりなかった。講演会は、いまよりもあったようだ。

○創宇社の活動

創宇社の連中は銀座にあった「三喜ビル」の屋根裏部屋で、ウクライナ劇場コンペを

やった。山口を中心にまとめたものだ。また、エスプラントの勉強もここでやった。その講師は美校を出た兼松理という人だった。

雑誌「建築科学」にはエスプラント語のページがあったものだ。

この三喜ビルは仲田定之助がオーナーで、山口の設計したものだった。

白木屋の設計は事実上創宇社でやったといえる。設計は山口がまとめたが、レリーフや金ピカの装飾は石本氏のデザインである。

○創宇社と美術関係とのつながり

創宇社として美術関係との接触は、単位三科が最初だろう。創宇社が束になって単位三科に加わったという形である。



丘上の記念塔 1924 <分離派作品集第3>より

このあたりは山口、仲田、中原実氏という関係がもとになっているのだろう。中心はこの三人と日本画家の玉村善之助である。

創宇社としては村山知義とは関係はない。村山に建築作品がいくつかあり、山口はほめているが、私たちは無視する態度だった。

単位三科のころ創宇社で「フアリアフォートーン」という人間の全く出ない芝居を、山口、仲田演出でやったことがある。

九段画廊は九段から飯田橋にぬける道に面してあった。中原実氏の関係するものだろうと思う。

○創宇社の左翼的傾向

山口が左翼的な勉強したことに他の者が影響されたとみるべきであらう。当時ブハーリンの「史的唯物論」がよくよまれた。創宇社主催の講演会でも、谷口吉郎がこれから文章を引用している。

また美校出の海老原、広瀬、平松たちは学生生活で左翼的な勉強をして、また、絵かきに左翼のものが多く、これらと交遊のあった彼等がメンバーになってきたことも創宇社の思想的傾向と関係ある。

海老原たちの同期で美校を途中で追われた金須孝を擁護する運動等が、彼等にその様な思想的なことへの関心を深くさせたのかもしれない。

金須孝は美校を追われて松竹に入り舞台美術で仕事をしていた人だった。金須孝は第5回展の批評を書いている（建築新潮 昭和2年1月）。

（建築新潮 昭和2年1月）

○そのころの通信省宮繙課

通信省に私が入ったときは大正11年で、山口たちが創宇社をつ

くるころは、まだ、近づきになっていなかったの、見ていたのだった。

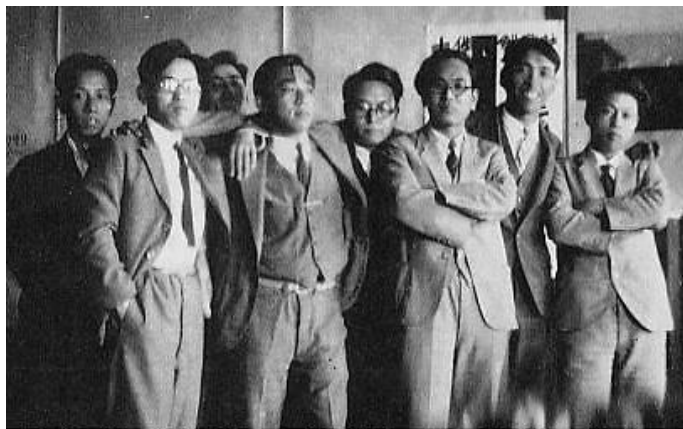
通信省は郵便局の設計をやっていたのだったが、そのころから電信電話局の設計が多くなり、新聞広告までして人を集めた。私が入ったころは山田守・吉田鉄郎がいた。その前に岩元禄が居たが私は識らない。

そのころ通信省宮繕課では、Architectを大事にするという雰囲気があった。毎月、絵の展覧会があ

り、山田、武富、吉田などいい絵を出品していた。

あの時分の建築家は絵をかくものであり、私たちもデッサンを習いに行った。デッサンとドイツ語を習うことが楽しみだった。本郷3丁目付近にデッサンを習いに行った。

建築をやる人たちで、創宇社の様な運動をすることは自慢なこと、役所内でも応援するという雰囲気があった。これには、大正デ



左から河堀、竹村、廣木、小川、菱刈、山口、滋老原、野口

モクラシーが背景にあったとも言えよう。

私のやめるころ（昭5）には、建築にたずさわっていた宮繕課の者は230〜250人はいたであろう。しかし、高等官と判任官は厳然とした差別があり、食堂・便所も別であった。梅田が、便所で武富に声をかけて叱られたという話もあるくらいであった。

通信省の建物は、大震災のときに、丁度絵の展覧会をやっていた日で、レンガ造だから大きなブロック状に崩れていった。山口は自分の出品した絵を持って浅草へと逃げ出したが、途中で火に追われて絵も捨てて逃げたという。

宮繕課の課長は、はじめ内田四郎、次に藤井という大蔵省から来た人がなった。この人も建築家だった。そのころの通信省のような雰囲気をもった建築の組織は他にはなかった。

○山口文象の通信省での仕事

山口は震災の半年ほど前まで大阪にずっと出張していた。したがって通信省内部でデザイン的な仕事をしたことはあまりない。

しかし、高等官でない者でデザインにタッチできたのは山口だけであろう。それだけその力量を認められていたのだろう。あまり大きい仕事はしていないが、浅草馬道の郵便局は、震災以後の南京下見のバラックだったが、なかなかよい作品だった（現在のものは当時とは違う）。

岩元禄は私は識らないが、知っているのは山口、梅田までである。青山電信局については柱の上につく予定だったトルソーの原寸コンテデッサンを見たことがある。

前橋の郵便局には山口はタッチしていないと思う。梅田が現場を

担当した。

○分離派と創宇社

山口がシベリア鉄道でドイツへ渡ったとき、グロピウスに紹介状を書いたのが堀口捨己氏だった。そのとき山口の紹介の仕方が

「Architect und Maler」という肩書きをつけて紹介していた。

これはある面での分離派の人たちの創宇社への見方を示唆していると言える。つまり建築家として見るよりも、絵かきとして見ようという別あつかいの意識がどうしても感じられたのであった。

○前川男氏と創宇社

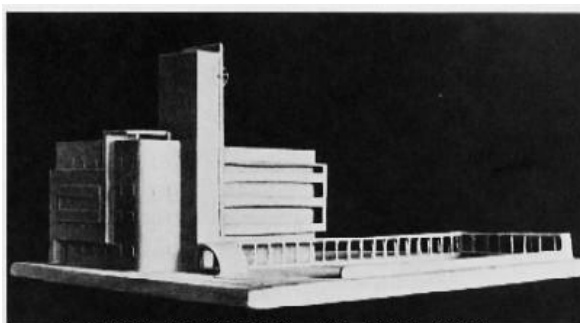
前川氏と山口は個人的に親しかったこともあり、後に「建築科学」に原稿をもらったこともある。創宇社のメンバーの崎谷は前川事務所創立以来の所員である。

創宇社の展覧会には第8回展のときに、コルビュジェのところから帰ってきたばかりで、出品している。

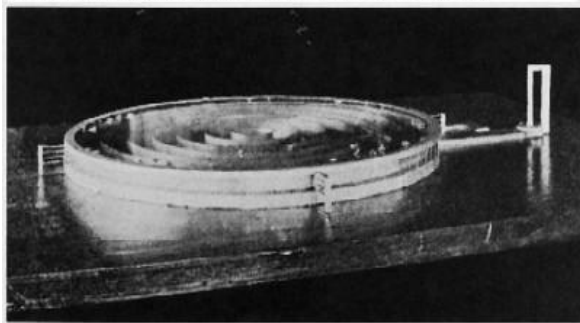
○当時のデザインの流れ

当時はドイツ建築の影響が非常に強かった。雑誌でも通信省でとっていたものはドイツのものが多く「ヴァスムート」「INNEN DECORATION」「BAUFORMEN」「DIE BAUGLIDE」とあり、アメリカは「FORUM」、イギリスは「ARCHITECTURAL RECORD」で、その他はなかった。

そのころ外国誌の建築や美術の写真から、複製で写真集をつくってみんなに買わせることをよくやった。ペルチヒ、メンデルゾン、ペーレンス、バルラッハ、ザッキン等の写真で3冊まで出した。



1927年分離派第5回展覧会出展作品「市民会館」岡村蚊象



1927年三科展出品「1950年計画中央航空機停機場」岡村蚊象

「表現派作品集」は須原書店から出したが、表紙は山田のレイアウトであろう。

コルビュジェへの関心はあまりなく、グロピウスへは関心あった。分離派の展覧会報に森田慶一が『いみたちお・こるぶしえり』という文を書いたのを見て、「あの人たちはコルビュジェに関心があるのか」と思ったことがある。

山口がペーターペーレンスのプランをコピーしてくばってくれたこともある。ドイツのワイマル文化が当時の日本をひきつけるも

のがあったといえよう。
ソビエトロシアへの興味
はタトリンくらいで、ま
まったものはなかった。

○山口文象と橋

山口が純粋にデザイン
した橋は数寄屋橋だったが、
これは実にいい橋だった。
隅田川の橋脚の照明器
具を、創宇社の連中でデザ
インしたものがあり、いま
でも残っている。

清洲橋は山口のデザイン
で、京橋は滝沢氏がデザイ
ンしたものである。

山田守が復興局の顧問と
なり、いろいろな人を推せんして橋のデザインをやらせた。山口も
彼の推せんによるもので、他に渡刈、古川、野口等も共に仕事をし
た。

山田自身は聖橋をデザインしており、この山口の実に上手なパー
スがあった。土木でない者が橋にタッチできたのは、上に理解ある
人が居たのであろう。

○東京中央郵便局のデザインについて

聖橋のコンテパース(岡村敦象)



東京中央郵便局のデザインは吉田鉄郎だが、はじめの設計では、
最上階はアーチ状のデザインだった。大震災までに図面はほとんど
完成していた。通信省に別室をつくって、そこで担当スタッフが集
まって設計をしていたが、そこに創宇社の広木が居て、私も見に行
ったことがある。

アーチは表現派的なものではなくて、もっとスタイリッシュな形
だった。この案が震災で破棄されて、現在みられる様な四角な窓に
なったが、これも吉田のデザインである。

山口の説では、震災後に武富英一のデザインにより、吉田のデザ
インの装飾的なものを除いたというが、私としては理解し難い。武
富氏のデザインとは思えないし、時間的にも矛盾するところがある。
なお、武富は課長にならずに、大倉土木に移り、専務になったが、
戦後追放になった。

○創宇社の転機となった減俸騒動

昭和5年に通信省から、梅田と広木が大蔵省に転勤となり、銀座
小松食堂での送別会の席で減俸の話があり、反対運動が始まった。

このころ、大蔵省には今泉善一が、宮内省には崎谷小三郎が居た。

ときに浜口内閣で、減俸騒動が起きた。これは伴任官以上の者を
減俸するというのであり、当然これに対して反対運動が起きた。高
等官を中心にして判任官をまきこみ運動したが、下部層は組合運動
の様相となつてきて、遂に特高に検挙されるという事態になり、通
信省の創宇社のメンバーもみんな留置場入りをした。新聞にも四段
ヌキで出たのだった。そして全員クビになった。

この事件がきっかけになって、展覧会活動というものに疑問をも

つ風潮が第8回展のころから出た。第8回展をみるとわかるように、分離派以来の様なものと内容が変わり、海老原は労働者の住宅をたてる方策案、広瀬は鉄骨組立ハウスという様にザハリヒな様相となつている。

山口も講演会で階級社会における建築家のあり方みたいなものを述べている。もつとも、当人は言いっぱなしで渡欧してしまったが。

減俸騒動で職を失い、リーダーの山口もドイツに行つてしまうというところで、創宇社のそれまでの様な活動は停止せざるを得ないことになったのであった。

減俸騒動の結末、あるいは同年の新興建築家連盟の崩壊する事件等で、自分たちがそれまで口にしていた階級社会とか身分の差とか、そして社会科学を勉強しなければ建築はできないとかいったことは、世の中の実際とどの様に結びつくか、しみじみと身をもって知らされたことになったのであった。(資料『近代建築』)

○新興建築家連盟

昭和5年10月に新興建築家連盟が結成された。メンバーは教員役人、設計事務所長、一部にはZBという井上正朔を中心とする団体も入る等で成つていた。

この宣言文は白鳥儀三郎と山口文象、結成のお膳立ては内田佐久郎氏といわれているが、実際に中心となつたのは白鳥と石原である。岸田日出刀・吉田鉄郎たちも加わっているが、その名簿を私は持っている。しかし、この連盟は翌月に讀賣新聞の記事にアカ宣伝されて、簡単に崩壊してしまつた。なお、この件については昭和47年に昔の仲間と「歴史の会」をつくり、毎月1回1年間集まつて研究

会を行つて、この会で詳しくのべられている。

○創宇社以後

そこで展覧会活動だけでは発展しないということで、昭和7年に「日本青年建築家連盟」をつくつた。これにはデザインの人だけでなく、現場の人も構造の人も入る若い人の集まる組織だつた。これは「建築科学研究会」と名称を変え、「建築科学」という機関誌を出し、6号までつづいた。

創宇社のメンバーは全員入つたが、その他のものも多く参加し、斎藤謙次、高橋寿男、高山英華、原沢東吾などがいた。

京都のDESAMの連中が東京によく来てこの研究会と接触するようになり、「建築科学」を編集していた私と高橋のところによく来ていた。そして京大のDESAMの連中と共に「青年建築家クラブ」を昭和8年に結成した。

青年建築家クラブは、会員の高井という者の2階家の下を借りて活動の拠点とした。ところが高井は組合活動のプリンターをしていたために、警察に二度も検挙されたことで、クラブに人が集まることが不可能となり、結局解散してしまつた。

その後は、クラブの残党が「火曜会」という小さなグループをつくつて、喫茶店に20人位で集まつていたこともあるが、集會に警察のスパイの類が入つてくる有様で、とうとう集めることもできなくなつた。

○帰国後の山口文象

建築科学研究会をやっているころ、山口はドイツから帰つてきて、

私たちの活動をずいぶん応援してくれた。自分の設計した作品で、帰国の船の中で知り合った画家のアトリエを機関誌に載せてくれている。帰国後の山口は建築運動の応援はしたが、表だってはやらなかった。

山口事務所を設立して、これに関係した創宇社のメンバーは、広瀬、河裾、渡刈である。道明は歯科医専の現場にのみ関係している。今泉は山口事務所に居たことはない。

戦争中は京橋に山口事務所があり、海軍の仕事もしていた。

○創宇社同人たちのその後

私は減俸騒動で留置場に29日間も入れられた。

通信省をクビになったが、当時は再就職は大変に難しかったので、仕方なく深川で中華ソバ屋を1年位やった。この間ソバ屋の2階で仲間と共に静岡県庁舎のコンペをやったりしたものだった。

川添登が『竹村は中華ソバ屋に身をやつして、建築をなげうつてまで左翼運動をしていた』と書いているが、それは、でたらめ。

その後、佐藤秀工務店、日大宮繕課、平松事務所を経て、東京電力の発電所建設に携わり、新潟に永くいた。

創宇社で左翼運動に関係した者としては、梅田が都職の委員長となり、近年逗子市の革新市長選に立候補したこともある。また今泉は、大森銀行ギャング事件で知られる。

海老原は石本事務所、広瀬は大日本電気を経て竹中工務店、小川光三は清水組、河裾は山口事務所というように、それぞれの進路をすすんだ。

○戦後の建築運動

昭和21年に「日本民主建築会」を結成して、戦前からの建築家全員が集まり、これが23年に「建築文化連盟」と合体して「新日本建築家集団」が結成された。

日本の建築運動史上で最大のものであったが、35年の朝鮮戦争のころから自然解体の状況になってしまった。これには、その前の10余年の運動のブランクが大きく関係していると思っている。

NAU・民主建築会等には、創宇社の同人は一貫して参加してきている。山口も参加しているが表面だった動きはしなかった。これには、運動がデザイン運動というより社会運動的性格の濃いということも原因しているよう。

現在、「新建」という団体があるが、『世の中をよくする』という類のスローガンはかかげているが、肝腎の「建築家の生活をよくする」ということが欠けている。新興建築家連盟にはこれがあつた。

(以下略)

(760618 竹村氏チェック済)

(注)「創宇社建築会」のメンバーであつた建築家の竹村新太郎さんをかこんだ『竹村新太郎氏のお話を伺う会』の記録で、RIA建築総合研究所(現..アールアイエー)の山口文象の記録出版のための集まりであつた。近代建築史の資料として、ここに公開する。(2001年8月)

山口の愛弟子小町和義氏の証言

―二人の建築家の戦中戦後―

この建築家・小町和義氏インタビュー記録は、建築家・山口文象研究の一環として伊達美徳個人が作成するものである。

小町和義氏は1927年生まれ、いまは八王子で番匠設計を主宰し、和風建築の名手としてつとに有名である。山口文象建築設計事務所に1942年から1949年まで所属しており、戦中と戦争直後の山口文象の動静を最もよく知る人である。

ここに簡単に経歴を書いておく。

1927年 八王子の宮大工棟梁の家に生まれる。

1941年 工学院（現・工学院大学）入学する。

1942年 山口文象建築事務所、建築設計に携わる。

1949年 山口文象事務所解散、東京建築設計事務所（後に平松建築設計事務所に改称）入社。建築運動に関わる。

八王子に戻って番匠設計を主宰、現在に至る。

1969年

至る。

このインタビューでは山口文象建築設計事務所時代を中心としている。実は小町さんのその後の活動は、戦後日本の建築界における設計や運動の歴史において重要な役割を演じているのだが、それはここでは簡単に触れるのみで、詳細なるお話は別の機会とする。

1. 八王子の宮大工棟梁の跡取り息子

小町氏へのわたしのインタビューは実は2回目である。もう30年近くも前になるが、「建築家山口文象人と作品」（R・I・A編著 1982年 相模書房）を編集するときに担当していたので、山口文象事務所時代のことを知りたくて、小町さんにインタビューをした。

そのときも八王子の番匠設計にうかがったが、事務所の位置は変わったが、小町さんは当時とあまり変わらない様子である。今回は生い立ちから聞くことにした。



伊達：お久しぶりです。ご無沙汰をお詫びいたします。今日はお時間をいただきありがとうございます。今回は小町さんの人生のすべてを聞きたくて参りました。そうすると1週間くらいはかかりそうですね（笑）。まず生い立ちを伺いたく存じます。

小町：八王子の小町家は、高尾山薬王院のお出入り大工棟梁で、江戸中期くらいから勤めていたようです。高尾山の建築については、冊子「番匠」（1977）に詳しく載せています。弘化4年（1844年）の飯綱権現堂上棟文書があり、「小町若狭源金義」の名が見えます。これは当時は社寺奉行に伺いを立てて棟上げを行ったので、そのときの許可書ですね（番匠 16ページ）。薬王院の6割は小町棟梁の作で、「番匠」8ページの写真は昭和8年の客殿の棟上げのときのもので、左端の小さな子がぼくで小学校にはいったばかりの7歳、その右が祖父の小三郎で一番の棟梁、その右がぼくの父の宗太郎、ほかは小三郎の弟子の犬工さんたちです。

伊達：ほう、大工さんたちもみんな装束と烏帽子をつけるんですね。

小町：そう、ぼくも20年前に高尾山の不動院を設計したときに、装束で参加しましたよ。

伊達：小町さんは棟梁の家の長男で跡継ぎいらつしやいますよね。

小町：ええ、上の5人が女で、親父はお袋に男ができるまで産めつて(笑)、6番目にやつと生まれたのがぼくです。やつと男の子が生まれてうれしくて、ぼくのお七夜のお祝いでみんな酔いつぶれた家に泥棒が入って、新聞に載ったそうです(笑)。ぼくのあとに弟1人と妹2人が生まれました。

伊達：それじゃあ小さいときから大工棟梁になるように育てられましたね。

小町：そう、小さいときから大工道具をおもちゃにして遊んでいましたね。仕事場に彫刻師が来て仕事していたのが面白くて、見てい



昭和8年、高尾山薬王寺宮殿棟上記念写真。前左より小町和義、小町小三郎(和義の祖父)、小町宗太郎(和義の父)……「番匠」(1977年10月30日発行 番匠設計)より引用

るうちに彫刻師になりたくなくなりました。この絵(※「番匠」15ページ「飯綱権現堂向拝蝦虹梁下絵図」)のような彫り物ですよ。

伊達：このような図は誰が描くのでしょうか。

小町：棟梁や彫り物師が描きますよ。そのころ祖父から、お前は今に関西の伊藤平左衛門(※尾張藩作事方を務めた工匠の棟梁の家柄、和風も洋風建築も手がけた)に弟子入りさせる、といわれた記憶があります。後に伊藤さんは代々有名な棟梁だったと知りました。小学校6年生頃になると家に縛られるのがいやで出たくなってきた、卒業と同時に浅草の彫刻師に弟子入りしようとおもい、そう親に言うといくらでもないと大反対されましたね。

伊達：跡取り息子がそれじゃあ困りますねえ(笑)。

小町：そこでそのころ家から一番近くて建築を教える学校が新宿の工学院(※現・工学院大学)だったので、そこに入りました。ぼくにしてみれば家から離れるチャンスと、ちよつとでも遠いところに行きたかったこともありですね。八王子から汽車通学しました。

伊達：そのころも工学院と言っていましたか。

小町：ぼくの入るちよつと前までは工手学校といっていました、ぼくのときは工学院でした。工学院は技術者を育てる学校でした。そこで蔵田周忠さん(※建築家に教えてもらいましたが、助手が剣持勇さん(※デザイナー)で主にこの人に教えてもらいました。



2年間は予科、そのあとの本科は夜学となるのです。だから本科になると昼の勤め口として、自宅で大工仕事をして夜に通学するか、どこか東京で就職するかとなりますそこで親戚の人の友人に山口文象建築設計事務所に紹介してもらいました。

伊達：その頃の建築家山口文象について、小町さんはどのように聞きたるいは思っておられましたか。

小町：工学院の予科では建築についてはまったく教えられませんでした。家では祖父や父は自分で設計し図面を書き、自分で作っていたのを見ていたので、建築家という職名も山口文象の名前もまったく知りませんでした。

2. 山口文象家の書生となる

山口文象建築設計事務所の創立は1934年とされる。ヨーロッパから帰り着いたのが32年7月末、すぐに日本歯科医学専門学校付属病院の設計に、麹町区富士見町の有島生馬の貸家で、創宇社建築会メンバーであった河裾逸美とともにとりかかった。翌年に目白に自宅を構え、ここに山口蚊象建築設計事務所を開設した。

丸の内の三菱仲四号館に事務所を構えたのは1936年であった。勘当されて風来坊であった18歳の山口が、丸の内の郵船ビルに中条精一郎を飛び込みで訪ねて、出世の道となる通信省官繕課を紹介してもらってから16年後であった。

三菱仲四号館は有楽町駅からは程近いところにあり、赤レンガ造りの2階建てのオフィスビルで床と屋根が木造であった。今のような廊下型ではなく階段アクセス型になっており、山口事務所はその玄

関を入ってすぐ左にあった。戦後のR1Aとなつてから2階にも設計室ができたが、これはR1A創立メンバーの三輪正弘氏の父君の政治家三輪寿壮氏の事務所であつたものである。

小町氏は久が原の山口自邸に住み込み、いわば山口文象の内弟子となる。この家は1941年に建てたもので、木太い純和風の民家デザインであつた。現・山口邸は当初イメージを保つのは外郭シルエットだけで、内外とも大改装されている。



伊達：山口文象建築設計事務所に入ったのはどんなツテだったのですか。

小町：義兄の坂本一雄さんが東京のある会社の設計部に勤めていて、その友人の榎原博さんが山口事務所働いているので聞いてみようとして紹介してくれました。丸の内の三菱仲四号館にあつた事務所に榎原さんを訪ねて行きました。榎原さんの紹介で、その事務所で山口先生に会い、入れてくださいと頼みましたところ、では来なさいとなりました。そのとき「うちにも君のような若い書生が2人居るよ」と話が出て、「それならばくも書生にしてください」と懇願しました。当時の少年倶楽部という雑誌に、袴をはいて高下駄で歩く書生姿が載つていて、書生にあこがれていました。それで1942年3月から山口家に住み込み書生になりました。

伊達：でも、それではお父上がお怒りでしょう。

小町：もちろん、父親からは勘当同然となりましたね。布団も送つてくれませんでした。母がこっそりと送ってくれました。

伊達：そうですね、母親というものは。その昔、棟梁の息子の山口先生も18歳で勘当されましたね(笑)。では跡継ぎを弟さんにな

さることしたのですか。

小町：どうですかねえ、そのうちに戻ってくると思ったかも知れませんが。とにかく久が原の山口家の今でもある離れに住みこみました。2人の先輩書生は、18歳の今喜多さんと20歳の久保富夫さんで、久保さんは早稲田大学付属高等工学校建築科に通っていました。今喜多さんは建築ではなく、専門学校検定試験を受けるために書生となつて勉強していました。その2人のところに16歳のぼくが入り、離れの7畳半に3人で寝泊りしていました。庭側の小さな窓から母屋の2階の先生の書斎の窓が見えて、まだ起きていたのか、互いに電灯がついていることを確認しあつていました。

伊達：書生は山口家でどんな仕事をするのですか。

小町：山口家では勝敏さん（*山口文象長男）がその前年に生まれていて、翌年に苑子さん（*山口文象長女）が生まれ、はじめは子守、買い物、喜美子夫人のお出かけのお伴などをしていましたが、少しなれたところで事務所に行くようになりました。朝6時に女中が書生部屋のベルをならすのです。ベルの回数が1回ならなれば、2回なら今喜多、3回なら久保さんなんです。まず掃除で、サロンの食堂、庭、そのころは西側に長い玄関アプローチがあつて延べ段敷石の両側に笹が植えてあつたのでそこを掃除するのです。サロンで勢いよくはたきをかけていると、2階から「うるさいッ」と先生の声が落ちてきます。それが終わってから女中部屋で食事をして、丸の内か銀座の事務所に出動します。

伊達：家では建築は教えてもらえないのですか。

小町：教えてもらいましたよ。夜遅くまで電灯をつけていると、先生がひょいと離れに現れて窓ガラスをたたいて、早く寝なさいとか、

図面でも書いているとあがつてきてみてくれました。建築史や美術史の本を読むように薦められましたね。そうそう、久保さんが卒業設計で、離れの部屋で夜遅くまで図面を書いていたら、ひょこりと先生が現れて何をしているかといわれ、その図面を見せました。ところが「こんなものじゃだめだっ」と言うや否や、ビリビリと図面を破いてしまったのです。どけつと製図台の前に座り込んでどんなスケッチを描き始め、それを久保さんとぼくが清書、インキングして徹夜もしながら一週間で完成しました。まるで山口文象の卒業設計になつてしまいましたね（笑）。気の毒に、久保さんは先生からさんざんに言われて結局建築をやめることになるのです。

伊達：厳しいですねえ。

小町：先生はぼくたち内弟子には大変に厳しかったけれど、その反面でぼくたちのことをやさしく心配してくれていましたね。若い3人のことを気にとめていてくれている手紙が、わたしの手元に残っています。（*80ページ参照）

3. 戦争中の山口文象事務所

伊達：おはいりになった山口文象建築設計事務所（*1932年創立）は、もう京橋の銀一ビルにありましたか。

小町：多分、ぼくが入る前の年の1941年からでしょう。銀座1丁目の銀座通りのひとつ南の裏通りで、地下鉄の京橋駅の近くで、ビルの2階に事務所がありました。

伊達：では丸の内の三菱仲四号館はどうしていたのですか。

小町：仲四号館は山口先生の書斎で、先生とぼくだけが居ました。

先生が奥の部屋に居て、ぼくは給仕部屋みたいな
のがあってそこに居て、先生のスケッチを清書
したり、スケッチなどを京橋の事務所に届けた
りしていました。

伊達…その頃の所員はだれでしたか。

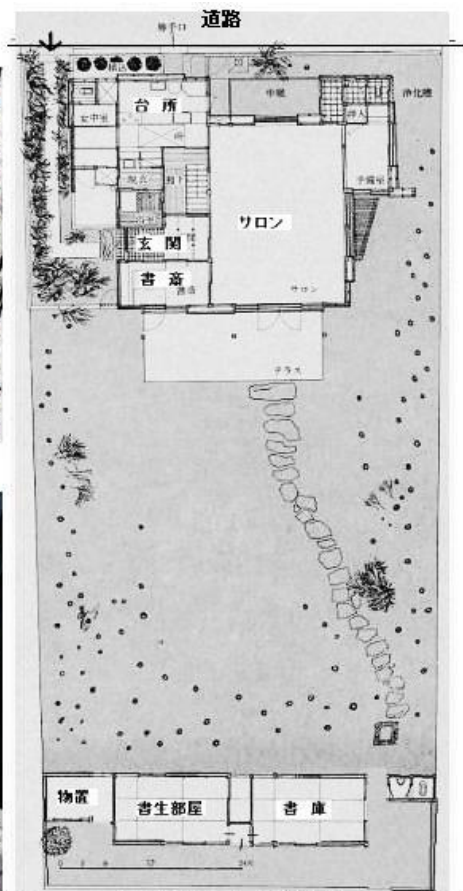
小町…浅見静雄、渡刈 雄、角取広司、遠藤正巳、
和田富朗、榊原博、矢内弘、吉原幸雄は構造担
当、岡田敏雄は建築家の岡田哲郎の弟で画家志
望、寺田弘、久保富夫、山口和男それにぼくだ
す（69ページ参照）。戦後、先生の弟の山口栄
一さんが兵隊から戻ってきました。仕事は、光
海軍工廠（＊山口県光市）などの軍需工場の工
員宿舍が圧倒的に多くて、もう忙しくて忙しく
て、時には学校を休まなければならないほどで
したね。ぼくは工員宿舍の伏せ図ばかりを書か
されましたが、とにかく建築面積が大きくて、
幅5厘の平行線を書くのも大変。大判の製図版
の上で端から端まで線を書くのに鉛筆を回しな
がら引くのだけど、図版にずっと伏せた体勢で
描くから、肺病になったのかと思つたくらい胸
が痛くなつてね。

伊達…図面も大変ですが、できた建物も100
メートルもあるような廊下だと、それは空間と
してどんなものだったんでしょね。

小町…できあがった図面を折りたたんで発送す



三菱仲四号館（「丸の内100年の歩み」三菱地所より）



1940年代の山口文象邸

るのに量が多くて大変、リヤカーで郵便局に運びました。でも建つた建物は一つも見えていません。

伊達：ここに元・光海軍工廠の写真があります。1980年頃におたしが現地を訪ねて写しましたが、そのときは武田薬品工業の工場となっていました。もう工員宿舎はなくて、玄関近くにあった事務所らしい二つの建物の写真を撮りましたが、これをご覧になっていかがですか。

小町：上のコンクリートの建築は違うだろうけど、こちらの木造2階建てのほうは、なんだかデザインが当時のもののようですね。戦前のものですか。

伊達：見たところでは戦前の感じでした。

小町：この木造の事務所風建築は、山口文象事務所のデザインの可能性はありますか。連窓ではなくてボツボツとした窓のつけ方とプロポーション、

庇があまり出てなくて寄棟の形は、なんとなく覚えのあるデザインだなあ。戦後になって設計



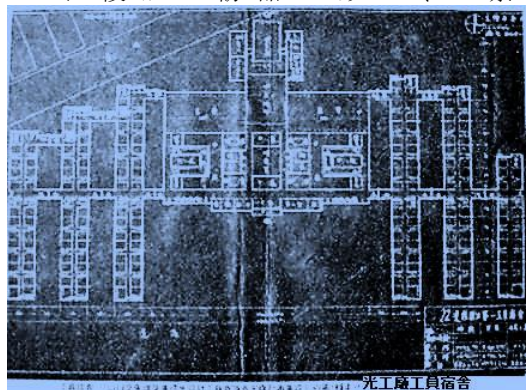
元 海軍光工廠の事務所建築(1980年ごろ撮影)

して有楽町駅前に建った東京都交通局の建物によく似ていますね。これの設計図をぼくが描いた記憶はないけれど、山口事務所作品の可能性がありそうです。

伊達：それでは山口文象作品の新発見ですが、なにしろ訪ねたのが30年くらい昔のことなので、今もあるかどうか分かりません。工員宿舎の設計について、山口先生はなにか創造的なデザインされていましたか。

小町：工員宿舎には山口先生はあまり細かいことは言わなかったですね。先生が仲四号館で簡単なスケッチを作り、それをぼくが京橋に運びました。でも住宅については細かく見ていましたね。スケッチに沢山のディテールが書き込まれてね。その頃設計の住宅は、上代たの邸(*日本女子大学長、五味邸です。五味邸は田園調布にあつて設計担当は矢内さん、施主の五味さんは日本放送協会の人でした。

伊達：そう、山口先生はディテールにこる人でした。昔、一緒に飯田橋の日本歯科医科大学を見に行ったとき、窓周りのディテールの工夫を説明してくださいました。先生は事務所には毎日来ておられましたか。



小町…週の半分くらいしか事務所にこなかったようでしたね。時々ゴルフに行っていましたね。京橋の事務所に来られるときは入り口の前から靴音高く、ドアを大きな音で閉めてはいつてきて、みんな緊張したものです。

伊達…そのころ設計チーフはどなたですか。

小町…角取さんがチーフで、その次が遠藤さんでした。角取さんの図面は几帳面で技術者タイプ、遠藤さんは芸術家タイプで線がソフトで美しかったですね。どちらもぼくは尊敬していました。遠藤さんの図面を好きでした。ぼくは朝早く事務所に行つて掃除をし、みんなの鉛筆削りもしておいたものです。製図室の隣の部屋には、ラオコーンなどの石膏のトルソーが置いてあり、昼休みはご飯を食べると石膏デッサンをやっていましたよ。矢内さん、遠藤さんとはくが描き、先生役は絵描き志望だった岡田さんでした。

伊達…先生も描きましたか。山口先生の絵は、デッサンはうまいけど色彩がどうもねと、竹村さん（*竹村新太郎、創宇社建築会メンバー）はおっしゃっていました。いかがですか。

小町…山口先生が石膏デッサンすることはなかったね。わたしも竹村さんがそういうのを聞いたことがあるけど、色使いが下手つてことはないと思いますよ。山口文象案が佳作に入った日泰文化会館コンペ（*1943年、1等丹下健三、2等前川國男）のパスは先生が描いたけど、色彩も上手でしたよ。その下書きはぼくが描き、先生がそれをもって仲四号館の自分の部屋に夕方5時頃入り、そのまま徹夜して次の日の11時頃だったか「コマッチャンできたぞー」って出てきて、見ると淡彩で彩色してあって、なかなかいいものでしたよ。あのコンペの山口デザインは、丹下案の切妻の形に似ていて、

富山の八雲図書館の模型写真に似ているが棟持柱はなくてね、あれよりもよい作品ですね。とてもよい作品だったと思いますよ。（*小町さんはこのコンペで佳作だったとして、「建築家山口文象人と作品」（1982）にもそのよう記載したが、当時の雑誌「新建築」に佳作掲載していない。小町さんに確かめたら、記憶違いのようだ）

4. 戦争加担は一切しなかったか

山口文象は1970年代は講演や座談会で、建築家の戦争責任を追及する話をよくした。たとえばもつとも追求を激しくしたのは内田祥三が東大総長として学徒出陣を送り出したことに対してであり、そして自分は戦争には一切加担しなかったというのであった。

しかし軍需工場の設計もあるようだし、日泰文化会館コンペに応募しているし、本当にそうであつたのだろうか。当時を一番良く知っている小町さんに私は確かめたかった。

なお、1982年と2003年刊行の「建築家山口文象 人と作品」にこのコンペに山口文象は佳作となつたと書いたが、当時の雑誌「新建築」にはその記載がないので誤りだったようだ。



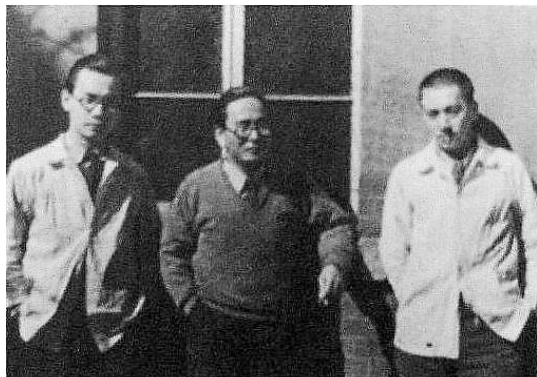
伊達…戦争中の山口先生の仕事について、ずっと気になっていることがあるのでお聞きします。1970年代からのことですが、山口文象先生は、「戦争中には自分は戦争に加担する仕事は一切しなかった。ただ、妻の縁戚が海軍中将だったこともあって海軍の軍需工場の仕事を断れずやつたが、それでも武器工場の設計はしないで、工員たちが快適に過ごせるように宿舍の設計だけをした」というお話

を講演などあちこちでされて、わたしも聞いています。しかし、戦争中の仕事を調べると、富士飛行機とか荏原製作所とか、先ほどの光海軍工廠の事務所とか、工員宿舎と比べると件数は少ないのですが、軍需工場を設計しなかったと言い切るのはいかがかと思うのです。日泰文化会館コンベだつて、大

東亜共栄圏構想への加担ですよ。小町さんは戦中に山口先生のもつともそばにおられたので、そのあたりを確かめたいのです。

小町：少ないけど軍需工場の設計もありますよね。しかしね、工員宿舎だつて軍需工場の一部なんだから、十分に戦争に加担した仕事である、ぼくは思っています。工員宿舎だから戦争に加担していないというのは、今のイラク戦争の後方支援だから戦争に加担でないというのと同じで、おかしいですよ。

伊達：小町さんがそのようにお考えと聞き、話をしやすくなりました。建築家の戦争責任を追及することは必要だったと思いますが、自分の手がマッサラというには無理があると思うのです。わたしに



左から角取、山口、和田？



山口文象と事務所の所員たち
左から山口、和田、矢内、浅見、遠藤、角取夫人？、榊原



左から渡刈 雄、浅見静雄、小町和義、和田富明

も師である建築家としての山口文象を貶めるつもりはありませんが、事実は事実としてきちんとしておくべきと思うのです。十分に立派な仕事をした人であつただけに、事実を曲げては不幸なことだと思うのです。

小町：あるとき、建築運動史の勉強の会議で、竹村新太郎さんがその創宇社建築会の話をし、山口文象先生は聞き役の側で、ぼくも参加していました。終わってから質疑などになったとき、山口先生の隣にぼくは居たのですが、先生が突然に立ち上がり「わたしは戦争に加担する仕事はまったくしたことがない、そのことはここに座っている小町君が一番よく知っている」といわれたのです。これには

わたしはちょっと啞然としたね。

伊達…えつ、それって口封じみたいですね(笑)。

小町…そのとおり、あとで廊下で竹村さんからいわれましたよ、「コマッチャン、口封じされたね」、ぼくは「しょうがないですね」って(笑)。まあ、突っ込んで話す機会があれば、「先生それは違いますよ」というてもよかったのですが、命の恩人でもあるし、みんなの前でそこまですりませんでした。工員宿舎であつても軍需工場付属の宿舎ですから、これだけ多くやれば戦争加担といわなくてなんだろうと思いますよ。ほかの設計事務所は当時は苦しかったはずですが、山口事務所はこんなにたくさんの方の仕事をしていたんですよ。本当は、ぼくも含めてさんげするべきと思っています。それをしないでどこか、戦争加担一切しなかったと公言するのは、どうもねえ。

山口先生は一面では、事情をよく知っているべくに対して警戒心もあつたようですね。だから口止めたのでしょうか。

伊達…この話は、山口先生はN A Uの近代日本建築運動史講座で1949年11月14日に東大で講演している記録がありますが、そのときですか。

小町…いや、もっと後のことと思うけど、建築研究団体連絡会が主催する建築運動史講座で、場所は全造船会館のことだったですね。伊達…それにしても山口先生にしてさえ、やはり戦中は変節だったのでしょうか。

小町…創宇社時代から若者を引っ張ってきた人ですが、どこか肝心のところで本筋から逃げる人があつたようで、そのあたりを竹村さんたちも感じていたようです。でもね、戦争が激しくなつてきて、ぼくは予科練に志願したくなつて、先生にそういつたら激怒されて、

「この戦争は負ける、赤紙がきたら仕方ないが、それまではここに居て建築の勉強をしている」と諭されました。そのとき一瞬、この人は非国民か?とも思いましたが、その一方でまたわたしは目の前が明るくなったような気がしました。それで今のぼくがあるのですから、先生は命の恩人とも言えます。

伊達…そうですか、戦争に負けると分かつていたのですね。もしかしたら海軍の上層部に親戚がいたからそれで知ったのかもしれないね。負けるなんてとてもでもない時代の発言ですから、それはすごいですね。内面と仕事で葛藤があつたのでしょうか。

5. 戦後の山口事務所とその解散

山口文象の戦争直後は、貧を極めたようだ。戦中は軍需工場の工員宿舎設計でそれなりに羽振りが良かったのに、戦争が終る直前からは仕事はほとんど無くなつてしまふ。

猪熊源一郎からわたしが聞いた話では、生活費の援助もしたし高松近代美術館と久が原教会の仕事を紹介したが、営業がへたくそだったという。

伝説的には、売り食いであるものもなくなつて最後の礼服モーターを着ていたとか、谷口吉郎がいくばくかを都合したとかの話がある。

戦争直後の一般建築界には占領軍の仕事が多くあつたし、1947年設立のN A U(新日本建築家集団)は労働組合関係の設計を多くしたから、当初にN A U中央委員をしていた山口はその仕事もできたはずだが、それらを一切手がけなかったのは、どのような考え

だったのか。

開設から15年の1949年2月に、ついに山口文象建築設計事務所を解散するのだが、その動機は経済事情だけではなく所員の左翼的活動で仕事をできなくなったと、私は山口文象から直接に聞いたことがあるが、実情はどうだったか。



伊達：山口家は小海に疎開しましたよね。これで事務所も休業ですか。

小町：1944年ごろからは、さすがに仕事も少なくなりました。戦争が激しくなつて、1945年4月から山口家は全員が長野県の小海に疎開しました。そのときに、ぼくは引越し荷物を担いで、何日も続けて山口家と小海とを汽車に乗って往復したものです。小海の疎開先は、小川光三さん（＊創宇社建築会メンバー）の知り合いの新津さんという方のところでした。のちに新津家の兄弟が山口文象事務所に入ったこともあります。

伊達：わたしは新津悦さんという方に、RIA時代に一緒だったことがあり、事務をしておられました。

小町：4、5、6月で荷物を運び終えて山口文象事務所は休止状態となり、7月からぼくは八王子に戻つて、家の仕事を手伝つていました。先生からは長野のほうで地下工場の仕事があるから待機しておれとのことでしたが、それもないままでした。地下工場つてまさに軍需工場でしょうね。3月10日の東京大空襲のときは山口家は燃えずに済みましたが、京橋の銀一ビルは燃えてしまいました。ところが終戦の2週間前の8月1日に八王子が空襲、小町家も被災してしばらくはトタンで作った小屋で、年末になって大工の親父が作

ったバラック暮らしでしたが、その間に祖父と母が空襲のとき逃げ回った過労で連続して他界しました。

伊達：それはお気の毒なことでした。

小町：1945年敗戦の翌月9月には仲四号館が進駐軍に接收され、両事務所ともなくなつてしまいました。山口家も小海から久が原に戻りました。ある日のこと、手紙が山口先生から来ました（＊1月27日付）。相模湖芸術村の仕事があるから戻つて来いとのこと、父親には言いにくかったけどぼくは喜んで46年1月からまた久が原に行きました。しかし、相模湖芸術村の主人公の猪熊弦一郎さんなど画家たちは東京に戻つてきてしまつて、芸術村のプロジェクトは立ち消えになつたらしく、その件の話は全くでないまになりました。

伊達：その話は、猪熊さんからわたしも聞きました。画家たちの疎開先の藤野町に計画し、山口文象の描いた図面を、神奈川県の内山岩太郎知事に提出して支援を求めたことがあるので、県庁にその図があるはずだとのお話でした。県庁の知り合いに探してもらいましたが見つかりませんでした。猪熊さんは戦後はいろいろと山口先生を支援したようですね。

小町：画家の中西利雄アトリエと早川巍一郎邸それに高松近代美術館は、猪熊さんの紹介のようです。

伊達：高松近代美術館は、猪熊さんの故郷の高松に建っていました。今は建替えられました。30年ほど前に見に行つたことがあります。この原図は珍しく一式そろつていて、RIAに保管されています。

小町：1948年の中ごろからはもうほとんど仕事がなくなつたの

で、田園調布の猪熊さんのアトリエにデッサンを習いに通っていました。昼間は石膏デッサン、夜はモデルさんを描いたりね。猪熊さんのところにいた行木さんという人が医学用の解剖図を描く仕事をしていた、その手伝いをしましたよ。

伊達…猪熊さんのデッサン受講料はいくらでしたか。

小町…いや、それが払った覚えがないから、山口先生が出してくれていたのかしら。

伊達…どうでしょう、山口先生が猪熊さんに生活支援してもらっていたくらいですから、払ってないでしょうねえ。猪熊さんから聞きました、仕事のない「文ちゃん」を見かねて紹介したのが、その故郷の高松近代美術館や地元の久が原教会の設計だったそうです。

これが戦後の山口文象事務所の仕事らしい仕事でしょう。

小町…そうです。高松はぼくも設計をしました、久が原教会は事務所解散の後で、ぼくは設計に関係していません。

伊達…仕事のない中で生活はどうしていたのですか。

小町…給料は遅配、山口家は売り食いのようでした。1947年だったか事務所解散近くの頃、勤め先を求めて土浦亀城さんの大崎のあのモダンデザインの自邸を見たくて飛び込み訪問しました。山口文象事務所のものだが家を見せてほしいという、見せてくださったて歓迎されたけど雇ってはいけなかったね(笑)。そこで村田政真さんを紹介されて訪問、土浦さんのつてなので歓迎されましたね。進駐軍の仕事をしていてかなり羽振りがよい様子でしたが、どうも雇ってもらう気にはなりませんでした。

伊達…その土浦邸は、今もありますよ。進駐軍の仕事を山口先生がしなかったのは、また軍にかかわることが嫌だったのでしょうか。

小町…戦後すぐの頃だったか山口邸に居た頃、前川國男さんがNHKで話を放送すると聞き、その放送を聴きたいが、山口先生の家のラジオで聞かせてくれと頼みづらく、考えた末に思い出したのが以前に家を設計したNHKに勤めている五味さんで、放送の日に内幸町のNHKに訪ねていったのです。幸いにも五味さんはいらして覚えてくれていて、それならどうぞと中に入れてくれ、ここで待っているようにと言われて廊下の椅子に座っていました。しばらくして隣に男が来て座ったけど、どうも前川さんらしいと思ったが、よく分からない。しばらくして五味さんがその男を呼びに来て、ぼくにも来いといわれていったのです。その男はやはり前川さんで、彼は放送室に入り、ぼくはガラスで隔てられたミキサールームに案内されました。座るとガラスの向こうには、前川さんがまっすぐにこちらを向いて座っているんです(笑)。こうして前川さんの放送を1対1の特等席で聴くことができましたね。終わってから「君は誰だね」と聞かれて、山口先生のところにいるもので云々と自己紹介しました。その後に何年もたって前川さんに再会したとき、「君は山口君のところの人だね」と言われました(笑)。

伊達…さすがに覚えていてくださったんですね。戦後に事務所を代々木に移しましたね。

小町…昭和21か22年で、あれは喜美子夫人の実家の千坂邸です。代々木駅から4、5分ほど歩いたところでした。ある日、山口先生からもうお前はこの家から出て独立して生活せよといわれて、久が原を出ることになったのです。

伊達…えっ、それは大変ですね、だってその頃は住宅も食べ物も極端に欠乏の時代ですよ、どうするんですか。

小町…そう、戦争直後のあの時代に住むところはないので、代々木の山口事務所の製図版の下で寝泊りしていました。そこに昭和21年の夏ごろだったか遠藤さんが復員してきて、ぼくと一緒に代々木事務所で生活するようになりました。そこでの仕事は、遠藤さんとぼくで東京都交通局の木造2階建ての大きな建物（*有楽町駅前の現・交通会館ビルの前身、高松近代美術館、立教大学チャペルコンペをやり、二見さんとぼくで中西利雄アトリエ、早川魏一郎アトリエはほとんどぼく一人で設計から現場までやりましたね。その間に遠藤さんは辞めて独立し、そのあとは二見さんも辞めて日建設計に移り（*二見氏は後に日建設計社長、ぼく一人になりました。そのころはもう何ヶ月も給料は遅配で、ぼくは食い扶持を稼ぐために代々木駅前の道端に小さな手作り机を出して、タバコのライター修理をやっていました。秋葉原でオイル、油芯、発火石などを仕入れてきて、通りがかりの人を相手の商売でね、1日に80円くらいの収入になりましたよ。

伊達…それでどれくらい食っていけるのですしたか。

小町…1日3食をやっとまかなうことができたね、駅前の食堂に通って顔なじみになって、閉店間際に行つて残り物をもらったりしてねえ。でも、そのうち90円くらい稼げるようになって、生活苦の同僚を助けたこともありますよ。代々木には共産党の本部があるので、その関係の人たちも通つていろいろなパンフレットをよくくれました。ね、それで次第にそちらの方面に興味がわいていったのです。伊達…山口文象事務所は1949年はじめに解散したのですね。それについて山口先生の話聞いたことがありますが、そのころ左がかった所員が多くて、ブルジョア住宅の設計とか久が原教会のよ

うな宗教建築はけしからんと言うので、仕事ができなくなったのが解散の原因だったそうです。そういうことがありましたか。

小町…いや、そんなことはまったくなかったなあ、だって久が原教会は解散後の先生の仕事でし、ブルジョア住宅の仕事なんて聞いたことも、けしからんなんて言ったこともないですよ。その少し前には先生と一緒に立教大学のチャペルのコンペを一生懸命にやったらいいですから、宗教建築だからけしからんなんて言いませんよ。昭和23年頃には給料も半年以上遅配していたので、年の暮頃に二見さんとわたし（浅見さんもいたかどうか）で先生のところに行き、仕事もないし給料のことも含めてこれからどうしたらよいか相談しましたよ。先生も経済的に行き詰まりの状態だったので、これをきっかけに解散の決心がついたのだと思いますね。事務所解散は経済的破綻が原因なのに、所員の左傾化のせいのようにすり替えたり、またそれを公言するのはひどいと思いますね。その左がかった所員はぼくのこのようですが、先生と喧嘩するどころか、先生はもう少しうちにいなさい、どこか就職先を探してやるとおっしゃって、実際に東京建築設計事務所を紹介してくださったのですからね。伊達…そうだったのですか。山口先生は自称左翼といいながら、平松さんのようにやろうと思えばできたのに、どうして労働組合関係の仕事をしないうで事務所の解散し、売り食いするほどの貧乏をしていたのでしょいか。

小町…うーん、それはねえ、先生は文化人には知人が多かったけれど、労働組合運動の中には知人がいなかったからでしょうかね。

伊達…よく分かりませんが、東京下町の浅草の出だけど、その後に有名建築家となり、山の手に住み丸の内に事務所を構えたと、人生

観も変わったのでしょいかねえ。それとも戦後の鬱屈状態がそうさせたのでしょうか。

小町…どうでしょうかね。

6. 建築家・平松義彦との20年

小町さんにとって、山口文象に次いで最も近くにいた建築家は平松義彦であった。

平松は東京美術学校を出て大林組に入り、創宇社建築会メンバーとなり、戦後に東京建築事務所を開設し、そこに山口文象の紹介で小町さんが入って20年間の師弟関係となる。



伊達…1949年3月に東京建築設計事務所就職され、これは後に平松建築事務所になり、小町さんはそこを辞めるまで平松さんと20年のお付き合いでしたね。

小町…山口文象事務所解散後に山口先生からよばれてね、東京建築設計事務所の平松さんに頼んだから行きなさいと紹介されました。

ここは平松義彦・経営、今泉善一・設計、道明栄次・経理の3人が共同経営者、みな創宇社建築会メンバーで山口先生に縁のある人たちですね。名目上の社長は木村得三郎といい、平松さんの美校の先輩であり元は大林組設計部長で上司であった人でした。事務所は銀在三越裏の雲鏡ビルにありました。

伊達…東京建築設計事務所での担当はどんな仕事ですか。

小町…東京設計事務所は後に平松建築設計事務所になるのですが、結局20年平松さんのもとで仕事をしましたね。はじめは千葉あた

りの小学校をたくさん設計していましたね。その当時、習志野市長をしていた白鳥儀三郎（*評論家）と平松さんが親しかったので、その関係で小学校を建てる設計でした。その材料は、千葉あたりにたくさんあった元日本軍の兵舎を解体したものでしたね。そこでの最初の初めての仕事が、映画監督の衣笠貞之助さんの茶室と女優の山田五十鈴さんの舞の稽古場を一緒に作ることでした。この頃の2人は監督と女優の関係を越えて、妻子ある衣笠さんと同棲していました。実は数奇屋や茶室の設計はやったことがないのですが、山口文象のところにいたからできるだろうと担当させられました。

伊達…山口先生はその方面は実に詳しい人でしたね。

小町…そう、ドイツでグロピウスにも茶室の写真を見せたとかね。

東京建築設計事務所の人たちも初めてのことでした。今のように参考図面もなく、どうすればよいか分からないので、その方面に強い石間工務店というのがありましてね、そこに仕事をさせる前提で、いろいろと図面を見せてもらって設計しました。しかし図面はできても数奇屋の納まりなどは分からないままでしたから、現場でペタラン棟梁の仕事を、覗き込むと怒るので盗み見して勉強しました。棟梁がやってくる朝7時より前に現場にいつて、仕口や納まりをスケッチしたりもしましたね。ある朝、はしこの上でスケッチしていると背後に鋭い視線を感じたので振り返ると、そこに棟梁がいて詰問されてしまったね、困ったけど仕方ないので正直に教えるを請うと、では家に来いといわれて、以後は親しくなつてね、よく家を訪ねて教えてもらいました（笑）。この茶室と舞台はできたのですが、山田五十鈴さんは京都で俳優の加藤嘉さんと親しくなつて東京の衣笠さ

んの家に来なくなつてしまひ(笑)、舞の稽古舞台は彼女の娘でその後女優になった嵯峨三智子さんがピアノの稽古場に使っていましたね。

伊達：東京建築設計事務所が平松建築設計事務所に変つたのはどうした事情でしょうか。

小町：東京建築設計事務所は、1950年頃にある仕事がよく行かなくて借財を負つてたゆめなくなり、経営陣の今泉、道明、木村の3人と所員4人が辞めて、平松さんひとりが借財を負つて池田彦坂、小町の3人だけスタッフを抱えて事務所を継続したのです。

伊達：平松さんは建築運動に深くかわり、また左翼系の関係オーナーの建築設計をたくさんなさつておられるそうですね。

小町：平松さんは1947年設立のNAU(新日本建築家集団)の事務局長をされており、東京建築設計事務所にはNAUの事務局も同居していて、事務局員の平良敬一さんと宮内嘉久さんも一緒にいました。所員とこの2人で計13人、狭かったですね。NAUを通じて労働組合関係にコネクションが強く、全国造船労働組合(千駄ヶ谷)、新日本文学会、八幡製鉄労働組合(海老原一郎、池辺陽、今泉善一担当)など、山口文象事務所と違つて忙しく設計の仕事をしていました。1950年前後から戦後政治の激動期に入り、日本共産党の幹部の公職追放、朝鮮戦争、公務員レッドパージなどの労働組合や民主的運動への弾圧は、NAUの運動にも大きく影響を与え、幹部の辞退や動揺などで、次第に衰退していきました。東京建築設計事務所はちょうどその縮小解散の時期で、平松もNAU事務局長を辞して、その事務局もよそに移りました。その後1959年に平松建築設計事務所と改名し、平松氏個人の色が濃くなり、

代々木病院など民医連の仕事、アカツキ印刷(※共産党機関紙工場)そして党本部など、共産党関係の仕事が多くなつてきます。

伊達：政治的に難しいこともあつたでしょうね。

小町：共産党と対極にある自民党の大物の河野一郎さんの家の設計をしたことがあります。平松さんの姪が河野謙三さんの夫人で、その縁で謙三さんの家や一郎さんの家を設計し、さらに河野家関係のいくつもの設計をすることになり、ぼくが担当しました。河野一郎さんはさすがに大物で、建築家の技術を買うのであつて思想を買うのではないからそれでよいのだと、おおようなものでした。



小町さんの平松建築設計事務所時代は、まさに戦後日本の激動期で建築運動も激動したのであつた。1947年設立のNAU(新日本建築家集団)の事務局が平松事務所にあつたし、平松の共産党の仕事とあわせて、小町さんも左翼活動としての戦後建築運動に入り込んだ。1952年のNAU活動停止後には、多くの運動体が生まれかつ離合集散する50〜60年代の激動の流れがあり、その裏には左翼運動の複雑な動きも絡んでいるようだ。「近代日本建築運動史」(松井昭光監修、本多昭一著 2003年 ドメス出版)には小町さんの名も登場する。小町さんはその渦中にいながら、1969年には平松の下を去つて八王子に戻つたのは、いったい何があつたのか、そのあたりの詳細な話はまた別の機会に譲ることとなつた。

7. 創宇社建築会の人々

小町さんの話のなかに、創宇社建築会のメンバーが山口文象をは

じめとして平松義彦、河裾逸美、竹村新太郎、梅田 穰、渡刈雄、道明栄次、今泉善一、小川光三、海老原一郎、山口栄一、野口巖など数多く登場する。

創宇社建築会は1930年に事実上は活動を停止したのだが、この人たちはその後も連帯を持っていたことになる。

メンバーたちのその後の人生は実に多彩なものであるようで、それをいくつか誰か研究対象にすれば日本建築近代史の厚みが増すはずである。



伊達：1923年に山口文象を中心に設立した創宇社建築会は、1930年に会としての活動は事実上は終わりますが、その会員たちはその後どのようなふうになったのか興味を持っています。平松義彦さんについては伺いましたので、次は今泉善一さんのことを教えてください。

この方は創宇社建築会の活動の後には戦前の共産党で非合法活動に入り、1937年に党の資金稼ぎの銀行襲撃事件計画犯として逮捕されて服役しますね。特高警察の謀略で、「スパイM」の操作として有名な事件ですね。

小町：東京建築設計事務所では今泉善一さんの下で設計の仕事をしました。実はこの今泉さんには、1943年に丸の内の山口文象事務所を訪ねてきたことがあって、ぼくはそのときに始めて会っています。例の事件で服役して、出てきたばかりの坊主頭でした。ちょうど山口先生が不在で、後日の来訪を約束して帰っていききました。ぼくはその事件のことも今泉さんも、そのときは知りませんでした。遠藤さんに今泉さんという人が来たことをいうと、「あ、善ちゃん出てきたのか」と、ちょっと変な感じでした。今泉さんは後日に訪

ねてきて、山口先生も待っていて応接間で2時間くらい話して帰っていききました。それから何ヶ月かたつてから、所員の誰かが今泉さんが前川事務所に入ったよといっているのを聞きました。そうか、今泉さんが来たのは山口文象事務所に雇って欲しかったけど先生は断ったんだと、そのとき分かりました。山口文象事務所の軍需工場関係ばかりの仕事では、受け入れにくかったのですね。しかし前川さんは受け入れた、そこが山口先生と前川さんのふところの違いですね。それは前川さんの出自のよさによる鷹揚さとも関係があるでしょう。当時前川事務所にいた道明さんが、今泉さんを入れるように頼んだようです。今泉さんはデザインも技術も感覚も非常によい人でした。服役中は時間がたつぷりあったので、しっかりと建築の勉強をしたそうです。

伊達：今泉さんは後に㈱日本不燃都市工学研究所を主宰して、1950年代からの日本全国の都市で当時の復興事業であった防火建築帯の設計をしていますね。実はわたしのRIAで始めての仕事がそれで合ったが故に後に都市計画に転向するのですが、仕事では今泉さんはいわば大先輩にあたります。

小町：そうですね、東京建築設計事務所を辞めてから、東大生産技術研究所の池辺陽さんが主宰していた財団法人建設工学研究会に加わり、改組して株式会社不燃建築研究所にしたのです。そこにわたしの弟の治男が入りました。全国各地の駅前や中心商店街に、連続建築として今もありますよ。池辺さんの家と隣り合わせに自宅を一緒に作って住んでいましたね。（＊その後に人づてに伺うと、今泉夫人は転居して高齢者施設に暮らしておられるとのこと）

伊達：山口文象事務所の最初の所員だった河裾さんは、小町さんが

入られた1942年にはもういないですね。

小町：そう、仕事が達者でセンスの良い人と聞いていましたが、いつやめられたのかわりません。

伊達：河堀さんには、わたしはもう30年くらい前に大阪で何度か会いました。我孫子に住んでおられて、医院の仕事が得意で自宅で仕事をしておられ、大阪のRIAが協力していました。角取さんから聞いた話ですが、山口文象事務所の洋風建築は河堀さん、和風建築は角取さんという分担だったそうですね。

小町：山口先生の弟の山口栄一さんのパースはうまくいったねえ、芸術作品だったね。

伊達：そうそう、わたしもRIAで建築やっていた頃の大昔に描いてもらったことありましたが、いわゆるパース屋のパースじゃないので官庁仕事には向きませんでしたね。わたしはあの芸術的なパースを大好きでした。

小町：彼は陸軍中尉で、戦争で中隊を率いて南方のどこの島だったかで戦うんですよ。でもね、やさしい人なんで死んで死ぬことはなくて、突撃となると彼の隊はいつも一番最後に出るんですよって

(笑)、だから彼の隊だけは生還者が多かったそうですね。東京美術学校の建築の出ですが、絵の勉強で解剖学も習っていたので、戦場のジャングルで盲腸炎になった兵の手術をした話も聞きました。ジャングルを逃げ回って結局は米軍捕虜になるのですが、英語ができるので待遇もよかつたとか。横須賀港に帰還したときには、先生の使いでばくが迎えに行きましたよ。彼はばくが久が原を出た後の離れに住み、そのうちに猪熊さんの世話で、そのアトリエに絵を描きに来ていた女性と結婚しましたね。

伊達：梅田さんは通信省で山口文象の同僚でしたが、通信省を減法騒動でクビになってから東京都に入ったんですね。

小町：そう、彼が戦中の防火改修の仕事をくれたのです。建築関係の課長だったか、結構偉くなつて一つの部屋を持っていて、ばくは仕事の報告などでよく訪ねて行きました。文ちゃんも元氣かね、なんて威張っていましたよ。この仕事を一緒にしたのが渡刈さんでした。

伊達：野口巖さんはどうですか。

小町：佐藤秀工務店というのがありますね。それを始めた佐藤秀三という人は白鳳社という設計施工会社の設計にいて腕の立つ人で、独立して佐藤秀工務店を作りました。その白鳳社に野口さんはいて、佐藤秀工務店に移籍するのです。そして最も腕の立つ佐藤秀工務店らしい和風設計を継いでいった人が野口さんです。



このインタビュのきっかけは、わたしの知人の建築家・横内啓さんから、小町さんは彼の母方の祖母の弟、つまり大叔父にあたりと聞いて、小町さんにまた会いたいと言ったら、インタビュの機会を八王子市内の番匠設計オフィスでセッティングくださったのである。

第1回 2008年5月17日16時〜18時
第2回 2008年6月19日15時〜17時

第1回インタビュには、横内さんとともに坂本一郎さん、相羽満里子さん、鈴木理恵さんが同席し、第2回目はわたし一人で伺った。1942年に小町さんが山口文象と出会うきっかけを作った坂本一雄氏は、小町さんの長姉の夫で、坂本一郎さんの父、横内啓さんの母方の祖父にあたる。

小町さんは今81歳、長生きして作品を作りつづける建築家は多いが、小町さんもその一人である。インタビュの前に、日野駅ちかくにある完成間近の薬王寺本堂を見てきた。小町さん最近作である。まさに81歳現役の仕事をみて、わたしもまだやるべきことがあると思っ
た。

小町さんの作品は、「数寄屋の実践 番匠設計の30年」(1995年9月 建築思潮研究所)に詳しく、そこに自分史も書いておられる。

この記録は、
小町さんの手
による数回の
校正を経てい
るが（2008

年8月11日
校了、文責は
筆者の伊達美
徳にある。(2

11日 伊達 008年8月

美德)

●山口文象先生からの手紙

[illegible][illegible]

●資料1 山口文象建築設計事務所 所員動向 (開所～解散迄)

2008年8月1日 小町記

西暦	昭和	山口文象	河崎逸典	角取広司	山口栄一	浅見静雄	渡辺 雄	遠藤正巳	和田富朗	棚原 博	矢内 弘	久保富夫	吉原幸雄	小町和義	岡田敏雄	寺田 弘	山口和男	二見俊一	古橋利通	小川	仕事、勤務
1933	8																				小泉八雲記念館 藤川秀造アトリエ 仲田銅七アトリエ
1934	9																				日本歯科医専付属病院 山田智三郎邸、安井曾太郎アトリエ、岡田敏、関口部茶房
1935	10																				矢代邸 宇奈月延寿寺旅館
1936	11																				青雲荘、番町集合住宅、 前田青屯アトリエ、 上代たの邸
1937	12																				
1938	13																				
1939	14																				築地小塚邸改装、 日本歯科志賀島開ニユッ 在取製作所付属病院
1940	15			兵																	久が原自邸、林美子邸 日本電力黒部第2発電所 大連市公会堂コンペ
1941	16																				京橋第一ビルに事務所 秋田精錬所見工場員宿舍、 横浜海軍中隊邸
1942	17																				小町が久が原に住込み 上代邸、 光海軍工廠一連の工場員宿舍 富士熱行機工場員宿舍
1943	18																				五味邸、日本文化会館コンペ、 熱海酒井邸 住友金属工場宿舍
1944	19																				神田地区防火改修
1945	20			兵	兵			兵	兵		兵	兵				兵					4～6月山口家が小瀬に疎開。 7～12月小町は八王子で待機。 3月空襲で京橋の第一ビル罹災
1946	21																				1月小町は再び久が原へ住込み
1947	22																				5月NAU結成 事務所を代々木千代田に移す 高松近代美術館、東京駅交通局舎
1948	23																				立教大学チャペルコンペ応募 中西利雄アトリエ 早川謙一郎アトリエ
1949	24																				2月山口文象建築設計事務所解散
		R I A			R I A			独 立						東 京 設 計					日 建 設 計		

(注：小町入所後におおま正隆だが、それ以前は再調査の必要あり)

目 ブルーノ・タウト日記の証言

1. タウトが山口の結婚式に招待されて悩む

●建築家ブルーノ・タウトの日本訪問

日本が戦争に入ろうかとしていた1933年、ナチスのドイツを逃れて一人の建築家がやってきた。その4年間の滞在で日本の建築文化に足跡を残した。その足跡のほんの一部だが、山口文象（1902〜1978年）も関わっている。

ブルーノ・タウト（1880〜1938年）は、20世紀初めのドイツ表現派の建築家として、また、戦間期のワイマル共和国時代の政策であったジードルングと言われる中産階級向けの集合住宅の秀作を設計を多くしている。今もそれらは住まわれていて、一部は世界遺産登録になっていて有名である。

タウトは一時、ソ連で仕事をしたことからナチスに睨まれて左翼の烙印を押され、逮捕リストにのったことを、あるルートからひそかに知った。その手を逃れて1933年にシベリア鉄道、ウラジオストック経由で日本にやってきた。そのときちょうど招請を受けてい



ブルーノ・タウト

た「日本インターナショナル建築会」を頼ったのである。そして日本経由でアメリカに亡命するつもりが失敗して、1936年にトルコに去って行った。2年後、トルコで客死したのであった。

日本でのタウトは工芸デザインに携わるしかなくて、建築家としてはかなり不幸な人生だったが、日本の建築や文化について多くの著作を出して、日本の建築家や文化人に新しい刺激を与えたのであった。

タウトの日本での動静は、その詳しい日記で知ることができる。

●タウトを悩ませた山口文象の結婚式

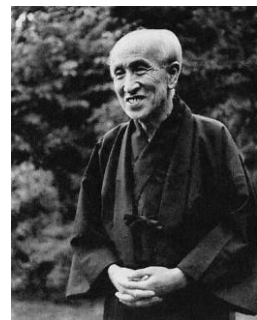
タウトが日本にいたころ、山口文象は新進建築家としてデビューし、名をあげつつあった。1930年渡欧の前は建築運動の活動家として知られ、1932年にドイツから戻ってきていきなり東京医科歯科専門学校附属病院（1934元寇のモダニズム建築で建築家として世に出た）。

日本でのタウトは、山口文象と何回か出会っていることは、タウトの日本日記で分るのだが、その出会いはどこか妙な具合もある。最初はどこであったのか分らないが、1933年11月初めに、タウトは山口から画家の前田青邨邸への招待状を受け取った。

11月4日に日記。

「建築家の山口（蚊象）氏からも、岳父の前田青邨邸へ来てほしいという招きがあった。山口（旧姓は岡村）氏はすぐれた建築家だ、某氏のひどいあくどさを知らしてくれる（この男は正真正銘のやくざ者だ）。山口氏は以前グロピウスに就いたことがある。」

前田はその当時に山口文象が婚約していた前田千代子の父である。12月に蒲田に前田青邨邸を山口と共に訪れて、その純日本家屋の寒さ、静謐さ、美しさに驚き感銘した記述がある。



前田青邨

タウトは後に展覧会を観に行つて、日本画家としての前田を高く評価している。

そして1934年1月16日に、山口から結婚式への招待状を受け取つて、「思いがけないことだ。日本では初めてである。」と驚く。

1月21日の日記。結婚式は1月26日に迫っている。

「山口(蚊象)氏の結婚式のことである。いろいろ思い煩う。下村氏は、京都一東京の往復切符を私達に提供しようと言ってくれる、『面白そうだから構わずに東京へ行つていらつしやい、しかしまたここへ戻つてこなくてはいけませんよ』。私がこの結婚式に出席したくない理由は、山口氏と建築家一氏とは互に競争相手なので、どちらにも格別に親密な関係を持ちたくないからだ。結局下村氏も私の意見に同意し、またあとから上野君もこれに賛成した。」

下村氏とは、大阪の大丸百貨店の経営者で、上野君とは日本インターナショナル建築界の上野伊三郎であり、どちらもタウトを支援した人である。

3月21日のタウト日記。

「夜、建築家山口(蚊象)夫妻を訪ねる(同氏は、私が結婚の贈り

物や祝電を取りやめたことについては何も触れなかった、それでもお互に格別気まずい思いをしないで済んだ。・・・」
というわけでタウトは悩んだ末に、山口の結婚式にはかかわらなかったのであった。

さて、タウトの日記に具体的なことは書いてないが、どのようなことで悩んだのだろうか。

●山口文象と石本喜久治の確執

タウト日記の「某氏」や「I氏」という仮名になっているのは、元は実名が書いてあるのを、訳者の篠田英雄がそうしたのは、篠田自身がタウト日記の解説に書いている。タウト日記のドイツ語版を読んだ杉野和彦氏によると、この「某氏」と「I氏」は、「石本」とあるようだ。

建築家・石本喜久治(1894~1963年)と山口は犬猿の仲であった。そしてタウトはインターナショナル建築会の石本の世話になっていた。間にはさまったタウトが悩んだのは無理もない。

山口は1923年の関東大震災の余燼のなかで創宇社建築会を立ち上げて、盛んに建築運動をしていた。通信省営繕課での図面画きで実務の経験を積むとともに、この運動で建築会には少しは知られた。そして1926年から石本の下で設計の仕事をしていた。朝日新聞社や白木屋デパートなどである。ここで設計の実務経験をしっかりと積んだのである。

石本事務所には、ほかに二人の創宇社建築会メンバーもいて、共に仕事と運動をやっていた。しかし石本は創宇社建築会の活動を嫌

って、脱退を指示したことから、山口は石本と喧嘩をして、1929年に石本事務所を去った。他の2人もやめた。

そして翌年渡欧してベルリンのW・グロピウスのもとで働き、32年に帰国した。すぐに東京医科歯科専門学校附属病院の設計をはじめた。これが山口の建築家としての出世作となる。

1934年4月に歯科医専はできるのだが、その過程で石本が、山口はアカだとの怪文書を関係者に配って、仕事を妨害するという事件があった。当時の建築許可機関の警視庁へも送って、許可が停滞したという。タウトが知ったこの時期は、まだホットな事件であった。

この資料は無いが、わたしはこの件について、その頃に山口文象の下にいた二人（山口栄一、河堀逸美）から直接に聞いたことがあるから、このようなことがあったことはまちがいないだろうし、建築界では知られた事件だったらしい。

タウト日記には、この二人の確執を具体的には書いてないが、それを山口や他の建築家などから聞いて知っていたらしい。

石本は、タウトを招聘した日本インタナショナル建築会の幹部だから、タウトの世話をいろいろと焼いていた。タウトは二人の確執を知って、出席するべきか否か

困り果てて、支援者たちに相談して、結局は1934年1月の結婚式には出席しなかった。

もっとも、タウトの石本への印象は、あまりよくない様子が日記にある。石本の建築作品に



石本喜久治

について、例えば白木屋百貨店を見て「いかもの」との烙印を押している。

1975年にタウト日記が公刊されたときは、石本はこの世にいなかったが、もしも読んだら、あれほど世話してやったのにと、怒ったことだろう。タウト日記には、ほかにも読んで怒った人は大勢いると思われる記述がいっぱい出てくるのが面白い。

このタウトを悩ました山口の結婚は、3年後に破局を迎えたのであった。ゴシップはこうして終わった。

2. タウトと山口が競合した建築計画

●タウトが有島生馬依頼のトルコ大使館の設計受注に失敗

タウトは日本滞在中に結局のところ、日本では建築を設計する機会には恵まれなかった。来日以来、仙台で工芸指導所や蒲田の陶磁器会社でデザイン指導、あるいはあちこちで講演をつづけてながら糊口をしのいでいた。建築の設計の仕事をしたいのだが、機会に恵まれない。

何回か設計を頼まれて、図面や透視図を書いてはいるのだが、どれも実ることなく、時には日本の建築家にさらわれた。建たない設計には金を払わない日本の習慣の前では、いつもタダ働きだった。できたのは僅かに熱海の日向氏別荘の地下室のインテリアのみであった。

そのタダ働きのひとつに、画家の有島生馬（1882〜1974年）から依頼された建築計画があった。1934年7月11日に、

タウトは画家の有島生馬と出会っている。その日の日記。

「有島氏は現在の家屋と地続きの所有地に建築をしたい、ついでには私の日本における『建築の皮きり』としてその設計にあたってほしいという。

有島氏は好個の紳士だ。」

そして7月29日の日記。

「有島氏にトルコ大使館の建築平面図2葉を届けておいたが、今日は方角を考慮して少し変更を加えた見取り図を描き、これに設計の謝礼をも含めた費用見積もりを添えた。有島氏とトルコ大使館との交渉がどんな結果になるのかは、今のところまったく不明である。有島氏は、もしこれが不調に終わったら、例の土地へ外国人向きの宿泊所を建てたいと言っている。有島氏は私に好意を寄せているようだ（私も同氏の人柄が好きである）、まさか私を見捨てる様なことはあるまい。」

どうやら既にプランを提出済みだが、更に変更案を追加して届けたい。これがだめでも「外国人向きの宿泊所」の仕事が来ると期待している。

だが1934年10月7日のタウト日記に、有島に見捨てられたことが書いてある。

「数か月前に有島（生馬）氏の依頼で、トルコ大使館の設計をしたことがある。これについていつか同氏に手紙を出したら、今日その返事を受け取った。有島氏の言い分は、あの件はトルコ大使館が処理すべき事柄で、自分には全く係りがないというのである。井上



有島生馬

氏はこういういざこざは、日本ではありがちなことで、しばしば不快な事態を惹き起こすものだという。だがその手紙は、なにも補償を要求したものでなくて、ただ仕事の価値をありのままに述べたに過ぎないのである。」

井上氏とは、有島を紹介した井上房一郎で、後にタウトは高崎の井上工房に雇われる。タウト支援者の一人である。

ドイツ流の理知的な言葉と日本流の曖昧な解釈とのあいだで行き違いがあつたらしく、タウトはこの設計受注には失敗した。そうなつたら、「外国人向きの宿泊所」の設計受注へとフォローすればよいのに、怒ってしまったらしい。

この年のクリスマスに、タウトは有島からクリスマスプレントを受け取って、設計料の9分の1くらいの値段のものと、また憤慨している。

タウト側のこの件の記述は以上であるが、山口文象の側から見ると、この続きがある。実は、このタウトが受注失敗した有島生馬のプロジェクトは、山口文象が「外国人向きの宿泊所」を完成させた。もちろん、これはわたしの推理であるが、ほぼ間違いない。

●山口文象がタウトの失敗した有島のプロジェクトを実施

有島がタウトに設計を依頼した土地は、山口文象の設計で1936年8月に建った「番町集合住宅」の場所らしい。そこは東京の麹町区六番町である。有島生馬の兄の有島武郎の住宅であつたが、武郎の死後は生馬が管理していた。

現在そこには、出版業の文芸春秋社の社屋が建っているが、1945年の空襲で焼けるまでは、「番町集合住宅」が建っていた。そし

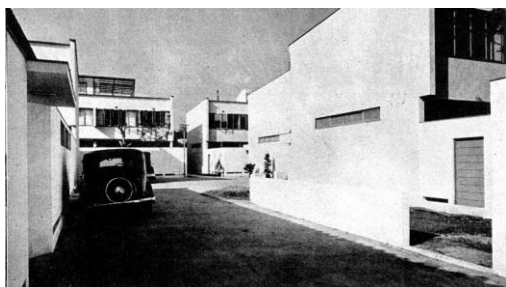
てそれはタウトに有島が語ったように、「外国人向けの宿泊所」つまり外国人向けの賃貸アパートメントである。

有島は、タウトと縁が切れた後か、あるいはそれよりも前か、それを山口に設計を依頼したのだった。タウトはまた日本建築家に横取りされたのだった。

有島と山口との出会いは分らないが、山口には画家の知り合いが大勢いて、安井曾太郎や菊池一雄などいくつもアトリエ設計をしているから、その線であつたのだろう。

当時の新聞（1936年だが新聞名や日付は不明、山口文象建築事務所（資料）に、「集合住宅（ジードルング）を有島氏が計画」との見出しで、透視図つきの記事がある。

「故有島武郎氏が生前の作品中に或は書簡文中に「番町の家」としてのせられ有名だった麹町区下六番町10の邸宅はその後一時文芸春秋社と平凡社が仮社屋に借りていたことがあつたが最近では七百坪の名庭は荒れるにまかせペンペン草やあざみの花が咲いていたが、今度令弟有島生馬氏が同所に純独逸風の集合住宅「ジードルング番町の家」を立てることにになり思い出の邸は沢山の鷹職が入って取り壊している。「ジードルング番町の家」は先日本紙に掲載した「町田



番町集合住宅

外人街」と同様に在京外人、中流以上の人々に、ホテルより手軽に在来のアパートより一層機能的に、家一軒借りるより文化的な住み家と与へる目的で、青年建築家として水道橋の東京歯科医専その他進歩的なデザインで有名な山口蚊象氏がデザインに当り、ドイツのウォールグロツピユース氏流のテイビカルなジードルングの設計を降り目下建築許可の申請中で八月末日まで竣工の予定である。」

ウォールグロツピユースとは、山口文象がドイツで師事したWalter Gropiusのことであらう。

そこに有島生馬の談も載っている。「住宅地としてはこの辺は東京一等地ですし、欧州を旅行してかねがね本場のジードルングにあこがれていたもので、一念発起いま山口君と大童になっていいものにしようと頭をひねっています。地代を支払つてはこの仕事は引き合いません。とにかくスーツケース一つ提げてくれればすぐ住めるものに、しかも外装は飽くまで瀟洒たるものにします。」

1936年11月号の雑誌「国際建築」に番町集合住宅の写真と山口の解説文が載っている。解説文をこう締めくくる。

「この「番町の家」が本当の意味におけるジードルングであるかどうかは別にして、この計画を実施された有島先生の英断に敬意を表し、また若輩の私に設計工事に関する一切を一任して下さったことを心から感謝を述べたいと思ふ。」

皮肉なもので、その当時ならばジードルング（集合住宅）の設計では世界中でこの人の右に出る者はいないであろうタウトに接触していたのに、その起用にならなかったのは、日本の集合住宅のために実に惜しかった。一方では、山口文象がそのジードルングの「番



ブルーノ・タウトによる集合住宅
ベルリン・ブリッツ・ジードルング



日本歯科医科専門学校附属病院

たことを知ったのだろうか。時期的にはタウトが日本を出たのは1936年10月15日だったから、知ったとしてもおかしくないが、そのような記述は日記に登場しない。

では、タウトが同じ土地に別の計画で関わったことを、山口は知っていたのだろうか。

「山口文象建築作品個展」と銘打って、その自信作を展示したのは1934年6月13日から17日まで、銀座資生堂ギャラリーでのことであった。展示したのは、日本歯科医科専門学校附属病院、小泉八雲記念館、アパートメント試作、アトリエⅠ、アトリエⅡ、協同組合学校、関口邸茶席、モデルルームの8つの建築作品である。多分、図面と写真、一部は模型もあったかもしれない。

1934年6月15日のタウト日記。

町集合住宅」を設計して、更に名を挙げることができたのは、山口の弟子の端くれのわたしとしては、よかったです。山口文象が「本当の意味におけるジードルングであるかどうかは別にして」と言っているのは、金持ち外国人向けの賃貸集合住宅が、労働者層を対象とする社会政策としてのドイツのジードルングと同じとは言い難いと思っただけであらう。

ドイツで本物のジードルングを見てきたし、グロピウスの下でジードルング設計にも携わった山口文象だから言えることだろう。

●タウトが山口文象建築作品個展を観て酷評

ところで、タウトはその土地に山口文象がジードルングを設計し

「建築家山口蚊象氏の作品展覧会を観る（同氏はドイツでグロピウスに許にいたことがある）。作品のうちでは茶室がいちばんすぐれている、——山口氏はここでまさに純粹の日本人に復ったと言っている。その他のものは機能を強調しているにも拘らずいかにも硬い、まるでコルセットをはめている印象だ。とにかくコルビュジエ模倣は、日本では到底永続するものではない。」



個展ポスター

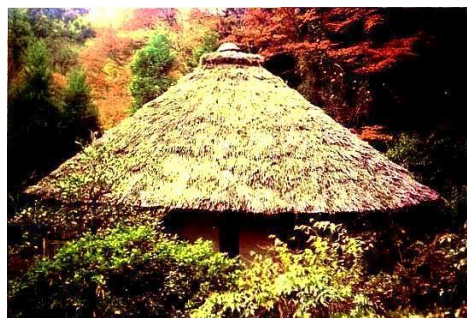
タウトにももちろん招待状を出したに違いないが、やってきタウトは酷評である。唯一のほめている関口邸茶席は、コテコテの和風建築であった。展示作品のうち唯一の和風デザインである。

日本歯科医科専門学校は、山口が帰国してすぐの設計で、彼の出世作ともいふべき、時代の流行最先端を行くモダンデザイン建築である。

小泉八雲記念館は、松江市の武家屋敷街にある旧八雲住居跡に建つ。これはモダンデザインというよりは新古典主義的な影をもつ洋館であった。ワイマールにあるゲーテ記念館を模したと言われるが、本当かどうかわからない。現在あるゲーテ「ガルテンハウス」のことならば、ずいぶん違う。

そのほかのアパートメント試作、アトリエⅠ、アトリエⅡ、協同組合学校は、展覧会用の試作だったのだろう。

ここで気になるのは、「アパートメント試作」なるものである。このころ山口がとりかかっていた可能性があるアパートメントならば、「番町集合住宅」



関口邸茶席 右端は山口文象（1972年）

と「青雲荘アパートメント」の二つがある。

もしも展示作品が番町集合住宅ならば、有島は山口にアパートメント設計を依頼しながら、いっぽうではこの後の7月11日にタウトに会った時に、同じ土地にトルコ大使館設計依頼という、二股をかけたことになる。そして、トルコ大使館が不調になったら「外国人向きの宿泊所」にするといい、それを山口文象に依頼してあると正直に言ったのかもしれない。だからタウトは有島にキヤンセルされても、フオローしなかったであろう。あるいは山口とは言われなかったが、怒ってしまつてフオローしなかったのかもしれない。

このあたりは類推して、勝手に面白がるしかない。

山口としては作品展で、ドイツから持って帰ったモダンデザインを、タウトに褒めてもらいたかったであろうに、それらはけなされて、和風の関口邸茶席のみが高く評価されたのだった。岳父の前田青邨の絵のように高い評価をされなかったことは、彼にとっては皮肉なことだった。

しかし、タウトがあちこちを見て発している、極めつけの「いかもの」（ドイツ語ではキツチュ）と言われなかったのだけは、とりあえず幸いであつたか。

3. タウトが山口にジードルング論自筆原稿を贈る

●タウトが設計助手として山口のスタッフ河裾逸美を借りる

タウトは1934年8月から、高崎にすっかり腰を落ちつけて、井上工房で工芸デザインをしている。時々東京の行つて講演したり、建築家たちと付き合ひ、展覧会などに出かけている。

1934年10月26日のタウト日記。

「午前、美術研究所に所長の矢代幸雄教授を訪ねる。矢代教授はヨーロッパ特にドイツの芸術に精通し、ドイツの学者とも親交があり、先ごろはまたベルリンの日本展覧会を主宰された。立派な人柄の芸術学者である。それから同氏の友人で建築家の山口（蚊象）、谷口（吉郎）と、バーナード・リーチ氏の迎賓展覧会を見た。作品はいずれも決して悪い出来ではない。同行の建築家たちはリーチ氏のものをあまり好まない様子であった。つまり作風が日本化し過ぎているというのである。」

有島生馬のプロジェクトで、タウトは山口に仕事を取られたが、それを互いに知っていたか知らないのか分らないが、山口とタウトの間にはなにも起きなかつたらしい。

高崎では、井上工房で数々の工芸品や家具のデザインをして試作を続けるが、製作現場とタウトの意図とのすれ違いにイライラしている様子が日記にある。それでも、井上の経営する軽井沢の店で、タウトデザイン工芸品を売り出しつつある。時には日本住宅の設計を頼まれて、設計図を書いている。彼のもとには3人の助手がいたらしい。

1934年12月10日のタウト日記。

「私の助手諸君のうちの一人（儘田氏）は少林山、二人（水原、河裾）の両氏は高崎で、全試作品（実際に製作されたものばかりでなく、図面だけのものも含めて）のカタログを、私の指示に従って編集している。」

この3人の助手の内、河裾とは、河裾逸美のことであると訳者註にある。河裾逸美（1904〜？）

は、山口文象が所属していた通信省官繕課の同僚であった。彼も山口等が1923年関東大震災の余燼の中ではじめた「創宇社建築会」の活動に、1927年から参加している。

山口文象が1931年に帰国後、すぐにとりかかった東京歯科医科専門学校附属病院の設計にあたったのは山口の仕事の最初の相棒、つまり山口文象建築事務所最初の所員である。1937年にまで在籍していたから、山口の最盛期のスタッフであった。

河裾が何時からタウトの助手であったのかわからないが、山口がタウトに貸したのだろうか。10月に一緒にバーナード・リーチ展



創宇社建築会メンバー（1930年 第8回展覧会）
左から河裾、竹村、廣木、小川、渡辺、山口、海老原、野口

を観に行ったとき、タウトから建築図面を書く助手がほしいと相談されたのだろうか。

そこで気になったので、ほかにタウト関連の本を探したら、「ブルーノ・タウトへの旅」(鈴木久雄 2002 新樹社)にこれに関する記述を見つけた。

その頃、井上工房はタウトのデザインによる製品を数多くつくるようになり、軽井沢に「ミラテス」という名の販売店舗をもっていたが、更に東京の銀座の交詢社ビル向かいのビルの1階にも店を出すことになった。

「店の詳細設計は、助手の河裾逸美が実測をつくって、タウトの指示で作図をした。河裾は元通信省経理局営繕課の雇員だった建築のよく分る人物で、タウトの信頼を得ていた。」(「ブルーノ・タウトへの旅」150p)

なるほど、店舗のインテリア設計のできる建築設計助手をタウトは欲していて、それを山口文象には話したのだろう。

そうして銀座に「ミラテスが開店したのは1935年2月12日だった。ところが、1935年1月19日のタウト日記に、また河裾が登場する。いろいろと井上工房での愚痴を書いた後に、このようにある。

「河裾(逸美)氏は、つい近頃井上工房を辞めてしまった。この人は、自分だけでも貧しいのに、僅かな俸給を勉強中の弟さんの為に割いていた。河裾氏の月給は四十五円だし、水原氏のは恐らく三十円にも達しないだろう。河裾氏は文字通り飢えんばかりの生活をしていた。昼の食事でも歯が痛いからと言っては、いつも十銭の弁当で済ませるという風であった。」

水原とは、最後までタウトの助手であった水原徳言で、日本での唯一のタウトの弟子である。

ということ、河裾はタウトのもとを去った。安月給で雇われていたが、ミラテスの仕事も終わってクビになったのかもしれない。山口文象建築事務所にもまた戻って、更に2年ばかり在籍した。山口には洋風と和風の両方の系譜の建築があるが、洋風が河裾の担当だった。河裾は戦後は大阪に住んで、建築設計をやっていた。わたしは何度か大阪の安孫子にある自宅を訪ねて、話を聴いたことがあるが、タウトのことを聴いたことはない。

●山口文象資料にあるタウトの自筆原稿のこと

山口文象がドイツにいた1931〜32年には、タウトはベルリンのシャルロッテンブルグ工科大学の教授だったが、山口文象の滞欧手帳にはタウトの名は登場しないから、出会ったかどうかかわらない。

山口文象とタウトの出会いに関しては、ここまでの話は日本でのタウト日記だけが資料であるが、山口側にも唯一のタウトとの接触を示す強力な資料がある。それは、タウトから贈られたという自筆原稿のカーボンコピーである。

RIA(榎アール・アイ・エー)に保管してある山口文象資料の中に、『Fiedlungs-Memoiren』と題する、手書き原稿45頁のカーボンコピーがある。原稿末尾に「Hayama, 30.8.33 B.T.」とある。

別の紙が表紙に添えてあり、そこに山口文象の筆跡で「ブルーノ・タウトから贈られる」と記してある。つまりこの自筆の葉山と日付とB.Tはブルーノ・タウトのサインである。本文と筆跡が異なる

から、本文は秘書のエリカ・ヴィッティヒによるのだろう。タウトの原稿はほとんどが口述であり、エリカが筆記していたそうである。

1933年8月30日の日付をもとに、タウト日記にそれを探したら、1933年9月2日に「論文『ジードルング覚書』(45頁)を脱稿」、訳者の註で『ジードルング覚書 Siedlungs-Memoiren』とあるからこれだろう。この原稿をいつ山口文象が贈られたのか分らないが、12月に前田青邨邸であったときだろうか。

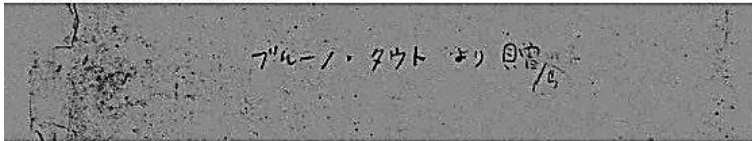
この「Siedlungs-Memoiren」は「ジードルング覚書」として篠田英雄訳『タウト 日本の建築』(春秋社1950年)に収録されている。ただしこれはのちの改稿原稿である。

山口文象の持っている自筆原稿が初稿だろうが、その翻訳版は公開されていない。だが、山口の翻訳になるタイプ原稿が山口文象資料に保管されている。その日付は1948年8月30日とあるから、山口はタウトからもらったまま持っていたが、戦後ヒマな時に翻訳したのである。多分、どこかの雑誌に発表するつもりだったのだろう。

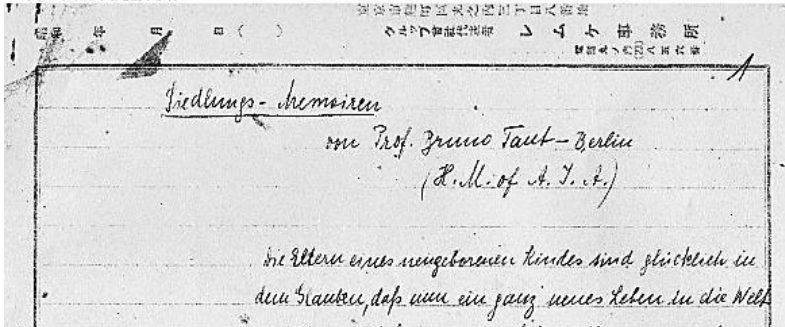
ただしこの訳文はかなりの悪文だから、雑誌に売りこんでも掲載されなかったのだろう。全訳文をここに掲載しておいた。

<https://sites.google.com/site/dateyg/1946bunnotaut-siedlungs>

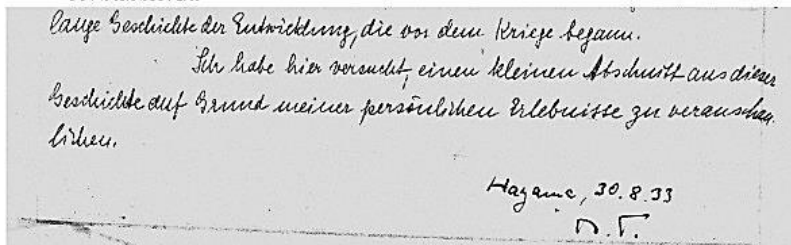
タウトの原稿に添えられている山口文象の筆跡



タウトの原稿の書き出し部分



タウトの現行の文末部分



●タウト送別会で山口は青邨の色紙を贈る

タウトは日本を目的地としてやってきたのではなく、日本経由でアメリカに行くつもりだった。しかし、水原徳言によると、秘書のエリカ・ヴィティヒのビザを取ることができなくて、あきらめたそう

だ。
タウトは故国に妻子をおき、秘書のエリカとの間にできた子もおき、エリカと二人でナチスからの逃避行の先が日本だったのだ。エリカには、もうひとりの子もいたが置いてきた。火宅のカップルであつた。

しかし本職の建築設計の仕事はないし、工芸デザインも順調ではないし、日本の気候が体に合わなくて病気がちだったから、なんとかして日本を出たかった。日記をドイツの親戚や知人に送るとともに、ヨーロッパ方面の知人への連絡を欠かさなかった。

そして1936年9月30日に、朗報がトルコのイスタンブールからやってきた。ケマル・アタチュルク大統領による新生トルコ共和国の芸術アカデミー教授に招かれたのだ。タウトは大喜びですぐにも出立することになる。

1936年10月10日のタウト日記には送別会の記事がある。

「井上氏の肝煎で、同氏のほか吉田（鉄郎）、蔵田（周忠）、斎藤（寅郎）の諸氏が幹事役となつて、盛大な送別会を催してくれた。会場に当てた赤坂幸楽の二階には、五十人ばかりの知友が集まつた。（中略）山口（蚊象）氏からは岳父（前田青邨氏）の色紙を頂戴した。

私への餞けの言葉は、いずれも賛辞ばかりで、美しい屍に捧げる頒

辞でも聞いているようだ。そこで私は、どうか私に対する非難のお言葉も頂戴したいものです、と言つた。」

山口文象はタウトとの最初の出会ひも山口青邨がらみだったが、最後の別れもまたそうであつた。石本喜久治を間にしてむしろ困らせたと言つてもよいが、設計作業で困つてゐるタウトに事務所スタッフの河裾を貸したので、帳消しになつたかもしれない。結局のところ建築家としての深い付き合いはなかつたのだろう。

そして、タウトが設計した可能性もあつた「番町集合住宅」を、山口が設計したという因縁はある。

ブルーノ・タウトは多くの日本の建築家たちと交流したが、結局のところ、タウトが力量を高く評価した日本人建築家は、吉田鉄郎だけだつたようだ。吉田は当時は逋信省所属の建築家で、東京駅前の東京中央郵便局（現在は改築してKITTE）の設計者として有名である。山口文象は吉田に逋信省時代に会つてゐる。

また建築設計作品らしいものは、インテリアデザインの日向利兵衛別荘地下室だけと言つてよいだろう。幸いにも今は保存公開されている。

タウトの日本の滞在の日々は、総じて気の毒なことだったが、日本の建築界としてはその聲咳に接したことでもよかったと言えよう。しかし彼の建築の腕前を発揮させることができなかったのは、実に惜しいことだつた。

第5章 建築家山口文象の軌跡

建築家山口文象とRIAの出発

太平洋戦争後の日本がまだ疲弊中の1950年、久が原教会という清新なデザインの建築が世に出た。設計は山口文象（1902〜1978）、世に知らしめたのは『新建築』誌編集長の三輪正弘（1924〜2013、東工大1949卒）である。

山口は1932年に1年半の欧州遊学から帰国してすぐに日本歯科医学専門学校付属医院（1934）でデビューした。個人名のアトリエ事務所にて徒弟約10人を従え、モダニズムの話題作を次々に発表、黒部第二発電所設計と関連土木施設デザイン（1938）で建築家として確固たる地位を築いた。太平洋戦争から約10年間のブランクの後、戦後再デビュー作が久が原教会であった。

山口はRIA（Research Institute of Architecture）構想を三輪に話す。ドイツで師事した建築家ワルター・グロピウスがアメリカで結成した設計共同体TAC（The Architects Collaborative）にならい、建築家の共同設計集団をつくるというのである。その意図と作品に惹かれた三輪は、植田一豊（1923〜2007、東工大1948卒）をひきいれ、1952年に3人で「RIAグループ」と称

Ⅰ. 山口文象戦後最大の遺産

「RIA」の出発と展開

戦前は有名建築家だった山口文象が戦後に起こした「RIA」は、個人名を排した点で同世代の他の有名建築家たちとは一線を画し、戦後民主主義の嵐の海に再びの船出をしたのだが……。

建築家というと普通は個人の職能をさすだろうが、この建築雑誌編集者の依頼には、集団組織RIAの職能をという。

そこで、なんの資本的バックもない徒手空拳の建築家の集団RIAが、新たな職能像を求めて苦闘を重ねた1950〜70年代迄の軌跡を書いたのが小論である。

なお、RIAの正式名称は「RIA建築総合研究所」、現在は改称して「株式会社アール・アイ・エー」である。

して、新制作派協会展覧会に金24万円の正札つき12坪の実物小住宅「ローコストハウス」を出品した。彼らのその後を暗示させる社会性のある作品は話題となった。

1953年、「RIA建築総合研究所」、通称リアのRIAが出版し、翌年に近藤正一（1930）、早大1954卒が参加する。RIAは、建築家山口文象を頂点とするアトリエではなく、仕事も経営もフラットな建築家共同体として建築設計を行おうと企図した。資本的背景もパトロンもなく、戦後民主主義の嵐の中の理念の産物であった。RIA出版には山口文象の構想、三輪の実現仕掛け、植田の理論、近藤の実務推進の4人組図式がある。

住宅のRIA（リア）時代

RIAは1970年頃を境にその前を「住宅のリア」、後を「都市再開発のオールアイエー」という。結成から1960年代後半までは、戸建て住宅設計の件数が圧倒的に多いのは、戦後の住宅不足の社会要請に対応しているが、なんの資本的バックがなくても受注できる仕事だったからでもある。それが1970年代からは都市再開発系の仕事に入れ替わる（下図参照）。

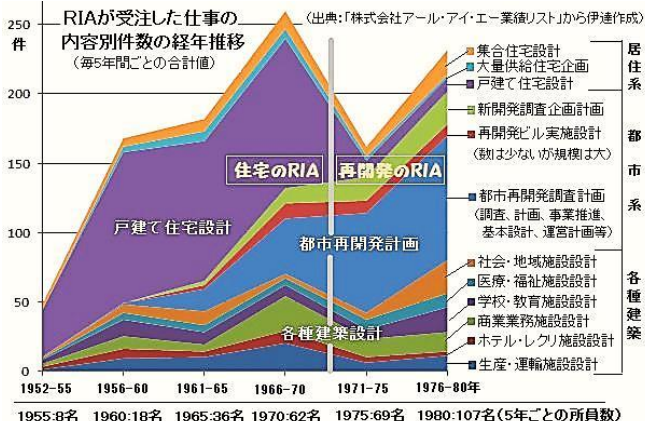
住宅のRIA時代は、東京の住宅設計を主として、各個人をベースの共同事業体ファームの色彩が濃い。その前半期は4人がそれぞれ演技をしつつ絶妙な呼吸でひとつの建築にまとめあげる力量をもち、4人のうちひとりが担当チーフとなり、後から入った所員を率いる体制で設計を進める。後半期は所員数が増えて大阪や名古屋にも支所をもつと、共同設計体テーゼ継続のために独特の方法と理論を發明していく。

たとえば内部では所員

のコンペによる相互審査で担当者を決定し、グリッドプラン、ゾーンプラン、オーダー論などで共同設計の共通言語と手法を編み出す。外向きには依頼主に生活像を提案し論争啓発説得してこちらの意図する設計に持ち込む。毎年20戸もの戸建て住宅設計をもとに分析研究した居住計画論やデザイン論を、RIAレポートと称して建築ジャーナリズムに発信する。図面や写真とともに、共同内部での設計理論や方法、ときには設計にかかる金勘定までさらけ出す。

こうして住宅設計を通じて建築家という職能の内実を見せ、社会でのあり方も問いかけて、この時期のRIAは建築作家であり、啓蒙思想家であり社会批評家という職能でさえあった。

もちろん住宅だけではなく、神奈川大学（1953）、朝鮮大学校（1959）、新制作座文化センター（1964）などの建築の話題を發表している。



だが1960年代半ば頃になると、戸建て小住宅が建築作品なる地位を得る時代は終わる。一般建築設計が多くなるし、所員も増えるし、小住宅の設計料では食えないことも明白になる。

そこで、これまでの住宅設計の蓄積を共有情報化したコンピュータ検索システムによる効率的住宅設計方式を開発して、これをもとに低廉で良質な庶民住宅設計を大量供給するカウンセリング方式を編み出した(1968)。建築家が町医者のごとき職能で庶民に対応したのは、実にその心根やよしだった。だが、これは住宅市場に参入してきた大資本が席卷して、すぐにR I A の出る幕はなくなり、60年代の終わりとともに「住宅のリア時代」も終わった。

次の「再開発のオールアイエー」への展望が開き、所員も仕事も多くなった1965年、新たな組織体制を模索して、所員全員参加の選挙制による運営システムを開始した。あくまで初志の共同体テーズを掲げるこの内部制度を、その後も修正を重ねつつ株式会社制度とすり合わせていった。当時のR I A の流行語は「ゲマインシャフトからゲゼルシャフトへ」であった。

都市のR I A (オールアイエー) 時代

1969年、新大阪駅近くに3隻の空母のような巨大な新大阪セーニシティが現れた。大阪R I A が総力をあげて企画、計画、事業推進、設計監理まで7年間かけた防災建築街区造成事業である。現今の話題の防災集団移転を思わせる約360軒もの零細繊維製品卸問屋群が、大阪駅前からここに新天地を求めた大規模集団移転の再開発であった。

これを率いたのが1963年にR I A に転職してきた藤田邦昭(1927~2001、福井工専1947卒)である。彼は大阪の日本住宅公団職員として、街の地権者と共同して店舗併存の市街地住宅ビルをつくる担当をしていたが、「市民と行政の懸け橋になるプロダクションをつくることが念願」(藤田1962)であった。植田が1959年から大阪R I A を率いて、市街地住宅ビルの設計をしたことで意気投合し、その念願をR I A に企図した。

R I A の再開発の嚆矢は、1958年からの大阪立売堀防火建築帯(1962)であり、大阪市内や近郊都市の防災建築街区造成事業をいくつも並行して進めていたが、藤田の参加でドライブがかかった。藤田は精力的に制度や手法の開発、各地を回って再開発掘り起し、人材育成、地域・行政・人材連携を進める。やがて東京R I A も太田市(1970)や武蔵野市(1972)などで防災建築街区を手掛け、住宅から都市再開発へ転換する。

1960年頃から、都市には戦後復興期から高度成長期に向って建設の時代がやってきた。建築界に都市再開発が先端的な話題となり、建築家や研究者が壮大な見映えだけの都市再開発計画案を発表する。だが都市再開発現場のR I A では、夜は再開発の主人公の商店主や住民とひざづめ談議のカウンセラー、昼は行政や諸専門家との調整役となり、共同建築プログラムを構築していく地道な仕事である。だからR I A が語るのは「窓口からの都市論」(植田1964)であった。

そのころは建築設計を出自とする者ばかりだが、現場の藤田と理論の植田を2軸として多様な再開発人材が育っていく。都市計画、建築企画、地元対応、諸分野間調整、更には事業マネージメントな

ど、都市再開発の各専門的あるいは横断的職能を、オンザジョブで身につけていった。RIAは一般建築設計も多いし再開発も結局は建築設計だから、設計者＝建築家という在来型職能像は健在だが、都市再開発の仕事はそれを相対化する広い視野をもたらし、新たな建築家職能像を獲得した。1969年には都市再開発法ができて、この分野の職能確立が見えてきた。初期には川下の建築設計料で食っていた再開発だが、川上のコンサル仕事にもフィーを出すコンセンサスと制度が生れた。RIA内部にも外部にも都市プランナーや再開発コーディネーターなる職能の確立が見えてきた70年代から明確に「都市のアールアイエー」時代である。

創立者の山口文象は、1960年代半ばから病に悩みつつも、建築家として矜持と模索の中で珠玉の作品を残して1978年に他界した。1970年代初めに植田、三輪、藤田はそれぞれの道へとRIAを離れ、近藤がリーダーになる。

RIAのもうひとつの重要な展開は、積極的な地方進出である。再開発事業は端緒から完成まで5年以上かかるから、行政担当者は異動してもRIA担当者は変わらず最後まで対応を続けて地元の信頼を得ると、やがて全国各地から声がかかり広がっていく。RIAは建築設計から都市計画まで広がる多様な柔軟な職能集団として、1980年代からは大都市3支社を拠点に東北から沖縄の地方都市に歩を進め、地域に根ざした独自のまちづくりを展開していく。

注：この論考は、『建築雑誌』（2013年11月号 日本建築学会発行）の、特集『建築家が問われるとき…自己規定の軌跡と現在』に、「RIAが選んだ建築家共同体組織とその職能展開の軌跡」と題して寄稿した。



三輪正弘、石関、上平三和子、(坂根弟)、北島道生、田中、福井稔、伊達、近藤正一、山家啓助、鳥飼勢三
北住金吾、水口禎、坂根良朗、石村勇二、山澤千代子、富永六郎
植田一豊、(池辺陽)、山口栄一、山口文象、稲地一晃、樋口金治
初期RIAメンバー 1962年山口邸でのRIA10周年記念パーティにて カッコ内はRIA外

山口文象評伝

アール・アイ・エー創設の建築家 山口文象の生涯

序走の時代

20世紀がはじまるとほぼ同時に、山口文象1902年〜1978年は76年間にわたる生涯を、東京の浅草に出発しました。大工棟梁の実父と鳶職の養父に育てられた少年時代は、江戸からの職人の旧世界に包みこまれており、そのまわりには華やかな浅草文化、さらにその外を日本の勃興期の高揚してゆくエネルギーに満ちた新世界がとりまいていました。

山口文象の生涯は、その旧世界の殻を破って新世界への脱出を図り続ける道程でした。

小学校を出て府立一中をめざすのですが、大工の子は大工にと職工徒弟学校に入れられて、最初の脱出には失敗します。ここでひととおりの建築技能を学んで、清水組に就職して建設現場で社会に歩みたのが1918年、16歳でした。

ところが2年ほどで突然に、勤め先の名古屋を出走して東京に戻ったのです。建築家になりたい一心での脱出行です。大正デモクラシーの空気と、彼の向学心による上昇志向が、多感な少年の胸に建築家への夢を育てたのでしょう。

1920年は世界的な恐慌時で職さがしは難航しましたが、やっ

と就職した先が通信省経理局営繕課の製図工でした。以後の山口的人生コースを見ると、偶然にも旧世界からの脱出口をここに確実に発見したのです。

通信営繕は、山口にとつての建築家学校でした。周辺にたくさんいる帝大出の新進エリート建築家たちが教師です。山田守に引き立てられ、分離派建築会のメンバーに啓発され、岩本禄に兄事し、そ

なえてはいる才能が芽を出していきます。

学友ともいべき製図工の仲間とともに、昼は帝大出の高等官建築家に学び、夜や休日は絵画や外国語を塾や夜学に、時にはもぐり大学生ともなつて学び、建築家への夢に気負いたっていました。

才能があり努力もした山口の能力は次第に認められ、上昇志向をもつて臆することなく動き回る山口文象のまわりには上昇気流が舞いはじめます。

離陸の時代

1923年の関東大震災を契機に、山口文象の身边はあわただしく新展開を始めます。この年、エリート集団の「分離派建築会」の同人に迎えられて、その得意と緊張とそして気負いは大変なものでした。ついに旧世界を脱して新世界がほほえみかけてきたのです。

その余勢をかつたように、震災の煙がまだおさまらぬ中で、製図工仲間を率いて「創宇社建築会」を興したのです。エリートたちの分離派建築会にならつて、たびたびの展覧会を開催して建築設計の習作を発表するだけでなく、建築競技設計に応募したり、有名建築家たちを招いて講演会を催して山口も自説を述べるなど、建築界の話題となつて行きます。震災後に雨後のたけのこのごとく数多くの

飛翔の時代

そこで彼は、ヨーロッパ游学という実に壮烈なテイクオフを履行したのでした。それは仕事を通じて山口文象の才能を見込んだ日本電力の石井頼一郎技師長のうしろだてで、黒部川のダム関係の技術調査の仕事にかこつけたようです。

1930年末から約1年半の滞欧期間中に、カールスルーエ大学とで、朝日新聞社屋や白木屋百貨店などの数多くの設計にたずさわ

り、めきめきと腕をあげていきます。

この頃の創宇社建築会活動を通じての建築、土木、美術、文学そして左翼活動などの幅広い交流から、山口の上昇志向に追い風が吹きはじめ、この後の建築家であり運動家の山口文象を支えることとなるのです。山口が建築家として出発をした時期ですが、左翼的な思想も持ちはじめ、石本の下を離れて独自の道を模索しはじめます。

震災復興のため、内務省に帝都復興院が設けられると、上司の山田守がその橋梁課に移りました。その山田のひきで山口も嘱託技師となり、東京や横浜の数多くの復興橋梁のデザインに取り組みしました。隅田川に今もかかる清洲橋がその代表的なものです。

さらに日本電力の嘱託技師ともなつて富山県の河川の発電用ダムのデザインにもかかわり、土木デザインに積極的に関わった建築家として先駆者のひとりといえます。

芸術集団が発生しましたが、彼らと交流して山口の世界は広がりました。



01



02



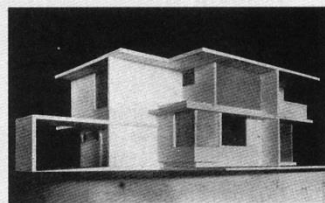
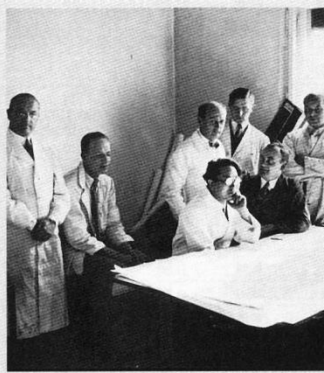
03



04



05



06

01 清洲橋 (1924), 02 聖橋・山田守設計・山口文象画(1924), 03 丘上の記念塔・帝都復興案展出品作(1924), 04 創宇社建築会第1回展覧会ポスター・山口文象制作(1923), 06 創宇社建築会同人・右から3番目が山口(1930), 06 住宅・第5回創宇社展出品(1927), 07 グロピウスアトリエにて・前列中央が山口文象(1931)

で黒部ダム関連の調査をし、当時ベルリンにいた左翼系日本人たちとの交流をし、ヨーロッパ各地をめぐる古典建築を見て回りました。

最大の収穫は、その当時の世界建築界のリーダーだったワルター・グロピウスのアトリエで働いたことです。世界で最も先進的なモダンデザインを習得したのです。

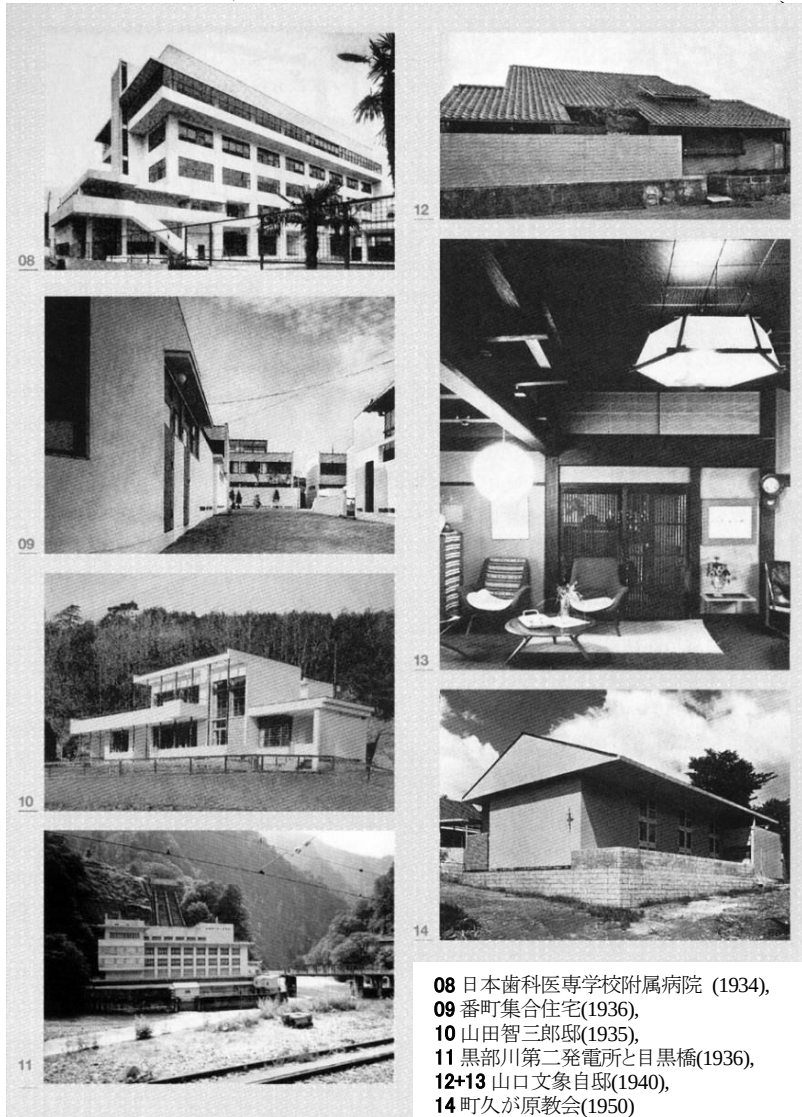
1932年夏に帰国した山口文象は、かつての建築運動家から当時の言葉で「新興建築家」に衣替えして、ヨーロッパ最新デザインを持ち込んで、爆発的に設計活動をはじめます。

日本歯科医科専門学校を出発として、番町集合住宅、山田智三郎邸、黒部第2発電所、黒部小屋平らダム等の作品で、

「国際建築様式」に通曉したスター建築家となっていくます。東京下町を脱出して山の手に暮らし、丸の内の赤レンガ街に「山

口建築事務所」を設けて、ついに浅草の旧世界からの脱出に成功したのでした。

そのモダンデザインは白い箱の外観のプロポーションの美しさばかりが話題になるのですが、山口はプランのできていない建築は、



08 日本歯科医科専門学校附属病院 (1934),
09 番町集合住宅(1936),
10 山田智三郎邸(1935),
11 黒部川第二発電所と目黒橋(1936),
12+13 山口文象自邸(1940),
14 町久が原教会(1950)

建築ではない」とよく言っており、自分の建築作品をささえているのは新しいプランニングであり、考え抜かれたディテールであり、そこに盛りこまれた先進的な手法を評価してほしかったようです。

山口にはこれらのいわば表の顔としてのモダンデザイン系の譜のほかに、裏の顔とも言うべき数寄屋から民家へと流れてゆく和風デザインの系譜があります。その出自からして身についた技となっている日本建築は、彼にとつては旧世界のもですが、二つの系譜が同時期に並行しています。

山口文象の三十歳代の1930年代は、やりたいことをほぼやりつくしてしまった感があるほどに、質的にも量的にも充実した時期でした。

しかし不幸にも1941年に太平洋戦争が始まると、仕事は縁戚関係で得た軍需工場関係の仕事が主となり、反戦左翼を自任する山口には苦いことだったようです。

戦争が終わると仕事はなくなってしまう。せっかく自分をのせた新世界ではあたりまえの変わり身と泳ぎのうまさを、生まれながら身にしみついている旧世界の律義さが邪魔をして、学閥も門閥もない山口の戦中戦後約10年間はブランクの時期でした。

止揚の時代

1945年に戦争が終わり、山口事務所のスタッフが軍隊から復員してきても仕事はなくて、とうとう1949年には解散に追いこまれました。

ここで山口は、建築家から運動家に戻って再出発の二つの道を探るのです。そのひとつは、1950年に画家の猪熊弦一郎らと図つ

て、美術団体の新制作協会に丹下健三や池辺陽などをひきこんで建築部を起こします。美術、工芸デザイン、建築等を横に結んで、運動家山口文象として外に広がる世界でしょう。

もうひとつは、その翌年に若い建築家たちと共同する「RIAB建築総合研究所」を結成したことです。RIABは手も口も達者な植田一豊、三輪正弘、近藤正一たちの若者を縦に結んで率いて、建築家山口文象として内にひろがる世界でしょう。

RIAB (Research Institute of Architecture) は、かつての山口の師・グロピウスが、亡命先のアメリカで組織した建築家共同体のTAC (The Architects Collaborative) に啓発されて結成されたのです。共同体としての建築設計組織を標榜して、戦後デモクラシーの産物と言えます。その故に建築運動としての動きも持ち、共同設計による建築デザインを模索し、生活像を提案する住宅でモダンリビング運動を展開していきます。

山口文象にとつて1950年代は運動家と建築家との止揚をとげて、1930年代と並ぶピークの時期でした。

やがてグループは組織として動きを持ち、株式会社となつていくと、組織自体として自律的に成長をとげるのは自然のことです。1960年代に入ると、高度成長社会の中で建築運動は行きづまりをみせ、設計組織として体制がととのえられてきます。

山口文象は、手練の建築作家としての自己、育ててきた組織体の長としての立場、さらにこの頃からはじまる病魔との間で、次の相剋がはじまりました。

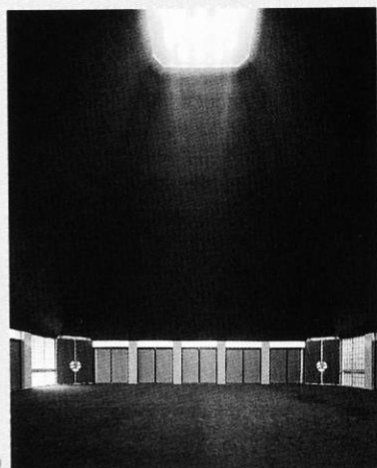
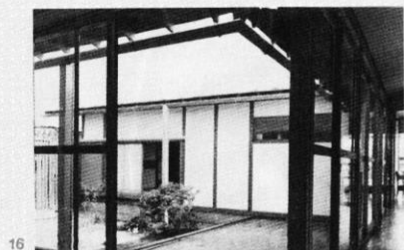
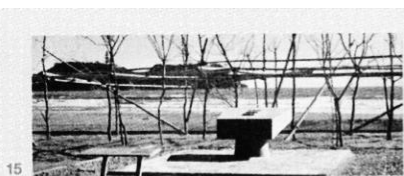
そこで、病に小康をえた1970年代から、自分はやはり作家としてものをつくらう、いわば1940年代への回帰をはかろうと、

再試動をはじめたころの初夏のある日、二十世紀とともに歩んだ76年の鼓動は卒然として止んだのでした。

山口文象

の戦後最大の作品「RIA」は、近藤正一に率いられて「(株)アー・アイ・エル・アイ・エー」に成長していきます。

(注：小論は、雑誌『新建築・別冊』2013年11月号「まちをつくるプロセス・RIAの手法」に掲載した。)



15 ニエ・アルの碑(1954), 16 土田邸(1953), 17 神奈川大学本館(1958)と3号館(1955), 18 新制作座文化センター(1964), 19+20 是の字寺(1971), 21 町田市立博物館(1973), 22 家具のデザイン 小椅子(1954-60), テーブル(1961)

目 山口文象年表

(注) 2015年現在☆印は消滅★印は現存確認の建築

1902 明35

・1月10日東京・浅草に出生(戸籍名は瀧蔵、後に文三、蚊象、文象と3度も改名。祖父・源右衛門は宮大工、父・山口勝平は清水組大工棟梁、母いち、4男3女の次男)

日英同盟、日露戦争(1904)、三井本館、横浜正金銀行(1904)、開東閣(1908)、赤坂離宮(1909)、帝国劇場(1911)

1910 8歳

・岡村家(母方叔母)と養子縁組、1930年まで岡村姓

1915 13歳

・東京高等工業学校附属職工徒弟学校木工科入学(現在の東京工業大学付属科学技術高校)

東京駅(1914)第1次世界大戦(1914)、戦争景気、大正デモクラシー、三越百貨店

1918 16歳

・職工徒弟学校卒業、

・清水組(現在の清水建設)の定夫となり建設現場勤務

1919年 17歳

・清水組の名古屋に転勤、工場や銀行の建設現場勤務

大日本労働総同盟友愛会、都市計画法、市街地建築物法、ワイマールバウハウス開校

1920年大正9 18歳

・建築家になりたくて清水組を退職

・中條精一郎の紹介で通信省経理局営繕課製図工に就職、通信省の建築家のもとで仲間と共に建築修業

・岩元禄(通信省の建築家)に兄事して☆青山電信局★京都西陣電話局等に携わる

第1回メーデー、分離派建築会結成、日本工業倶楽部、1921年 19歳

・大阪に転勤、梅田穰(後に山口と共に「創宇社建築会」創立のメンバー)と共に大阪通信局舎建設現場監理

・京都奈良の古社寺や茶室建築を調査研究

1922年 20歳

・天下茶屋に下宿

・東京に帰任、技手に昇格

・大阪府庁舎設計競技に応募落選

1923年 大12 21歳

・山田守(通信省の建築家)に認められて釧路郵便局等の設計

・東京美校で伊東忠太の日本建築史を聴講

・分離派建築会(日本の建築運動団体の嚆矢)会員

・関東大震災直後に通信省製図工仲間と「創宇社建築会」を旗揚げ(創立メンバーは、岡村(山口蚊象、小川光三、専従栄記、広木亀吉の5名、後に海老原一郎、今泉善一、河裾逸美、竹村新太郎、道明栄次、渡刈雄、野口巖、平松義彦、広瀬初夫、古川末雄、山口栄一が参加。山口が渡刈中の1931年に官吏減俸騒動に巻き込まれたメンバーが逮捕され、これで事実上活動停止)

・創宇社第1回展…劇場計画案を出展

帝国ホテル、創宇社建築会建築会結成、日本郵船ビル、丸ビル

1924年 22歳

・内務省帝都復興局(関東大震災後の復興のために後藤新平がつくった組織)の橋梁課嘱託技師、山田守のもとで★清洲橋★浜離宮南門橋★豊海橋☆数寄屋橋☆八重洲橋等のデザインに関する

・田中豊(復興局の橋梁土木技術者)の紹介で日本電力の嘱託技師、石井頼一郎(土木技術者、後に関東学院大学教授)のもとで日本電力庄川水系のダム等のデザインに関する

・創宇社第2回展…丘上記念塔、K氏住宅、劇場を出展

・分離派第4回展…住宅、大連中央停車場案、松田邸計画案

自由学園明日館、帝国ホテル

・著述『創作する心』(分離派作品集第三)

1925年 23歳

同潤会設立 築地小劇場、アインシュタイン塔

・創宇社第3回展…商店、音楽堂、住宅2案、橋、舞台装置模型

・大連駅本屋設計競技選外佳作2席弟・儀栄(一)名義で応募

・著述『創宇社第三回展覧会と我々の態度』(建築思潮9月号)

治安維持法、普通選挙法、同潤会設立 お茶の水文化アパート、

歌舞伎座、東京中央電信局、八重洲橋

1926年 昭1 24歳

・仲田定之助、中原実ら美術家芸術運動団体「単位三科」旗揚げ

・竹中工務店設計技師となり、石本喜久治(当時のスター建築家)のも

とで☆東京朝日新聞社屋の設計助手

・分離派第5回展…市民会館、教寄屋橋、壁掛け

・創宇社第4回展…面と線、或る建築草案、建築形態の究極?

・デッソウバウハウス、国際連盟会館コンペ、紫烟荘、浜離宮南門橋、

1927年 25歳

・片岡・石本建築事務所に移籍して主任技師、日本橋白木屋百貨店

(大阪在住の石本のスケッチ指示をもとに山口が創宇社仲間と設計実務

作業。戦災後に坂倉順三設計で大改装。その後東急百貨店となっていたが

1999年廃業2001年取壊)、三宅やす子邸、朝日新聞社社員ク

ラブ、山叶商会等の設計

・大井瀧王子に住み、創宇社建築会仲間のアジト

・分離派第6回展…工業地帯に建つアパートメント計画、楯石意匠、

綴帳意匠・劇場の三科展(フアラフオートン)

・創宇社第5回展…商店A+2山叶商会、商店B、住宅(三宅やす子

邸、橋畔に建つ休憩所)

・著述『橋を語る』(工芸時代9月号)

金融恐慌、インターナショナル建築会、同潤会青山アパート、

大隈講堂、蔵前橋、聖橋

1928年 26歳

・著述『Internationale Neue Baukunst』(ヒルベルザイマー著の翻訳
アトリエ9月号)

☆白木屋百貨店第1期(石本事務所)

・山崎商店『建築画報』1928・1月号…個人としての処女作か)

CIA M、グロピウスがバウハウスを辞めベルリンへ、聴竹居、神

奈川県庁舎、清洲橋、首相官邸、

1929年 27歳

・この頃から創宇社活動が左傾化。

・安井曾太郎紹介で能勢某嬢と婚約(滞欧中に破談)

・石本事務所を退職(石本喜久治は創宇社建築会の左傾化する運動を嫌つ

て事務所員の山口、野口、渡刈に注意したが3人は反発して退職、以後山

口石本の確執は日本歯科医専の設計でも起きる)

・仲田勝之助邸

・創宇社第6回展(出展せず)

・創宇社第7回展…離れの書斎、家具セット

・第1回建築思潮講演会で講演…『合理主義反省の要望』

・『新建築における唯物史観』(アトリエ9月号)

☆朝日新聞社員クラブ ☆山叶商会(いずれも石本で担当)

金解禁、不況、『蟹工船』、厩橋、駒形橋、豊海橋、三井本館

1930 昭5 28歳

・新興建築家連盟結成に参加

・来日した建築家リチャード・ノイトラに会い欧州事情を聞く

・12月朝鮮、満州、シベリア經由渡欧(渡欧目的はグロピウスに弟子

入りと、日本電力の黒部小屋ノ平ダム設計に関する調査、山口談話では白

ロシアで左翼国際機関と連絡のためとも)

・名古屋市庁舎コンペ応募落選

・創宇社建築会でウクライナハリコフ劇場コンペ応募落選

・創宇社第8回展(紡績工場の女工寄宿舎の提案を出展、創宇社建築会最

後の展覧会)

・第2回建築思潮講演会で講演『新興建築家の実践とは』(国際建築

12月号)

・座談会『勤労者の住宅について』

経済恐慌、ロンドン軍縮条約、帝都復興記念式典、大塚女子アパー

トメント

1931年 29歳

- ・白ロシアを経由してヨーロッパへ
- ・ベルリンのワルター・グロピウス（当時バウハウスを退いてベルリンで設計活動中、後にアメリカに亡命し設計組織TACを結成）アトリエメンバーになる
- ・ベルリン反帝グループ（藤森成吉、勝本清一郎、佐野碩、三枝博音、山田智三郎、千田是也、八代幸雄、中原実など）の一員として活動
- ・プロレタリア建築展覧会に出品参加
- ・カールスルーエ工科大学で黒部小屋平ダムの水理調査研究
- ★菊池一雄アトリエ
- ・グロピウスアトリエでの仕事…ソビエトパレスコンペ、プレスラウジードルング、AEG職工住宅、カールスルーエジードルングコンペ

十五年戦争はじまる、官吏減法騒動、アイシーオール、白木屋百貨店、綿業会館、森五商店、東京中央郵便局、東京帝室博物館コンペ、サヴォイ邸、エンパイアステートビル、ソビエトパレスコンペ

1932年 30歳

- ・ドレゼン、プラハ、ウィーン、フイレンチエ、ミラノ、ミュンヘン、パリ（ル・コルビジエアトリエを訪問）の旅を経てマルセイユから靖国丸にて7月横浜港に帰着（山口談話では、ナチを逃れて亡命するグロピウスと一緒にベルリンから南へ脱出行、イギリスに渡りしばらく滞在とあるが、渡欧手帳に記載がないし時期がグロピウス側の1934年とする諸記録と合わない）

☆日本歯科医専の設計を始める（麹町富士見町の有島生馬の貸家が事務所、川裾逸美が最初の所員）

- ・河原アトリエ
- ・著述『欧州建築夜話』（建築科学11月号）

満州国、5.15事件、日本青年建築家連盟、建築科学研究会、

デザイン、銀座和光ビル（渡部仁）

1933年 31歳

- ・日本滞在中のブルーノ・タウトを前田青邨（日本画家。その娘と山口文象は前年に婚約して34年結婚。有名建築家と画家令嬢との結婚で話

題となるも4年後に離婚）の家に案内

- ☆小泉八雲記念館（ドイツワイマルゲーテ記念館を模したという。現在は和風に建替え）
- ・藤川勇三アトリエ
- ・仲田菊代アトリエ
- ・著述『1933年を回顧する』（新建築12月号）

国際連盟脱退、ヒットラー政権、ニューディール、新興建築家連盟、

1934年 32歳

- ・日本画家前田青邨の娘と結婚（ブルーノのタウトの日記に記述あり）、芝白金に自宅を構えて山口蚊象建築事務所設立
- ・銀座資生堂で山口蚊象建築作品個展開催、ブルーノ・タウト来訪
- ★関口泰邸茶室及び会席（北鎌倉浄智寺内、2018年4月より浄智寺所有「宝庵」として一般公開）
- ・安井曾太郎アトリエ増築
- ☆日本歯科医学専門学校附属医院（山口の出世作、校長の息子の前衛画家中原実の作品ともいえる）
- ・日本電力宇奈月合宿所
- ・岡田邸
- ・松平頼寿像台座デザイン

満州国、ワシントン条約破棄、グロピウスがロンドンに亡命、明治生命館、築地本願寺、軍人会館、江戸川アパートメント、

1935年 33歳

- ・事務所所員は川裾逸美と角取広司（川裾が主に洋風建築、角取が主に和風建築を担当）
- ・宇奈月延対寺旅館増築
- ☆富山高小泉八雲図書館（ヘルン文庫。実現せずと見られていたが、1995年小泉八雲研究者染村絢子氏が富山大学図書館に資料を発見、設計図と若干異なり実現）
- ☆西竹一男爵邸、☆山田智三郎邸
- ・矢代幸雄邸
- ・林邸
- ★若槻礼次郎像台座デザイン
- ・著述『明日の住宅は？』（住宅1月号）

天皇機関説問題、土浦自邸、大阪十合百貨店、

1936年 34歳

- ・丸ノ内の三菱仲4号館に事務所を移す
- ・浅見静雄入所
- ・大森区久が原に転居（小林邸）
- ☆青雲荘アパート兼診療所
- ☆番町集合住宅（表紙写真参照、白樺派作家有島生馬がオーナー、超モダン高級集合住宅）
- ☆小林邸
- ★前田

青邨邸アトリエ(裏表紙参照、前田の展覧会目録には1939とある)
 ★山形梅月堂(現「Y.T.梅月館」) ★日本電力黒部第2発電所と関連施設(発電所建物、目黒橋、小屋平堰堤、沈砂池換気塔など二連の設計デザイン) ★箱根湯本山崎ダムと発電所

1937年 35歳
 タウトが日本を去りトルコへ、野々宮アパート、落水荘、

★『建築論』(三笠全書)を執筆するも公安検閲で出版不可
 ★酒井憶尋邸 ・二見邸 ・銀座ソシアル喫茶店 ・日本電力猫又合宿所

日中戦争、グロピウスがアメリカへ、宇部渡部翁記念会館、東京帝室博物館、愛知県庁舎、パリ万博日本館

1938年 36歳
 遠藤正巳入所
 ・荏原製作所本社社屋 ・中央工業大森工場宿舍及び青年学校
 ・著述『堰堤随感』(国際建築9月号)

国家総動員法、産業報国連盟、第一生命相互館、東京女子大学チャペル、慶応日吉寄宿舎

1939年 37歳
 ・千坂喜美子と結婚
 ・和田富朗、榊原博入所

・日本歯科医専杖痕ヒュッテ ・大森機械工養成学校 ・共同寄宿舎等
 ・荏原製作所羽田工場付属病院 ・築地小劇場改装(小山内薫らの演劇運動で有名な劇場、前川國男と共同の仕事)
 『ブルーノ・タウトの死』(「セルバン」1938. 3月号)

1940年 昭和15 38歳
 ノモンハン事件、国民徴用令、若狭邸、大阪中央郵便局

・矢内弘入所
 ★山口自邸 ★林芙美子邸(現在は新宿区立「林芙美子記念館」)
 本ゴム工員寄宿舎 ・川崎住宅元住吉労務者住宅群 ・荏原製作所寄宿舎 ・浦賀小学校奉安殿

大政翼賛会、日独伊三国協定、大日本産業報国会、皇紀二千六百年

記念式典、住宅宮団、大同都市計画、

1941年 39歳
 ・京橋銀一ビルに事務所移転、仲4号館は書斎
 ・渡刈雄、久保富夫、岡田敏雄入所

・秋田製鋼鶴見工場寄宿舎 ・佐々木象道アトリエ ・昭和飛行機信州工場 ・富士飛行機青年学校 ・横尾海軍中将邸
 ・著述『勤労者の住宅について』(座談会 『民芸』7月号)

太平洋戦争、岸記念体育館

1942年 40歳
 ・山口文象と称する(後年に戸籍も改名)
 ・小町和義(山口家に住み込み書生、後に平松建築事務所、現・番匠設計主宰、吉原幸雄、寺田弘、山口和男入所)

☆光海軍工廠寄宿舎 ・東京市大森工員寄宿舎 ・国産軽銀岩手工場寄宿舎 ・住友金属和歌山工場中松江第一寄宿舎 ・富士飛行機工員寄宿舎 ・上代たの邸 大東亜記念造営コンペ、

1943年 41歳
 ・熱海酒井邸 ・五味邸 ・荏原製作所羽田工場寄宿舎 ・日本機械製鎖工員寄宿舎 ・光海軍工廠松原口工員寄宿舎群 ・住友金属和歌山工場中松江第2寄宿舎 ・日泰文化会館コンペ応募落選

1944年 42歳
 ・徴兵等で所員激減、山口と小町のみになる
 ☆東北帝大大回流水槽高速力学研究所 ・住友金属和歌山中松江第3寄宿舎 ・荏原鑄造工員寄宿舎 ・神田地区防火改修計画

米軍による爆撃、防空法による都市に疎開命令

1945年 昭和20 43歳
 ・長野県小海村に家族で疎開

・3月東京大空襲で京橋事務所被災、丸の内三菱仲四号館へ
 ・9月仲4号館が進駐軍に接収されて閉鎖
 ・相模湖芸術家村構想(画家の猪熊弦一郎や脇田和らの疎開先だった神奈川県相模湖畔の村づくり構想で実現せず)

主要都市空爆被災、太平洋戦争敗戦終結、戦災復興計画

1946年 44歳

・「日本民主建築会」の世話人活動

・所員は山口栄一（山口の実弟で東京美校の出）、浅見、遠藤、小町（後に番匠設計主宰）、二見（後に日建設計社長、古橋

・著述『ブルーノ・タウト集合住宅の記録』（タウトより贈られた原稿を訳出）

1947年 45歳

新憲法、農地改革、ブレモス住宅、

・「新日本建築家集団」（NAU）結成に参加して、中央委員、建築運動史講座の講師など活動

・事務所を千駄ヶ谷の千坂邸に移す

☆ニエ・アルの碑

社会党内閣、6・3制教育、新日本建築家集団NAU

1948年 46歳

☆東京都交通局舎

★中西利男アトリエ ☆高松近代美術館（画家猪熊弦一郎の紹介）

・立教大学チャペルコンペ応募落選 福井地震、藤村記念堂

1949年 47歳

・2月事務所解散（小町和義氏によれば仕事が全くないため）

・猪熊弦一郎と企画して美術団体の新制作派協会に建築部を新設（池辺陽、猪熊弦一郎、岡田哲郎、剣持勇、谷口吉郎、丹下健三、前川國男、吉村順三、山口文象）

・早川巍一郎邸 ☆総同盟会館 ☆全織同盟会館 紀伊国屋書店、全造船会館、ジョンソンワックス研究所

1950年 昭25 48歳

・新制作派協会で神戸博覧会の施設を計画設計

・千葉邸・高林邸 ☆久ヶ原教会（猪熊玄一郎の紹介、戦後の代表作。現在の建物はRIA設計で建替え） ☆神戸博覧会序曲館等（新制作派協会として山口担当）

・明大大学院校舎計画 朝鮮戦争、特需景気

1951年 49歳

・この頃から新たな共同体としての設計組織を三輪正弘と模索 サンフランシスコ講和条約、日米安保条約、リーダーズ・

1952年 50歳

・山口・植田一豊・三輪正弘でRIAグループ（Research Institute of Architecture、通称リア）を結成

・三枝博音や財界人と「備菴会」（趣味の古美術研究会） ☆ロコストハウス（高橋邸）

・著述『我々の問題としてのロコスト住宅』（新建築10月号）

・著述『朝日住宅相談室』（婦人朝日連載） 日活国際会館、日本相互銀行、マルセイユアパート

1953年 51歳

・RIA建築総合研究所を接収解除となった丸の内三菱仲4号館にて設立（メンバーは山口・植田・三輪・山口栄一。現㈱アル・アイ・エー。三枝博音の東西文化交流研究所も同居。三輪寿壮（政治家、正弘の父）事務所も同じビル内）

・東京印書館工場 ・大田区政会館計画案

・著述『住宅志言』（新建築11月号） ・著述『住宅』（朝日新聞社） 広島世界平和祈念聖堂、東京厚生年金病院、法政大学

1954年 52歳

・RIAに近藤正一参加（後に㈱アル・アイ・エー社長、会長） 来日したクロピウスが山口と再会、日本歯科大学を見てから丸の内三菱仲四号館のRIAに来訪

・大和住宅団地 ★神奈川大学校舎研究室 ・石下保育園 ☆大日本製糖堺工場（新制作派協会として山口担当）

・小町邸・新滝ホテル ・千葉医院 ・化粧ビル

・著述『庶民住宅をどうするか』座談会、新建築4月号、

クロピウス来日、神奈川県立図書館・音楽堂、清家自邸、 渋谷東急文化会館、ロンシャンノートルダム教会

1955年 昭30 53歳

・この頃から建築家の思想についての発言が多くなる ☆神大3号館 ・東京印書館工場 ・下中彌三郎邸、 ・三宅艶子邸 ・神奈川県住宅公社共同住宅 ★ニエ・アルの碑（再建）

ダイジェスト東京支社、鎌倉近代美術館

近鉄建売住宅 ・ 全国工業デザインコンクール最優秀賞
・ 著述『昨日・今日そして明日へ』(新建築10月号) ・ 『RIAレポート』

55年体制、日本住宅公団、国際文化会館

1956年 54歳

・ この頃からぜんそくで苦しむことが多くなる

・ 東京板金川崎工場 ☆第一森ビル ★神大図書館

・ 著述『RIAレポート』

神武景気 チームX、秩父セメント工場、松井田町役場、

1957年 55歳

・ 山口瀧蔵の戸籍名を山口文象と改名

・ 東京部品蒲田工場 ・ 神大特別教室 ・ 麻生良方邸

・ 著述『家具はだれのものだ』(建築文化3月号)

広島平和記念資料館、東京都庁舎、読売会館、京都會館、

1958年 56歳

・ 集団設計方法と組織原理を模索しはじめる

☆神奈川大学本館 ・ 日本インターナショナル整流器工場

香川県庁舎、東京タワー、晴海高層住宅、スカイハウス、

1959年 57歳

・ RIAを株式会社建築総合研究所(登記にはRIAはないが一般には「RIA建築総合研究所」通称は「リア」として代表取締役所長、所員16名。

★朝鮮大学校 ☆大森教会 ・ 原町市民体育館

伊勢湾台風、岩戸景気、国立西洋美術館

1960年 58歳

・ 肺炎腫で入院

★美術家会館

1961年 59歳

・ 交通事故で骨折。

・ 三浦高校 ・ 天童木工デザインコンペ金賞

人工衛星、東京文化会館、千里ニュータウン(着工)

安保反対闘争、「都市のイメージ」(スリンチ)、

1962年 60歳

・ 朝鮮大学校で建築年鑑賞を受賞

・ RIA10周年記念パーティ(久が原山口邸)

・ 三浦高校 ☆神大体育館 ★久が原教会(建て替え)

・ 著述『対談 戦前戦中戦後』・『RIA特集』(建築6月号)

『ハイマートローゼ』(室内) 1962. 7月号

貿易自由化、高蔵寺NT着工、リチャーズ医学研究所、

1963年 61歳

・ 東大沖中内科入院

★山手教会 ・ 兼坂邸 ・ 神奈川大学(6、7号館、寄宿舎)

新産業都市、鶴見事故(三枝博音死す)、日生劇場、

ベルリンフィルホール、レスター大学、イエール建築学部

1964年 62歳

・ 日本建築家協会理事

・ 新制作座文化センター(現在は一部取壊し建替え、劇場と本部は使用継続、宿舎は空家) ★石原慎太郎邸 ・ 神大9・10・11号館

・ 著述『芝居小屋』(建築3月号) ・ 『前衛建築家の宙かえり』(新建築6月号)

1965年 昭40 63歳

・ 東京工業大学工学部建築学科非常勤講師(〜1970)

★伊豆富士見ランド ・ 大河内一男邸

ベトナム戦争、大学セミナーハウス、イコモス、

1966年 64歳

・ キリスト教の洗礼を受ける

・ 著述『プランニングにおける思想性』

★日本金属工業相模原工場

公害問題、美観論争、霞ヶ関ビル、パレスサイドビル

1967年 65歳

・ 朝鮮大学校設計で朝鮮民主主義人民共和国より受勲

☆神奈川大学記念講堂

革新系首長、塔の家

革新系首長、塔の家

革新系首長、塔の家

革新系首長、塔の家

革新系首長、塔の家

革新系首長、塔の家

革新系首長、塔の家

革新系首長、塔の家

革新系首長、塔の家

革新系首長、塔の家

革新系首長、塔の家

革新系首長、塔の家

革新系首長、塔の家

革新系首長、塔の家

1968年 66歳

・黄綬褒章授章

☆新大阪センシティー

・著述『思想と現実の狭間における建築家の意識』（都市住宅12月）

1969年 67歳

・新建築技術者集団に参加

・著述『WALTER GROPIUS』（建築家秋号）

・神奈川県建築コンクール賞

・最高裁判所コンペ応募佳作

1970年 昭45 68歳

大学紛争

・新建築家技術者集団に参加

・安保をなくして民主主義を進める建築技術者の会に参加

・著述『山口文象とRIA』（三書房）

大阪万博、新建築家技術者集団、東京海上ビル

1971年 69歳

★是の字寺

1972年 70歳

・12月10日講演「建築学生は何を学ぶか」（建築学生連絡会主催・東京大学駒場にて、200名参加。記録は「ある建築学生の群像 建築学生連絡会10年史」）

・講演「建築家はどのような」（日本建築家協会にて、記録は「建築家」夏月号）

・三國邸

・千葉邸

1973年 71歳

・この頃 建築家の戦争責任を問う講演をたびたび行う

★町田市郷土資料館（現・町田市立博物館）

・岡崎名鉄グランド

ホテル ★京都平安教会

オイルショック、シドニーオペラハウス、

1975年 昭50 73歳

・株式会社建築総合研究所取締役会長

・岡崎女子高校

1976年 74歳

★渋川市民会館

・対談『兄事のこと』（『建築をめぐる回想と思索』ききて・長谷川堯 倉敷アイビィ・スクエア、住吉の長屋

1977年 75歳

・株式会社建築総合研究所相談役

・この頃より山口文象作品集編纂始まり、5月4日に編集関係者と都内の作品を見て歩く（浜離宮南門橋、清洲橋、酒井邸、日本歯科大、朝日新聞社、鎌倉旧関口邸茶席等を見て、北鎌倉料亭でインタビュ、同行者は編集関係者の佐々木宏、長谷川堯、河東義之、植田実、伊達美徳ら）

・対談『近代建築の目撃者』（ききて・佐々木宏）

1978年 昭53年 76歳

・3月18日山口邸で創宇社建築会の会（参加者は、海老原、梅田、竹村、山口の創宇社建築会メンバーと、山口文象作品集編集関係者）

・4月29日講演「建築学科に入って建築を勉強する必要がある」（東京学芸大学にて、全都新入生歓迎フェスティバル、専門別セミナー建築学、参加15大学164名）

・5月19日急逝、6月1日青山葬儀所でRIAと日本建築家協会による葬儀、久が原教会の納骨室に眠る

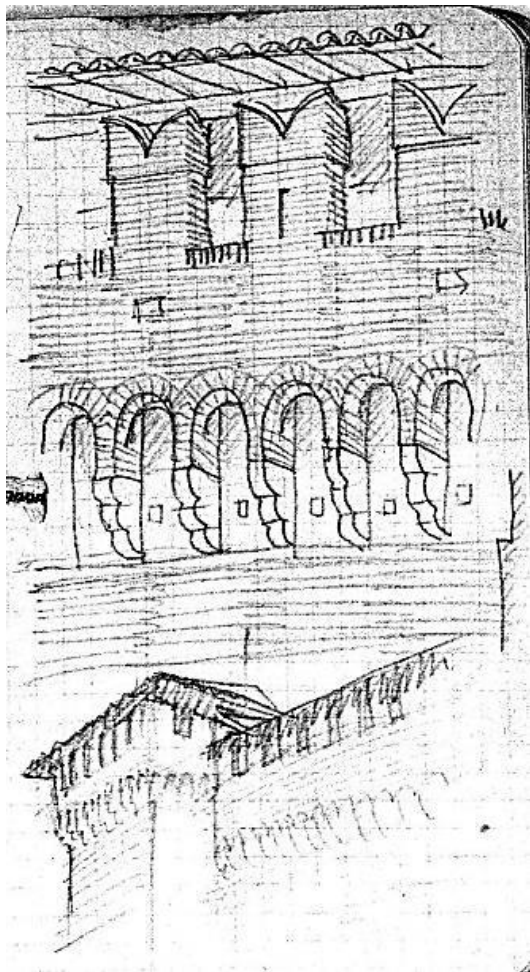
＊絶筆『地域に根をおろした建築を』（『建築士』

1983年

『建築家山口文象 人と作品』（刊行長谷川堯・佐々木宏・河東義之ほか著、RIA建築総合研究所編 相模書房）

2003年

『新編山口文象 人と作品』（伊達美徳、アール・アイ・エー）刊行



山口文象 1932年ヨーロッパでのスケッチ帖

まちもり叢書縁起

長い人生で仕事やその周辺、そして趣味でたくさん文章を書いてきた。いわゆる商業出版物は、共著も含めて10冊くらいだろうか。仕事でまとめた報告書なる印刷物は、200冊を越えるだろう。それらは商業出版ではないが、わたしとしては面白がつて、私見もたくさん書き込んだものである。雑誌への寄稿はもっと多いだろう。それらの昔の頃からの書き物を整理して、2000年末からインタネットサイト「まちもり通信」に掲載を始めた。そのうちに書き下ろしも載せるようになり、ついには2008年からブログ「伊達な世界」も始めた。ぼう大なファイル数のサイトになってしまった。実は10年くらいまえに、主なものをまとめて出版しようかと思つてその気になった。だが思い直した。これほどにインタネットが普及すると、紙情報よりもこちらのほうが優れていると思うようになった。絶版はないし、誰でもアクセスできるし、ほとんど無料だし、随時公開できるからだ。

だが問題は、読ませたい人がお読みかどうかとなると、インタネットではまことに心細いものがある。

これが書籍ならば、こちらから一方的に押し付けて読め読めもう読んだかと催促できるし、読むほうも持ち歩いて読める。

そこで考えた。ジャンルごとに、机上で編集、デザイン、プリント、装丁、製本までやる趣味の手作り本にして、そのときどきに出会う人に押し付け配布することにしたのである。

題して「まちもり叢書」、随時出版のDTPである。

今これをお読みの方は、読め読め被害者のお一人である。なにとぞ、古稀徘徊老人に免じてご容赦を。

2010年8月

まちもり散人



まちもり叢書 No.8 (私家版 非売品)

【補綴 2018 年版】 建築家 山口文象の世界

2011年2月7日 初刷
2019年10月10日印刷 56,57 冊目

著述:伊達美徳
装幀・印刷・製本・発行:まちもり散人

問合せ先
伊達美徳 DATE, Yosinori
dateyg@gmail.com 090-5802-3384

(自家製ですから毎回のプリントごとに部分改定します)

この本をお読み終えたら、どなたかお知り合いに差し上げてください
これは著者の本づくり趣味の作品のひとつであって、
売るためにつくった本ではないので
できるだけ多くの方がお読みくださると幸いです

まちもり叢書 趣味の自著卓上自作出版

——既刊(2018/12 現在)——

- No.01・父の十五年戦争／神主通信兵の手記を読み解く
- No.02・横浜B級観光ガイドブック・関外／戦後復興の残照
- No.03・あなたの街の都市計画はこんな会議で決めている
- No.04・波蘿薔薇時記／日々の小言僻言繰言寝言
- No.05・街なかで暮らす／あぶないマンション・いらないバイパス
- No.06・丸の内貼り混ぜ屏風／見世物としての建築
- No.07・かまくら冬夏／鎌倉の谷戸に暮らした日々
- No.08・建築家 山口文象の世界／作品と評伝(2018年改訂補筆)
- No.09・文化としての緑の環境／自然とは文化とは
- No.10・ネパール風土逍遙／カトマンズ・ボカラ・ルンビニ
- No.11・文化の風景／都市の伝統と鄙の民俗の風景を伝える
- No.12・風景批評の旅／斜めから裏から眺める風景
- No.13・美しい故郷に／高梁盆地の昨日と今日そして明日へ
- No.14・福島原発を世界遺産に／地震津波核毒の日々2011
- No.15・地震の自然と人間の文化／地震津波核毒の日々2012
- No.16・能楽を観に／唯一の趣味の能楽鑑賞のことなど
- No.17・法末四季賦／中越震災復興から次なる課題へ
- No.18・言葉の酔時記／怪しい日本語
- No.19・巨大災害があぶりだす日本列島の人間のはかなさ／地震津波核毒の日々2013
- No.20・都市の街並みを造った戦後復興期まちづくり／戦後都市建築遺産の再評価
- No.21・核毒の荒野へ／地震津波核毒の日々2014
- No.22・戦後の横浜都心復興の残照／防火建築帯による不燃化から都市デザインへ

——まちもり叢書別冊——

- ・山恋いエッセイ/大学山岳部同期傘寿Q人会記念
- ・J・コンドル和風建築と山口文象モダン建築の出会い/日本労働運動拠点の120年
- ・京の名刹 法然院方丈建築の謎/1960年大学卒業研究余録
- ・ふるさと高梁盆地懐旧エッセイ抄
- ・戦争に翻弄されたモダン建築と大学／慶應義塾日吉キャンパスの寄宿舎
- ・RIA初期再開発関連論考集
- ・戦後都市復興期の市民派建築家群像/小町和義と小町治男建築家兄弟の道
- ・宝庵由来記/モダニスト建築家山口文象の写し茶室建築
- ・東京駅周辺まち歩き独断偏見時空ガイド

・電網瓢論と孤乱夢

- ・伊達の眼鏡 <http://datey.blogspot.com/>
- ・まちもり通信 <http://goo.gl/TPE230>